新潟県埋蔵文化財調査報告書　第235集

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅴ

大坂上道遺跡Ⅲ

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅴ

大坂上道遺跡Ⅲ
（おおさかうえみち）

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は新潟市と福島県いわき市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、沿線町村と新潟市周辺を繋ぐ、重要な生活道路です。道路は新潟市から、ほぼ阿賀野川に沿い江戸時代は会津藩の川湊として栄えた津川に至り、そこで川と離れ山路にかかり福島県境の鳥井峠に達します。このうち阿賀町清川から同町谷花（やばな）間は、急峻な岸壁が阿賀野川に迫り通行規制区間に指定されています。これまで国土交通省によって様々な安全対策工事や改良が行われてきましたが、抜本的な対策は困難であり、阿賀野川の左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することになりました。この阿賀町津川から白川に至る全長 7.5 ｋｍ区間の新路線を「一般国道 49 号揚川改良」と呼びます。

新潟県教育委員会では 2005 年の阿賀町大字西にある上野東遺跡と現明嶽遺跡の発掘からから始まり、2006 年は大字西の大坂上道遺跡、猿額遺跡。2007 年は阿賀町大字谷花の萩原遺跡を調査しました。2009 年は向大浦・上空野中丸遺跡。2011 年度は大坂上道遺跡の２回目の発掘調査を行い、これまで合わせて７遺跡、８度の発掘調査を進めてまいりました。この発掘調査において東蒲原郡では初めて平安時代の住居跡を発見しました。さらに約 5,000 年前（縄文時代前期末）に火山灰を含んだ泥流が津川盆地を襲いましたが、この災害にもかかわらず縄文人は、洪水堆積物の上下で同じ土器形式を使っていることが判明しました。つまり、洪水が収まった後また戻って、たくましく生活していたことの証です。

今回の調査成果を周辺の遺跡のあり方とも合わせて検討し、津川地区の縄文時代の暮らしの一部を解明したいと思います。この報告書が地域の歴史を理解する一助になることを期待します。最後にこの発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた阿賀町教育委員会、並びに地元の方々。また、発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所、同津川出張所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年３月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本報告書は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西地内に所在する大坂上道遺跡の３回目の発掘調査記録である。

2　本調査は、一般国道 49 号揚川改良の建設に伴い、新潟県が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。発掘調査は、新潟県教育委員会（以下、県教委という）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社古田組に委託し、2011 年度に実施した。

3　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、2011 年度に埋文事業団が県教委から受託しこれに当たった。

4　出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は、大坂上道遺跡の略記号「11 大サカ」に出土地点、遺構名、層位等を併記した。

6　今回実施した発掘調査は、一般国道 49 号揚川改良の建設にかかわり 2006 年度に発掘調査した大坂上道遺跡西区の未調査区域 320㎡（２面）である

7　本書の図中で示す方位は、すべて座標北である。

8　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

9　本文中の引用文献は、著者及び発行年（西暦）を［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　観察表は、上層（縄文時代中期）及び下層（縄文時代前期）出土の土器・土製品、石器・石製品について掲載した。

11　本書の執筆は、田海義正（埋文事業団　調査課長代理）の指導のもと、藤田登（株式会社古田組　遺跡調査研究室）が当たり、編集は藤田が担当した。執筆分担は、第Ⅰ章１・第Ⅱ章１　田海義正、第Ⅰ章２・３・第Ⅱ章２・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章　藤田である。

12　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる（敬称略　五十音順）

遠藤　佐　　高橋　保　　宮尾　亨　　村上章久　　阿賀町教育委員会　　大字西集落

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 の 経 過 …… 1

A　本発掘調査（上層・下層） …… 1

3　調　査　体　制 …… 2

A　本 発 掘 調 査 …… 2

B　整　理　作　業 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 4

A　磐越自動車道・国道 49 号揚川改良事業に関連した遺跡調査 …… 4

第Ⅲ章　調 査 の 概 要 …… 8

1　遺 跡 の 現 況 …… 8

2　グリッドの設定 …… 8

3　基　本　層　序 …… 9

第Ⅳ章　遺　　構 …… 10

1　下層の遺構（縄文時代前期後葉以前） …… 10

A　概　　要 …… 10

B　遺　構　各　説 …… 11

2　上層の遺構（縄文時代中期前葉） …… 14

A　概　　要 …… 14

B　遺　構　各　説 …… 14

第Ⅴ章　遺　　物 …… 16

1　概　　要 …… 16

2　遺　物　各　説 …… 16

A　下層出土土器 …… 16

B　上層出土土器 …… 17

C　下層出土石器 …… 17

D　上層出土石器 …… 18

第Ⅵ章　ま　と　め

1　下層（縄文時代前期後葉）の遺構・遺物について ……20

A　遺　　構……20
B　遺　　物……21

2　上層（縄文時代中期前葉）の遺構・遺物について ……21

A　遺　　構……21
B　遺　　物……22

《要　約》……23
《引用・参考文献》……24
《観察表》……25

表　目　次

第１表　阿賀町 磐越自動車道・国道49号揚川改良関係の試掘確認調査の履歴 …… 3

挿 図 目 次

第１図　本発掘調査位置図…… 3
第２図　遺跡位置図…… 4
第３図　周辺の遺跡分布図…… 6
第４図　グリット設定図…… 8
第５図　基本層序模式図…… 9
第６図　調査区層序柱状図…… 9
第７図　遺構検出面模式図…… 10
第８図　石器出土分布図（上・下層）…… 19

図 版 目 次

［図面図版］

図版１　2006・2011年度調査区（下層）
図版２　2006・2011年度調査区（上層）
図版３　遺構配置図１（下層）
図版４　遺構個別図（1）下層　竪穴住居
図版５　遺構個別図（2）下層　竪穴住居
図版６　遺構個別図（3）下層　竪穴住居・竪穴様遺構
図版７　遺構個別図（4）下層　掘立柱遺建物・ピット・集石遺構
図版８　遺構個別図（5）下層 上段 ピット・下段 集石遺構分布図
図版９　下層　縄文土器・石器（1）
図版10　下層　縄文石器（2）
図版11　下層　縄文石器（3）
図版12　遺構配置図２（上層）
図版13　遺構個別図（1）上層　竪穴住居・土坑・ピット
図版14　遺構個別図（2）上層　掘立柱遺物・ピット
図版15　遺構個別図（3）上層　ピット・焼土分布図
図版16　上層　縄文土器・石器（1）
図版17　上層　縄文石器（2）
図版18　上層　縄文石器（3）
図版19　上層　縄文石製品
図版20　遺跡周辺の調査区域図

［写真図版］

図版21　遺跡遠景　上段：南上空から
　　下段：東上空から
図版22　上段：下層完掘（真上から）
　　下段：三角形岩版（上層出土）
図版23　下層遺構（1）　遠景・調査前・基本層序・掘立柱建物
図版24　下層遺構（2）　竪穴住居
図版25　下層遺構（3）　竪穴住居・竪穴様遺構・集石遺構
図版26　下層遺構（4）　土坑・ピット・フレイク集中・集石遺構
図版27　上層遺構（1）　掘立柱建物・竪穴住居・土坑
図版28　上層遺構（2）　土坑・ピット・遺物出土状況・焼土・完掘
図版29　縄文土器・石器１　（下層）
図版30　縄文土器・石器２　（上層）
図版31　縄文石製品　（上層）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

一般国道 49 号揚川改良事業は、阿賀町津川から同町白川に至る全長 7.5km の道路である。阿賀町清川から本尊岩・谷花地区に至る区間は、急峻な岩壁斜面が阿賀野川に迫る。この山裾を JR 磐越西線と国道 49 号が併走している。したがって国道の線形が悪く、幅員が狭いことに加え、度重なる土砂災害、岩石崩落及び雪崩の危険に晒され、通行規制区間（連続雨量 150㎜）に指定されている。国土交通省はこれまで対策工事や監視体制の強化に努めてきたが、抜本的な対策は困難であるため、対岸の阿賀野川左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することとした。全く新規に建設される道路であるが、これまで続けてきた改良工事の名を冠して、揚川改良事業と呼んでいる。

大坂上道遺跡は、磐越自動車道建設関連の試掘調査で 1990（平成 2）年 10 月に発見した。国道 49 号揚川改良事業に伴う調査は、2003 年に始まり 3 度の試掘確認調査を経て、遺跡範囲の拡大を把握した（図版 20）。本発掘調査は 2006（平成 18）年 4 月から 8 月まで上層 2,378㎡、下層 705㎡を対象に行い、縄文時代と平安時代の遺構と遺物を検出したが、今回の調査対象地の 320㎡の土地買収が終わっていなかったため、未着手となっていた（第 1 図）。残り部分は、県教委から埋文事業団に上下層合わせた 670㎡の発掘調査の依頼があり（平成 23 年 3 月 23 日付け教文第 1488 号の 2）、2011 年 5 月 9 日から 6 月末までの予定で発掘調査に入った。

2　調 査 の 経 過

A　本 発 掘 調 査（上層・下層）

5 月 9 日に調査を開始し、バックホーで表土の除去作業を行った。表土除去は、笹根や立木根等が絡む上面をバックホーで薄く剝ぎ、残層を上層文化層のⅡ層上面まで人力で掘削した。2006 年度調査区の西壁断面で基本層序を観察し、上層と下層の 2 面を認識した。

5 月 12 日から遺構検出のための精査を行った。竪穴住居・配石を伴う土坑・小ピット・焼土・性格不明遺構等を検出した。16 日から遺構掘削を開始し、併行して上層上面の地形測量を行った。OW20 区の配石を伴う土坑周辺で出土した石製品が岩版（2 点）であると認識し、さらに調査区東側（OW19 区）でも 1 点出土した。2006 年度調査でも 1 点出土していることを確認した。24 日、遺構の平面測量を行い、25 日上層の遺構掘削が終了し、完掘写真撮影のための精査を行った。26 日、ラジコンヘリによる空撮を行い、終了後ただちに間層（鹿瀬軽石質砂層）の掘削を人力により開始した。間層掘削は、Ⅳ層及びⅤ層上面までとし、下層遺構検出面の精査を行うとともに上面の地形測量を行い、遺構調査を開始した。

5 月 31 日、下層遺構の掘削を開始した。竪穴住居・土坑・ピット・集石遺構・焼土を検出し、小ピットの掘削を先行しながら、集石遺構→土坑→竪穴住居→焼土の順で作業を進めた。下層は層厚が薄いため、出土遺物は遺構内・外ともに番号を付し、測量して取り上げた。

6 月 20 日、ラジコンヘリにより下層遺構完掘写真撮影を行い、遺構平面測量を開始した。22 日、完

掘遺構の個別写真撮影及び平面測量を終了し、県教委から現地調査の終了確認を得た。

6月30日、国土交通省新潟国道事務所へ現地を引き渡した。

3　調　査　体　制

A　本 発 掘 調 査

調 査 期 間　2011（平成23）年5月9日～6月22日

調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調 査 受 託　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　木村正昭（専務理事・事務局長）　今井　亘（総務課長）

庶　　務　伊藤　忍（総務課班長）

総　　括　北村　亮（調査課長）

指　　導　田海義正（調査課長代理）

調 査 組 織　株式会社古田組

現場代理人　竹内一喜（遺跡調査研究室　管理長）

調 査 担 当　藤田　登（株式会社古田組　遺跡調査研究室　主任調査員）

調　査　員　建部真也（遺跡調査研究室　調査員）

B　整　理　作　業

出土遺物の洗浄は現地調査と並行して行ったが、7月から株式会社古田組遺跡調査研究室で、図面・写真の整理、出土遺物の注記・接合・復元・実測・拓本及び写真撮影を行った。

整 理 期 間　2011年7月1日～2012年3月31日

管　　理　木村正昭（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）

今井　亘（　同　総務課長）

庶　　務　伊藤　忍（　同　班　長）

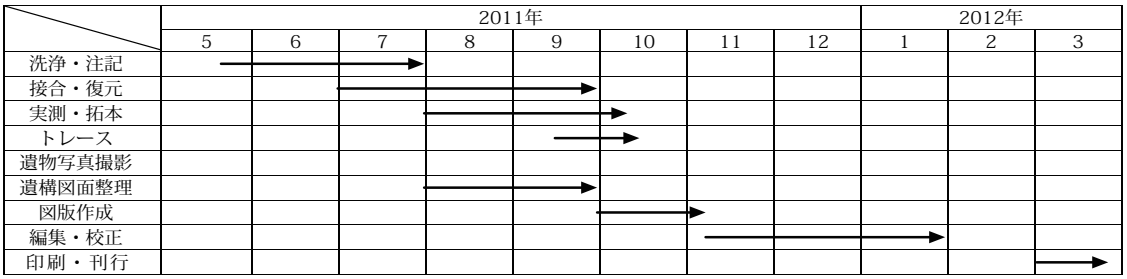
総　　括　北村　亮（　同　調査課長）

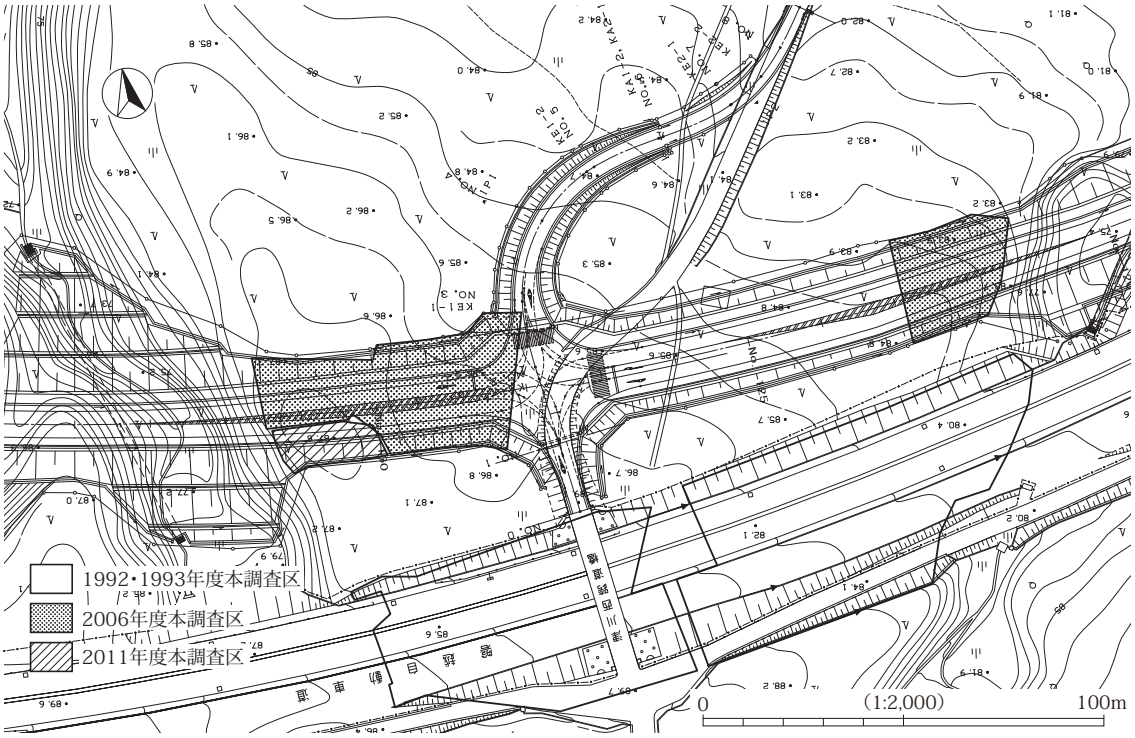
指　　導　田海義正（　同　課長代理）

調査組織　株式会社古田組

調査担当　藤田　登（株式会社古田組　遺跡調査研究室）

整理補助員　安達鉄雄　風間梢　黒岩拓也　小池美奈子　宮原正樹　渡部明美





第１図　本発掘調査位置図

	磐越自動車道								
	調査年	地区(工事) 名	調査対象面積㎡	試掘面積㎡	本発掘調査面積㎡	内　容	遺 跡 名	遺跡No.	備　考
①	1990年	大字西	5,300	232	2,945	縄文前・中期	大坂上道	33	
②			7,450	100	—				
②			5,300	233	2,945	縄文前・中期	大坂上道	33	
⑤		大字津川	75,480	1,070	—				
①	1991年	大字西	4,740	140	5,755	縄文前・中期	大坂上道	33	90年の保留分を含む
③			5,100	130	3,000	縄文前・中期	猿　額	36	
④			7,200	360	3,200	縄文前・中期	中　棚	35	
⑥		大字津川	38,600	1,070	—				
⑥			17,600	660	—				
⑥			27,900	1,019	—				
⑥			8,100	440	—				
		合　計	202,770	5,454	17,845				

	国道49号揚川改良								
	調査年	地区(工事) 名	調査対象面積㎡	試掘面積㎡	本発掘調査面積㎡	内　容	遺 跡 名	遺跡No.	備　考
⑦	2001年	大字西 工事用道路	7,000	865	—	縄文後期	六角原	3	
⑧	2003年	赤岩町道	1,835	273	273	縄文後期	上　野	61	
⑨		赤岩橋橋台	3,000	77	—				
⑨		大坂上道遺跡隣接	6,340	192	2,960	縄文中・後期	大坂上道	33	
⑩		猿額遺跡隣接	1,500	91	3,000	縄文前・後期	猿　額	36	
⑪	2004年	大字西字現明嶽	1,400	80	750	縄文中・後期	現明嶽	62	
⑫		大字西字中棚・上野	9,760	324	1,000	縄文前期	上野東	63	
⑫						縄文後・晩期	中棚北	64	周知化のみ
⑬	2005年	大字西字頭無	9,200	278	—				
⑭		猿額遺跡隣接地	1,265	38	180		猿　額	36	
⑮	2006年	大字津川	19,000	169	保留	縄文中期	(向大浦)		
⑯		大坂上道遺跡隣接	770	44	—				
⑮	2007年	大字津川	21,050	726	4,000	縄文中期・平安	向大浦	218	
⑰		大字芦沢	9,576	264	—				
⑱	2008年	工業団地付近	3,136	243	500	縄文・近世	上空野中丸	219	
⑲		文化福祉会館裏	13,444	272	—				
⑳	2009年	大字西字中棚	1,110	72	—		中棚北	64	本調査不要
㉑		大坂上道遺跡進入路	690	89	—				
㉒		大字津川 診療所近く	5,850	220	—				
		合　計	115,926	4,317	12,663				

※丸付数字は図版20の調査地点を示す

第１表　阿賀町 磐越自動車道・国道49号揚川改良関係の試掘確認調査の履歴

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

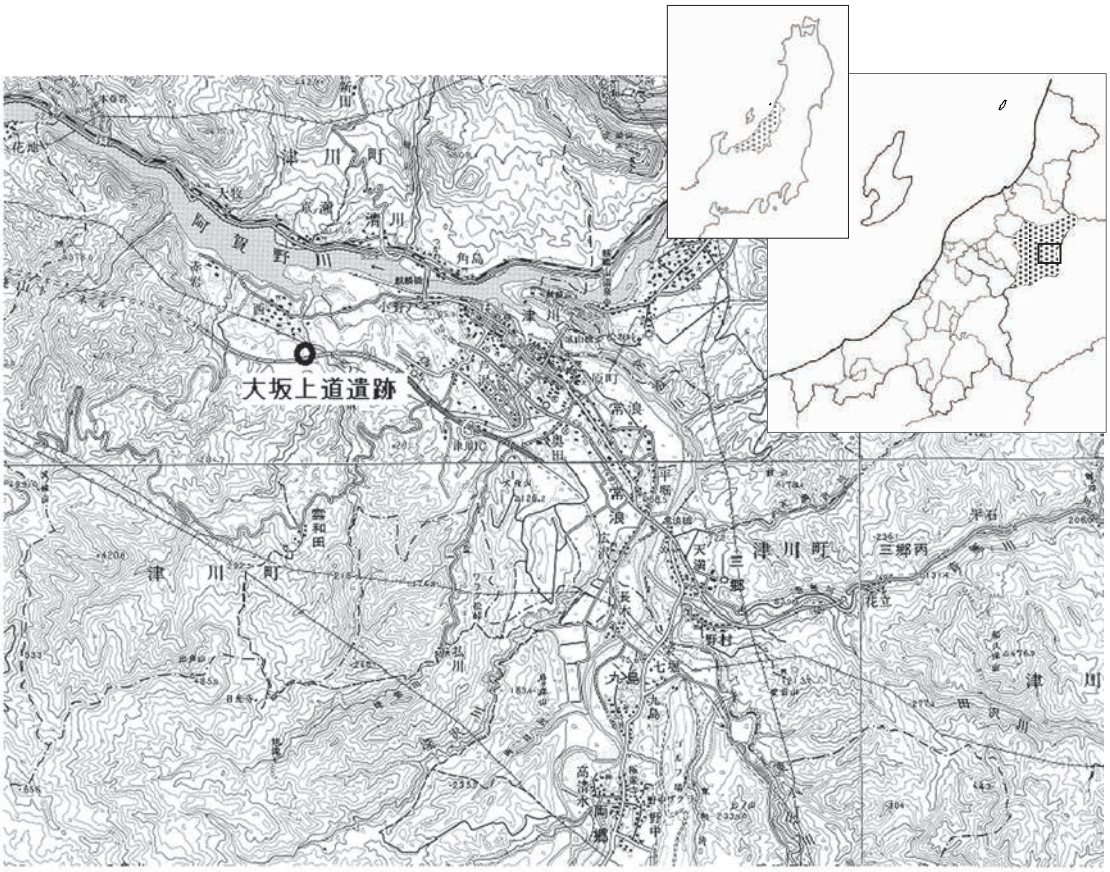
1　遺跡の位置と周辺遺跡

阿賀町は、新潟県の北東部に位置し、福島県と県境を接する山間の町である（第２図）。江戸時代は会津藩領に含まれ、河口の新潟と結ぶ阿賀野川に川湊が整備され、荷の往来とともに繁栄した。

遺跡のある津川地区は、町の中央を阿賀野川とその支流の常浪（とこなみ）川が西流する。町の中心部は平坦だが、周囲は山地に囲まれており、北に飯豊（いいで）山塊、北西に越後山脈が南北に走り、山に囲まれたこの地域を津川盆地と呼ぶ。河岸段丘は阿賀野川左岸に発達しており、ここを磐越自動車道や国道 49 号揚川改良事業の路線が通り、遺跡が相次いで発見されることとなった。なお、地理的・歴史的環境については、既刊報告書第 186 集を参照。

A　磐越自動車道・国道 49 号揚川改良事業に関連した遺跡調査

磐越自動車建設に関連して、旧津川町地内では大字西で 1990（平成２）年 10 月から試掘調査を開始した。この調査で大坂上道遺跡、猿額遺跡、中棚遺跡を新たに発見し（第３図・図版 20）、1992 年から本発掘調査を実施した。国道 49 号揚川改良事業に伴う遺跡の試掘確認調査は、2001 年の六角原遺跡の確認調査から始まり、2009 年まで用地の取得状況に合わせて行った。この２つの道路関係の試掘確認調査は



第２図　遺跡位置図　　○ 大坂上道遺跡

（国土地理院発行　平成11年「津川」「野沢」平成9年「御神楽岳」平成元年「大日岳」1:50,000原図）

合わせて 29 回実施した。試掘確認調査対象面積 318,696㎡に対し、9,771㎡を発掘調査した。その結果、新たに９遺跡を発見し、周知遺跡１か所の範囲拡大を把握した（図版 20 折り込み）。本発掘調査が必要となった面積は 30,508㎡である（その後の本発掘調査で調査面積に変更が生じている）。第３図に『埋蔵文化財包蔵地調査カード』○、発掘調査報告書△、報告書・事業団年報・調査カード□を基に遺跡範囲を示した。

次に、これまでの道路事業に関連した県教委の発掘調査を概観する。

大坂上道遺跡　　阿賀野川左岸の河岸段丘にある。河床から比高約 40 m、両側を沢に刻まれた幅約 180 m、標高約 84 mから 88 mの平坦な土地である。戦後は畑に開墾されたが、昭和 30 年代以降は杉が植林されてきた。磐越自動車道関連で 1992 年に約 4,200㎡、1993 年に約 4,500㎡の発掘調査を行った［滝沢ほか 1995］。そこでは厚さ 10㎝から 25㎝の黄褐色シルト層（福島県金山町沼沢火山供給の火山灰二次堆積土／鹿瀬軽石質砂層と呼ぶ）の上下に遺物包含層があった。上層からは土坑７基、フラスコ状土坑２基、焼土坑２基、集石２基を検出し、縄文時代中期前葉の阿玉台式、五領ヶ台式などの関東系の文様を持つ土器のほか、北陸系の土器も出土した。また、縄文時代晩期と平安時代の土坑も検出した。下層の明灰粘土の遺物包含層からは、縄文時代前期末葉以前の遺構を検出した。遺構は土坑８基、焼土坑２基、集石土坑１基などであるが、土器は少なく大木６式期の１点のみであった。この発掘調査で鹿瀬軽石質砂層の下層にも縄文時代前期末葉以前の遺構や遺物が包含されていることが明確となった。

揚川改良事業に伴う一度目の発掘調査は、2006 年４月から８月まで行い、上層 2,378㎡、下層 705㎡の発掘を実施した［桐原ほか 2008］。上層からは平安時代（9 世紀後半から 10 世紀初頭）の竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟のほか、阿賀町では初例となる腰帯に装う石銙巡方が出土した。縄文時代の遺構では、土坑の片側に２個体分の中期前葉の土器片が寄せ置いた状態で出土したことから、甕被葬を示すものと考えられる。土偶１点と三角形岩版も１点出土した。

猿額（さるびたい）遺跡　　磐越自動車道関連で 1992 年、1993 年に合わせて 3,200㎡の発掘調査を行った［滝沢ほか 1995］。遺跡は標高 92 mから 99 mの上段と標高 84 mから 88 mの下段に分けられる。上段には鹿瀬軽石質砂層の堆積が及んでいない。旧石器時代の彫刻刀形石器１点、石刃１点、縄文時代草創期の尖頭器４点など注目すべき石器が出土した。長さ 14.4㎝の神子柴（みこしば）型尖頭器の優品も１点含まれる。下段では鹿瀬軽石質砂層を挟んで上下で縄文時代前期末葉の大木６式土器が出土した。この出土状況は鹿瀬軽石質砂層の堆積時期を考古資料の上から確定する手懸りとなった。

揚川改良事業に伴う発掘調査は、2006 年８月から 12 月に上下層合わせて 3,360㎡を対象に実施した［桐原ほか 2008］。上層の遺構は中期初頭のピット２基のみであったが、鹿瀬軽石質砂層が最大 60㎝も堆積したその下層からは、縄文時代前期末葉以前の土坑６基、炭化物集中１基、土器集中地点１か所を検出した。土器は縄文時代前期前葉のものが３点破片で出土したほかは、前期末葉が主体を占める。

中棚（なかだな）遺跡　　磐越自動車関連で 1992 年に 2,300㎡の発掘調査を行った［滝沢ほか 1995］。遺跡が立地する段丘の幅は約 110 m、標高約 95 mから 99 mを測る。土坑４基、フラスコ状土坑１基、集石土坑１基を検出した。縄文時代前期末葉～中期初頭を中心とした遺跡である。土器に比べて石器が多く、４号土坑からは同一母岩（頁岩）の大型剥片が 10 点まとまって出土した。石器製作工程を考える上で興味深い資料である。

六角原遺跡　　国道 49 号揚川改良事業にかかる工事用道路に関連して 2001 年に確認調査を実施した［渡辺 2002］。遺跡は西集落の北西、阿賀野川に臨む津川面と呼ぶ河岸段丘の標高約 63 mから 71 mにある。鹿瀬軽石質砂層の上部の黒褐色土から縄文時代のピットや風倒木痕を検出したが、遺構は少ない。

第３図　周辺の遺跡分布図

（「阿賀町森林計画図１：5000」に加筆縮尺任意）

後期初頭の三十稲場式土器や板状打製石器１点、玉髄製不定形石器２点などが出土した。ここでは約１mの鹿瀬軽石質砂層の下位に黒褐色粘土があるが縄文前期以前の遺跡は確認できなかった。

上野東（うえのひがし）遺跡　国道 49 号揚川改良事業で 2005 年に 1,410㎡を発掘調査した［高橋ほか 2006］。立地する段丘は標高約 92 mから 94 mを測り、東側には沢がある。津川盆地では最も高い標高 94 mで鹿瀬軽石質砂層を検出した。縄文時代前期後葉から末葉の竪穴住居１軒、土坑６基、焼土７基などを検出した。縄文時代の遺物は大木５式、６式古段階の土器が多いが、東関東に中心を持つ浮島Ⅲ式や興津Ⅰ式土器も出土した。石器では、押出型ポイントが１点出土し、蛇紋岩製の磨製石斧の出土などは、各地との交流を窺わせる。東蒲原地域では初例となる、平安時代の竪穴住居を１軒検出した。住居及び周辺から９世紀後半から 10 世紀初頭の土師器と須恵器が出土した。

現明嶽（げんみょうだけ）遺跡　国道 49 号揚川改良事業で 2005 年に上下２層合わせて 1,270㎡を発掘調査した［高橋ほか 2006］。遺跡は津川盆地の阿賀野川左岸にある河岸段丘の中でも最西端の赤岩トンネル坑口付近にある。東下を流れる赤岩川と山際の沢に刻まれた幅約 20 mの細尾根状の段丘上にある。鹿瀬軽石質砂層は上下の縄文時代層を分けているが、地形の傾きで厚さ 60㎝から堆積しないところまであった。下層から縄文時代前期後葉から末葉の焼土１基、集石１基、遺物集中地点４か所を検出した。一時的、季節的な利用と推定できる。縄文土器は東北系の大木５ｂ式から大木６式新段階に加え、東関東系の浮島式や興津式、北陸系の鍋屋町式も出土した。上層では縄文時代後期中葉の竪穴住居３軒、土坑 10 基、焼土１基、集石１基などが出土している。土器は関東系・東北系それぞれの加曽利Ｂ２式に近似する。土偶やミニチュア土器、スタンプ形土製品、石棒などの精神生活に関わる遺物が出土した。

上空野中丸（かみくうのなかまる）遺跡　国道 49 号揚川改良事業で 2009 年に 500㎡を発掘調査した［小村ほか 2011］。標高約 97 mの河岸段丘西縁にあり、縄文時代の石器や中世陶器などが出土したが、試掘で予想された縄文時代の遺構は検出できず、近世以降の土坑４基、溝３条、ピットを検出した。

向大浦（むかいおおうら）遺跡　国道 49 号揚川改良で 2009 年に上下層合わせて 8,000㎡を発掘調査した［金内ほか 2011］。河岸段丘面の高さは、検出標高約 79 mから 81 mを測る。鹿瀬軽石質砂層の下部は、縄文時代前期以前の陥穴 12 基、土坑２基を検出した。前期以前は猟場として利用されていたものと見られる。遺物は東北系の大木５b 式土器が出土した。上層からは縄文時代中期前葉、平安時代の遺構と遺物を検出した。中期前葉はピット２基のみで、遺物量に比べて遺構が少ない。中期の遺跡の中心は調査区北側の段丘先端部と推測される。平安時代の遺構は、竪穴住居２軒、掘立柱建物１棟、土坑７基、焼土１基などである。土器の年代は９世紀後半から 10 世紀初頭である。文字か記号かは判別できないが東蒲原郡内で初の墨書土器が１点出土した。

これらの調査から阿賀野川左岸の標高 80 mから 90 m前後の河岸段丘は、後期旧石器時代から人の痕跡が見える。縄文時代前期後半には小規模な集落が営まれ、中期前葉まで続く。中期中葉頃から遺構が少ない傾向になる。後期は細尾根に竪穴住居が造られた現明嶽遺跡を除き、全体としては認められなくなる。中期以降は一段低い段丘（津川面）である現在の集落付近に遺跡の主体が移るものと考えられる。平安時代の竪穴住居や掘立柱建物も東蒲原郡内において初めて発見された。いずれも土器から見ると９世紀後半から 10 世紀初頭に営まれたと考えられる。古代越後の他地域の開発とも共通する在り方が読み取れる。

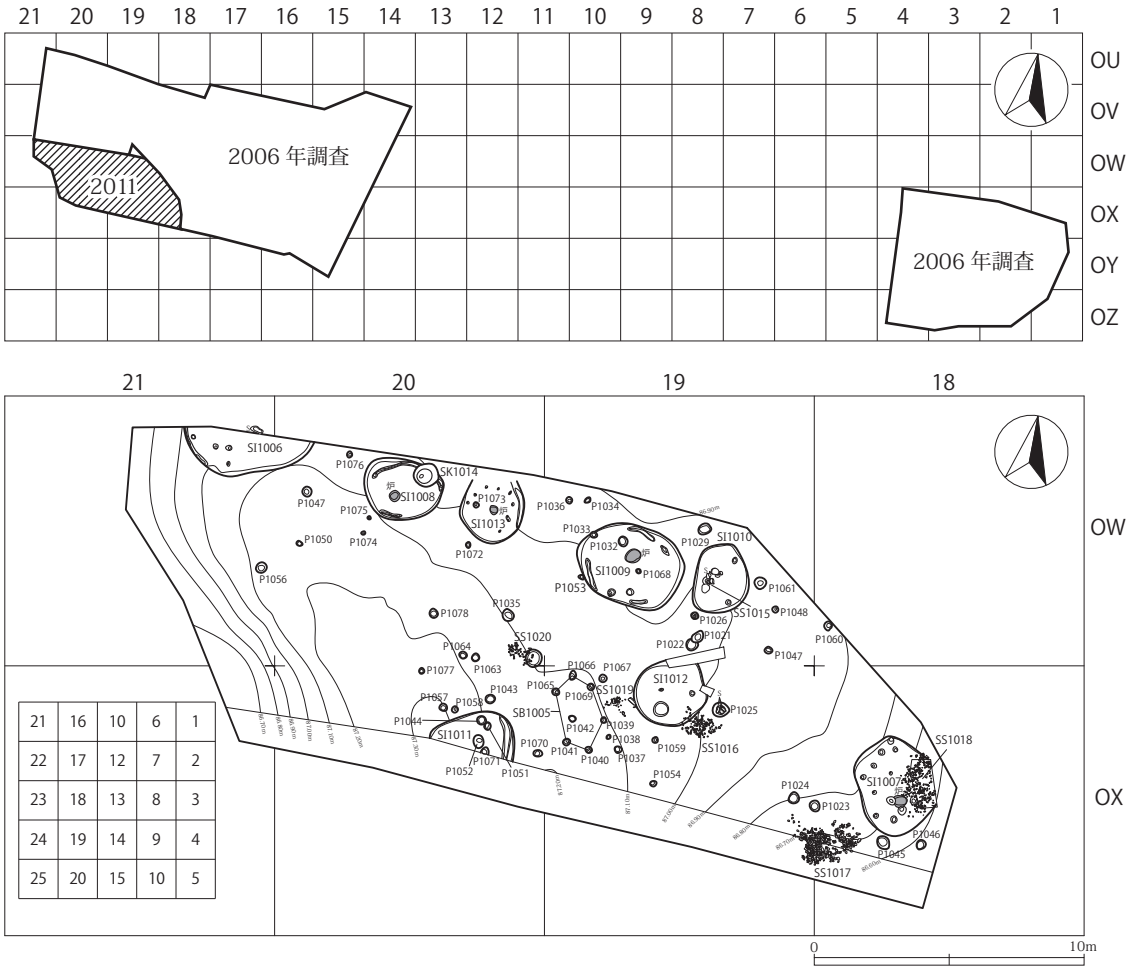
第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　遺 跡 の 現 況

大坂上道遺跡の所在する「津川盆地」は、新生代堆積盆地である新潟堆積盆地の東縁に位置している。本発掘調査区は、2006 年度調査した西区の南西隅に当たる未調査区域である。同遺跡の立地環境については大坂上道遺跡Ⅱ［桐原ほか 2008］、萩原遺跡［小川ほか 2008］で詳細に報告されている。

2　グリッドの設定

本発掘調査区は、前述のとおり大坂上道遺跡Ⅱ〔前掲〕の未調査区域であることから、前調査時の設定によるグリットを基にした。よって、基準点は、磐越自動車道の道路法線 TP3-1（X=186692.861,Y=81990.994）と OY18 区の杭（X=186690.219,Y=82020.143）に基づき設定した。大グリットと小グリットの呼称は同様の組み合わせで表記した。



第４図　グリッド設定図

3　基　本　層　序

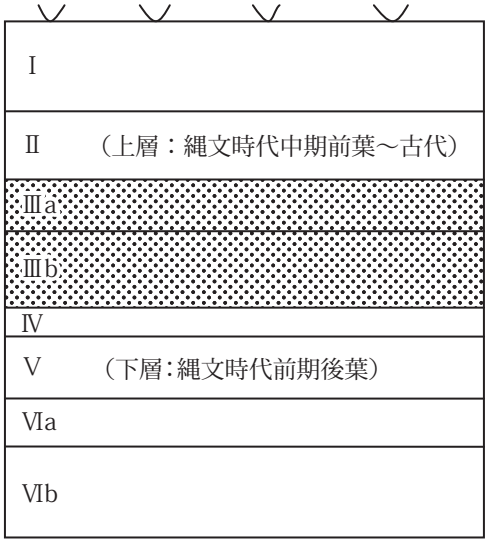
本発掘調査区の基本層序は、大坂上道遺跡Ⅱのものに準じて設定しているが、Ⅲ層以下の分層については今調査で独自の細分を行った。以下、Ⅰ層～Ⅵｂ層の説明とする（図版 23）。

Ⅰ層　表土:層厚５～ 15cm の黒褐色土（10YR2/3）
未分解腐植土が主体で、粘性・しまりなし。

Ⅱ層　暗褐色土：層厚 10 ～ 15cm（10YR3/4）
粘性ややあるがしまり弱い。縄文時代中期～古代の遺物包含層。

Ⅲａ層　にぶい黄褐色土:層厚20～30cm（10YR5/4）
砂質で粘性・しまりが弱く、Ⅲｂ層への漸移層である。（鹿瀬軽石質砂層＋暗褐色土）

Ⅲｂ層　黄褐色（黄色）砂質土 : 層厚 20 ～ 35cm（10YR6/6）
鹿瀬軽石砂層（沼沢火山灰の２次堆積層）
粘性弱いがしまっている。（無遺物層）



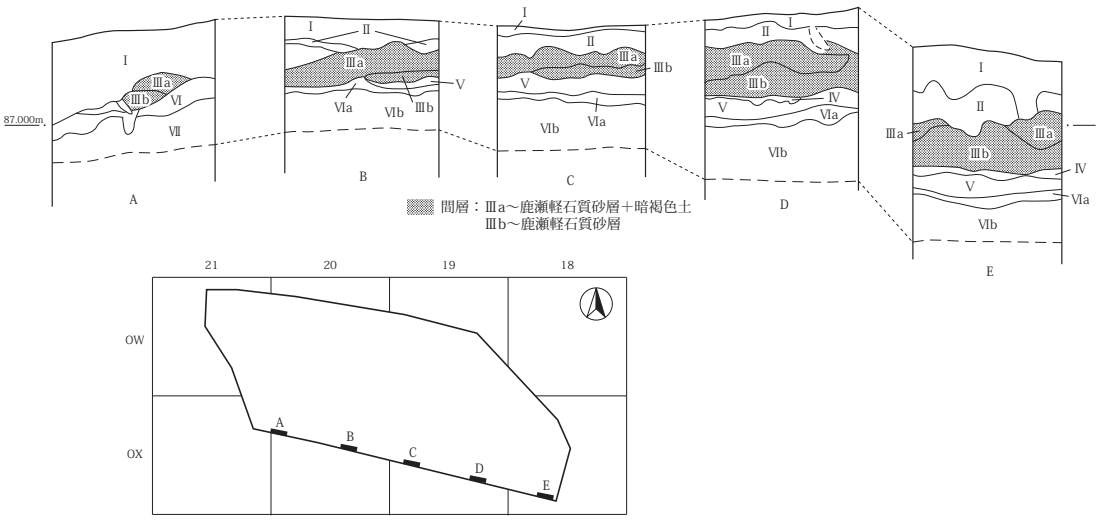
第５図　基本層序模式図

Ⅳ層　褐灰色粘質土 : 層厚５～ 10cm（7.5YR6/1）
黒褐色土と黄灰色粘土粒の混合土
粘性・しまりあり。部分的に堆積が薄くなる。Ⅴ層より黄色砂粒が多く色調は明るい。

Ⅴ層　暗褐灰色粘質土:10 ～ 15cm（10YR4/1）
粘性・しまりあり。細石粒を若干含む。縄文時代前期の遺物包含層。

Ⅵａ層　黄褐灰色粘質土：層厚５～ 10cm（10YR6/2）
粘性・しまりあり。２～３cm 大の小礫を含む。Ⅵｂ層への漸移層。この上面は遺構検出面

Ⅵｂ層　淡黄色粘質土：（2.5Y8/4）
粘性・しまり強い。５cm 大の角礫を含む。地山



第６図　基本層序柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

本遺跡周辺における縄文時代（前期以降）の遺跡調査は、近年では磐越自動車道・常浪川ダム・一般国道 49 号揚川改良事業等、近年の開発行為により多くの遺跡が調査され、貴重な資料が得られている。そうした中で、縄文時代前期～中期あるいは後期の遺跡では、沼沢火山噴出物の二次堆積層とされる鹿瀬軽石質砂層を間層とした上下二枚の包含層が確認されている。前期（下層）の調査例では阿賀野川支流の常浪川左岸に所在する北野遺跡［高橋ほか 2005］等が代表的で、前期後葉～末葉の集落跡（環状の拠点集落）が厚い鹿瀬軽石砂質層に覆われ完全パックの状態で検出された。中期（上層）では、キンカ杉遺跡［遠藤 2006］、屋敷島遺跡［中島ほか 2006］等が、拠点的な大規模集落の可能性を示唆している。

今回の調査では、下層から前期後葉以前の遺構（竪穴住居・竪穴様遺構・掘立柱建物・土坑・小ピット）・遺物（土器、石器）、上層から中期前葉の遺構（竪穴住居・土坑・小ピット・焼土）・遺物（土器、石器、石製品）を検出した。下層における遺構構築面はⅣ層（褐灰色粘質土）上面ないしⅤ層（暗褐灰色粘質土）中と考えられるが、いずれも層厚が薄く平面精査による検出は困難であった。又、上層もⅡ層（暗褐色土）の包含層が薄いことから、上面での検出は困難であった。したがって遺構検出面は、下層がⅤ層ないしⅥ層上面、上層はⅢａ層ないしⅢｂ層上面である。（間層のⅢａ層はⅢｂ層の鹿瀬軽石質砂層上に再堆積したと考えられ、暗褐色とⅢｂ層の混合土である。つまり、軽石質砂層が段丘上に堆積した後も数回にわたり粗粒物質を含んだ土層が堆積していたと推測される。又、Ⅲａ層は調査区中央部では極めて薄い）。下層遺構検出は、間層のⅢａ･ｂ層（層厚 40 ～ 65cm）を手掘り作業で行い、Ⅳ層上面（Ⅴ層の漸移層）で最初の精査で遺構プランの確認を行い、明確に検出できない区域については、Ⅴ層・Ⅵ層上面で更に精査し各遺構を検出した。上層は、Ⅰ層（表土）を重機で掘削し、Ⅱ層上面を人力で掘り下げ、主にⅢａ層で遺構の検出を行った。

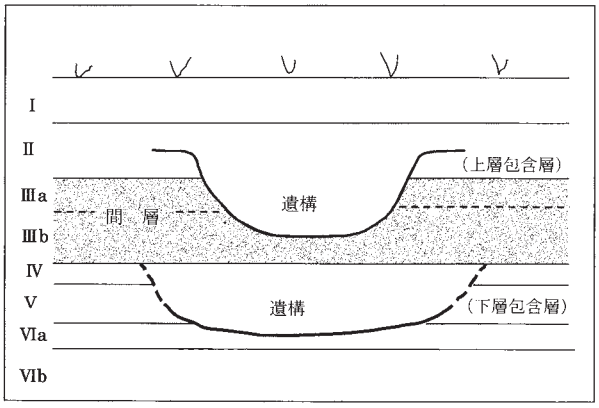
各遺構の様相は、遺構覆土中及び包含層出土の遺物が極めて少ないことから、遺構構築時期等の詳細は不明である。そこで本稿では、二枚の検出層位における所属時期を、下層は前期後葉以前に所属する遺構、上層は中期前葉に所属する遺構という認識で大別している。

以下、下層・上層別に遺構・遺物の概要を述べる。

1　下 層 の 遺 構（縄文時代前期後葉以前）

A　概　　要

小規模な調査区（320㎡）であった本調査では、Ⅳ・Ⅴ層（大木６式土器期に堆積したとされる鹿瀬軽石質砂層下）で、掘立柱建物１棟、竪穴住居６軒、土坑１基、竪穴様遺構２基、ピット 53 基、礫集中区６か所を検出した。なお、竪穴様遺構は、焼土（炉）などを未検出のため、住居と認識できないものを一括した。各遺構の説明に当たっての略号・番号は、前掲の大



第７図　遺構検出面模式図

坂上道遺跡Ⅱに準じるもので、下層・上層の遺構番号は通し番号をそのまま引き継ぎ付した。したがって、本報告書で記載する観察表の記載項目も共通項目とした。

B　遺　構　各　説

（1）掘 立 柱 建 物（図版３・７・23）

調査区内に散在するピットの中で、SI1010（OX20 区）と SI1002（OX19 区）の中間で検出した。炉跡（焼土）が検出されていないため、ピットの規模、覆土、深さなどの特徴が類似する点から配列の規則性を見出し、現地で検討したものである。

SB1005（図版３・７・23）

OX19 区に位置する。標高値 87.1 mである。平面形は六角形を呈するが柱間は均一ではない。主軸となる長軸は 2.84 m、短軸は 1.39 mを測る。主軸方向はＮ－ 12°－Ｗを示す。柱穴は、平面形が円形ないし楕円形で、長径 20 ～ 35cm、短径 21 ～ 28cm、深さ 10 ～ 22cm を測る。覆土は P1040・1041 は、黒褐色粘質土だが他はいずれも暗褐色粘質土である。地面直上では、貼床・炉跡・焼土などの痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

（2）竪穴住居・竪穴様遺構（図版１・３～６・24・25）

下層の遺構検出面であるⅤ層ないしⅥ層は、南側から北及び北西側へ緩傾斜（標高 87.3 m～ 86.6 m）する。西側（OW・OX21 区）は台地の縁辺部で南西の沢へ急傾斜となる。竪穴住居・竪穴様遺構の分布は、標高約 87 mの等高線上に６軒が並び、東西に弧状に広がる（図版3）。竪穴住居は主にⅤ層（下層包含層）上面で検出した。遺物包含層の褐灰色土中でも竪穴住居などの遺構は、より濃色の落ち込みとして検出できた。竪穴住居及び竪穴様遺構は掘り込みも浅く、SI1006 の石器３点以外は出土遺物が皆無であることから、確証はないが、炉跡（焼土）、周溝、壁沿のピット列などから６軒を竪穴住居と認定した。

また、所属時期については、調査区内で前期後葉の土器がわずかに出土しているが、遺構内で鹿瀬軽石質砂層の落込みが確認されないことなどから、縄文時代前期後葉以前としておく。ただし、各遺構が同時期に存在していたかは断定できない。

SI1006（図版３・４・24）

OW20・21 区に位置し、標高値 86.9 ～ 87.1 mである。竪穴の北側半分は 2006 年度調査区になる。

現存の平面形はおおむね楕円形を呈している。長軸 4.86 m、短軸 1.73 m（現存）、検出面からの深さは 22cm を測る。長軸方向は、おおむね東西を示す。覆土は 1 層の暗褐色粘質土と 2 層のにぶい黄褐色土に細分される。床面は掘形底面である。平坦で全体的に硬くしまっているが、西側へわずかに傾斜している。壁面はやや傾斜して立ち上がり、掘り込み面はⅣ層上面である。周溝は西側壁沿いに検出されたが主柱穴は見られず、西側床面に３基の小ピットが検出されたのみである。ピットの平面形はやや楕円形を呈し、深さは８～９cm を測る。

遺物は、覆土中から箆状石器（図版 10 － 26）・磨石（図版 11 － 32）・石皿（図版 11 － 36）等の礫石器が出土したが土器の出土は見られなかった。箆状石器は南西部の壁寄り、磨石・石皿はほぼ中央から出土した。

SI1007（図版３・４・24）

OX18 区に位置し、標高値 86.6 ～ 86.8 mである。平面形は不整の楕円形を呈しているが、東壁側の一部は集石遺構と重複関係にあり欠損している。長軸 3.30 m、短軸 3.15 m、検出面からの深さは 33cm

を測る。長軸方向はN－10°－Wを示す。覆土は、１・２層の暗褐色粘質土と３層のにぶい黄褐色土に細分される。床面は、凹凸が著しいが全体的に硬くしまっている。壁面は、北側と西側はやや傾斜して立ち上がり、東側は集石遺構により不明である。検出面はⅤ層上面である。地床炉は竪穴中央の南寄りに位置している。炉の規模は、長径53cm、短径45cm、焼土及び焼土化した部名の厚さは８cmを測る。竪穴内部に点在するピットを14基検出したが、主柱穴と思われるピットはない。平面形はいずれもほぼ楕円形を呈している。

Ｐ３～５は深さ18～23cmを測るもので、ほかは10cm未満のものである。覆土は灰黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土に細分され、主体はⅤ層とⅥ層の混合土である。これらのピットは、床面検出時に確認したものだが、竪穴住居との関係については不明である。遺物は出土していない。

SI1008・SK1014（図版３・５・24）

OW20区に位置し、標高値87.0～87.1ｍである。竪穴平面形は不整の楕円形を呈しており、北東壁でSK1014と重複し、これに切られている。長軸2.93ｍ、短軸2.30ｍ、検出面からの深さは25cmを測る。長軸方向はN－80°－Eを示す。検出面はⅤ層上面である。覆土は、１層の黒褐色粘質土、２層のにぶい黄褐色粘質土、３層の灰黄褐色粘質土に細分される。床面はやや固くしまっている。壁面はゆるい傾斜で立ち上がる。周溝は北壁沿いでは半周しているが、南壁沿いでは長さ約80cmを検出した。幅10cm、深さ８cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土である。地床炉は南西寄りに位置している。炉の規模は、長径40cm、短径38cm、焼土及び焼土化した部分の厚さは６cmを測る。

SK1014は、竪穴検出時に確認したもので、土層断面でSI1008の覆土を切って構築していることから、竪穴住居（SI1008）廃棄後の所産と考えられる。平面形は楕円形を呈し、長軸1.09ｍ、短軸0.83ｍ、検出面（SI1008覆土１層上面）からの深さは37cmを測る。長軸方向はN－70°－Eを示す。覆土は、１層の黒褐色土、２層のにぶい黄褐色粘質土、３層の灰褐色砂質土に細分される。全体的に小礫が含まれ粘性が強くしまっており、埋め戻しの可能性が高い。断面形はスリバチ状を呈す。両遺構ともに遺物は出土していない。

SI1009（図版３・５・25）

OW19区に位置する。標高値は86.9～87.0ｍである。平面形は不整の楕円形を呈している。長軸4.00ｍ、短軸2.92ｍ、検出面からの深さは25cmを測る。長軸方向はN－70°－Wを示す。検出面はⅤ層上面である。覆土は、１層の暗褐色粘質土、２・３層のにぶい黄褐色粘質土に細分される。床面は掘形底面である。平坦でやや固くしまっている。壁面は緩い傾斜で立ち上がる。周溝は北壁沿いと南壁沿いに部分的に検出した。最長のものは長さ1.25ｍ、幅15cm、深さ４cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土である。地床炉は床面中央やや北寄りに位置している。炉の規模は、長径60cm、短径50cm、焼土及び焼土化した部分の厚さ５cmを測る。

ピットは、内部に４基と西壁際に１基検出したが、主柱穴と思われるピットはない。平面形は、不整円形か楕円形を呈し、長径19～35cm、短径16～32cm、深さ６～11cmを測る。覆土は灰黄褐色粘質土か１層の暗褐色粘質土、２・３層のにぶい黄褐色粘質土である。これらのピットは、床面検出時に確認したものだが、竪穴住居との関係は不明である。遺物は出土していない。

SI1010（図版３・６・25）

OX20区に位置する。標高値は87.2～87.3ｍである。南側半分が調査区外にある。平面形は楕円形と推測される。残存値は長軸3.15ｍ、短軸1.55ｍ、検出面からの深さは12cmを測る。検出面はⅢｂ層

直下（Ⅴ層上面）だが、調査区南壁の土層断面でⅣ層上面が構築面であることを確認した。覆土は、1層の黒褐色粘質土、２層のにぶい黄褐色粘質土、３層の灰褐色粘質土に細分される。床面は掘形底面で凹凸が目立ち、しまりはあまりない。壁面は緩い傾斜で立ち上がる。周溝は東壁沿いで検出した。幅 26cm、深さ５cm を測る。覆土はにぶい黄褐色粘質土である。ピットは、内部に４基検出したが、主柱穴と思われるものはない。平面形は円形若しくは楕円形を呈し、長径 28 ～ 42cm、短径 24 ～ 34cm、深さ 12 ～ 23cm を測る。出土遺物はないが西壁際に大型の自然礫が出土した（図版 25）。

SI1011（図版３・６・25）

OW20 区に位置する。標高値は 86.9 ～ 87.0 mである。平面形は不整の楕円形を呈しているが、北壁は調査時の確認トレンチにより欠損している。現存値は、長軸 2.36 m、短軸 2.32 mを測る。

長軸方向は南北方向を示す。最終精査時にⅥ層上面で検出した。円形に廻る小ピット群と周溝、地床炉が確認されたが、壁の立ち上がりは明瞭でない。床面は平坦でやや固くしまっている。周溝は東側の壁沿いで検出した。幅 14cm、深さ５～６cm を測る。地床炉は竪穴のほぼ中央に位置している。長径 36cm、短径 34cm、焼土及び焼土化した部分の厚さは４cm を測る。円形に巡る小ピット群は、径６～８cm、深さ８～ 10cm を測る。遺物は出土していない。

SX1001（図版３・６・25）

OW19 区に位置する。標高値 86.9 ～ 87.0 mである。平面形は不整の楕円形を呈している。長軸 2.53 m、短軸 2.00 m、検出面からの深さは 11cm を測る。長軸方向は南北方向を示す。Ⅳ層上面で検出した集石遺構（SS1015）と重複しており、礫を取り上げ後、Ⅵ層上面で確認した。覆土は単層（灰褐色粘質土）で層厚５～６cm と薄い。底面はやや平坦だが集石遺構が位置する部分は凹凸が目立ち、しまりはあまりない。壁面は多少緩やかに立ち上がるが、断面形は浅い皿状を呈す。ピットは、内部に３基検出したが主柱穴と思われるピットはない。平面形は、円形か楕円形を呈し、長径 20 ～ 34cm、短径 16 ～ 30cm、深さ８～ 19cm を測る。遺物は出土していない。この遺構は竪穴住居とする付帯施設（炉・周溝）は確認できず、また重複している礫集中区との関連性は不明であるため、竪穴様遺構とした。遺物は出土していない。

SX1002（図版３・６・25）

OX19 区に位置する。標高値は 87.0 ～ 87.1 mである。平面形は不整の楕円形を呈している。長軸 2.63 m、短軸 2.47 m、検出面からの深さは８cm を測る。長軸方向はＮ－ 90°－ E を示す。検出面はⅥ層上面である。この竪穴は最終精査時に検出したもので、壁面の立ち上がりがやや不明瞭である。覆土は単層で灰黄褐色粘質土である。底面は平坦でやや固くしまっている。内部で３基のピットを検出したが、主柱穴と思われるピットはない。ピットの平面形は楕円形で、いずれも掘り込みが浅く皿状を呈す。この遺構は SI1010 と同様に詳細が不明であるため竪穴様遺構とした。遺物は出土していない。

（3）性格不明遺構

ピット（図版３・７・８・26）

調査区のほぼ全域に点在する 63 基を検出した。全体的にまばらだが OX19・20 区の SI1011 と SB1005 周辺にやや集中している。平面形は円形・楕円形・長楕円形・不整形を呈するものが見られる。断面形は半円状・台形状・Ｖ字状・浅い皿状を呈するものが見られる。長径 15 ～ 66cm、短径 13 ～ 54cm、深さ７～ 38cm を測る。Ｐ 1025 は壁面・底面に扁平の円礫が見られ、自然埋没とは異にするものである。Ｐ 1026・1027・1078 は漏斗状ないし階段状で、柱痕の可能性が考えられる。覆土は、単層

のものと複層のものがあり、いずれも暗褐色粘質土ないしにぶい黄褐色粘質土である。竪穴住居との重複関係にあるものは検出していないので、ピット群との時期差は明瞭でない。

集石遺構（図版３・６・７・８・26）

OW20 区、OX18・19 区に位置する（図版８）。標高値は SS1019・1020 が 87.1 m、SS1015・1016 が 87.0 m、SS1017・1018 が 86.7 mである。集石には円礫と角礫があり、前者は SS1015 のみである。礫下には浅い窪み状のピットが検出され厚さ 10cm の覆土が堆積する。磨石（図版 12 － 37）が出土した。SI1010 と重複しているが関連性は不明である。SS1016 ～ 1019（角礫）の集石範囲は 90 × 60cm ～ 265 × 172cm を測り、礫下に８～ 10cm の覆土（灰黄褐色粘質土）が堆積する。礫中には被熱したものも少量含まれ、さらに少量ではあるが剥片が含まれている。OW20 － 17 区の調査区北壁沿い（SI1006 の東側）に、同一母岩の粗割剥片が集中して出土した（図版 26）。下にピットの存在は認められないことから、平地に破棄されたものと推測される。

２　上 層 の 遺 構（縄文時代中期前葉）

A　概　　要

上層では、竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟、土坑２基、性格不明遺構２基、ピット 17 基、焼土（野外炉？）２基を検出した。各遺構は単発的で、竪穴住居は調査区の東端部、掘立柱建物・焼土は中央部、土坑は南西部、ピットはまばらに点在している。掘立柱建物は、整理段階で再検討し、図上復元した。

B　遺　構　各　説

（１）掘 立 柱 建 物（図版２・12・14・27）

SB66（図版２・12・14・27）

OW19・20 区、OX19・29 区に位置する。標高値は 87.3 ～ 87.3 mである。柱間にややばらつきがあるが、周辺にピットの点在がなく、平面形が細長五角形を呈する配置を示すことから、掘立柱建物と認識した。長軸 3.10 m、短軸 1.60 mを測る。主軸方向はＮ－ 80°－Ｅを示す。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し、長径は 52 ～ 107 cm、短径 41 ～ 84cm、深さ 16 ～ 28cm を測る。Ｐ 74 は柱痕を確認した。P78 の断面は階段状を呈している。覆土は P75 ～ 77 は２層（暗褐色土ないし暗褐色砂質土・にぶい黄褐色砂質土）、P77 は３層（黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色砂質土）、P74 は４層（黒褐色土・暗褐色土（２分）・にぶい黄褐色砂質土）に細分される。検出面はⅢｂ層上面で、貼床・炉跡・焼土などの痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

（２）竪　穴　住　居（図版２・12・13・27）

SI67（図版２・12・13・27）

OX18 区に位置する。標高値は 87.1 ～ 87.3 mである。竪穴の東側半分は 2006 年度調査区（前掲）になる。南壁は傾斜に吸収され不明である。平面形は、残存部の形状から隅丸方形と推測される。長軸 3.60 m、短軸 1.90 m、検出面からの深さ 22cm を測る。長軸方向は、おおむね南北方向を示す。覆土は１層の黒褐色土、２層のにぶい黄褐色土、３層のにぶい黄褐色砂質土に細分される。床面は掘形底面である。平坦で中央部は固くしまっている。壁面は急傾斜で立ち上がっている。検出面はⅢ層上面である。内部に４基

のピットを検出したが、主柱穴と認識できるピットはない（P 1～3）。平面形は円形ないし楕円形を呈し、径は 16 × 18cm ～ 30 × 32cm、深さ 20 ～ 25cm を測る。

炉は、床面に浅い掘込みが見られる。覆土は、1・2層に炭化物、3層に焼土が多く含んでいる。遺物は、覆土中から縄文土器（40）・石器類（67・68・76）が出土した。石器類は磨製石斧・石皿・剥片である。

（3）土　　坑

SK68（図版2・12・13・27・28）

OX20 区に位置する。標高値は 87.5 mである。平面形は円形を呈し、直径 1.06 m、検出面からの深さ 37cm を測る。断面形は台形状を呈している。検出面はⅢa 層である。覆土は、1 層暗褐色土、2 層にぶい黄褐色砂質土に細分される。2 層は黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土で小礫を多量に含むことから、埋め戻し土と推測される。また、1 層上位には人頭大の円礫が出土しており配石土坑と考えられる。

出土遺物は、覆土中から不定形石器（66）が出土した。

SK69（図版2・12・13・28）

OW20 区に位置する。標高値は 87.5 mである。南側で P79 と重複し、これを切っている。平面形は不整形の楕円形を呈し、長軸 1.68 m、短軸 1.09 m、検出面からの深さ 33cm を測る。断面形は半円状を呈している。検出面はⅢa 層である。覆土は、1 層黒褐色土、2 層暗褐色砂質土、3 層にぶい黄褐色砂質土に細分される。レンズ状堆積である。開口部の北東部付近で石製品（三角形岩版 85・87）が出土した。出土遺物は、覆土中から剥片石器（65）が出土した。

（4）性格不明遺構

SX72・73（図版2・12・15）

OW20 区に位置する。標高値は 87.4 mである。両遺構は南側半分が調査区外になるため平面形は不明だが、SX72 は直径 1.65 m、深さ 44cm を測り、断面形は半円形状である。SX73 は直径 1.83 m、深さ 38cm を測り、断面形は箱状を呈している。検出面はⅢa 層である。覆土は、SX72 は 1 層暗褐色土、2 層褐色砂質土、3 層灰黄褐色砂質土に細分され、SX73 は、1 層暗褐色土、2 ～ 4 層にぶい黄褐色砂質土（3 分層）に細分される。いずれもレンズ状堆積である。遺物は、SX73 の覆土中から剥片が 1 点出土した。

ピット（図版2・12・13・14・28）

検出状況は単発的で、調査区の北西側（OW20・21 区に位置する）と中央部（OW19・OX19・20 区に位置する）に点在している。標高値は北側で 87.3 ～ 87.4 m、中央部で 87.2 ～ 87.3 mである。平面形は、円形ないし楕円形を呈し、長径 43 ～ 112cm、短径 42 ～ 83cm、検出面からの深さ 19 ～ 49cm を測る。断面形は、半円状・台形状・半球状を呈している。検出面はⅢa 層である。

覆土はそれぞれ 2 ～ 4 層で、1a 層黒褐色土、1b 暗褐色砂質土、2 層にぶい黄褐色砂質土、3 層灰黄褐色砂質土に細分される。出土遺物は、P80・83・85・86 の覆土中から縄文土器が出土した（小破片のため未掲載）。

焼　　土（図版2・12・15・28）

OW20・OX20 区に位置する。標高値は 87.4 ～ 87.5 mである。計測可能な焼土の範囲は、長径 150cm、短径 109cm、焼土の厚さは 16cm を測る。検出面はⅢb 層上面である（当該地の OW・OX20 区はⅢa 層の堆積がなく、Ⅱ層直下がⅢb 層である）。焼土中には炭化粒子が少量含まれる。遺物は出土していない。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

本調査区の出土遺物は、上・下層から縄文時代前期後葉以前～中期前葉の土器・石器・石製品が出土した。出土総数は、浅箱に換算しておおよそ18.5箱である。そのうち上層では、土器1箱、石器・石製品が5箱、下層では、土器0.5箱、石器12箱である。出土状況について見ると、下層出土の土器・石器は、竪穴住居内（SI1006・1007）、ピット内（P1025・1027）、集石遺構（SS1015）などから石器類の出土が見られ、遺構外では各遺構周辺でまばらに見られた。

上層出土の土器・石器・石製品では、竪穴住居内（SI67）・土坑内（SK69）出土の土器がややまとまって見られ、遺構外では調査区内全般で散発的に出土した。出土層位は、上・下層とも厚い間層（鹿瀬軽石質砂層）によって混じりのない出土状況で、上層（Ⅲａ直上）では縄文時代中期前葉、下層（Ⅲｂ直下）では前期後葉以前の遺物がそれぞれ散発的ではあるが各時期の所産として一括できる。

資料の提示については、大坂上道遺跡Ⅱ（前掲）に準じており、実測図・写真・観察表を基本とした。土器の分類については、大坂上道遺跡［滝沢1995］に準じたが、本調査区の土器は出土量が少なく小破片が多いことから、細分による時期決定は行っていない。よって本稿では、「縄文時代前期末葉以前」を後葉以前、「縄文時代中期初頭～前葉」を前葉として記述するものである。

第Ⅰ群土器　・・・・・・・・　縄文時代前期の土器（下層）

第Ⅱ群土器　・・・・・・・・　縄文時代中期の土器（上層）

以下に下層・上層の順で各遺物の説明をする。

2　遺　物　各　説

A　下層出土土器（図版9・29）

Ⅰ群土器　　縄文時代前期後葉の土器群である（1～12）。

1はSI1007の西側周辺から出土した。深鉢口縁部破片である。口縁部上端から下端にかけて波状の貼付帯が縦位に施され、その上には半截竹管状の工具による連続刺突文が加えられている。同様の刺突文は、口唇部と頸部に横走する。頸部の横走連続刺突文の下位には、平行して結節回転文が見られるが縦位の貼付帯右側には見られない。口縁部は無文帯である。体部は、斜行する撚糸側面圧痕文（L）である。2～4・7・9～10は縄文のみの破片で、2・3は外反する口縁部破片である。3は口唇部にボタン状小突起を有する。2～4・9はRLの斜縄文、7・11はLRの斜縄文を施している。5・6は同一個体で口縁部破片である。山形小突起を有す口縁で、突起部位に半円突起を貼付し、中央に縦刻目文を施している。口縁部上位と下位に平行して半隆起線が横走している。平行半隆起線の間には縦位の刻目文が施される。8は横位の平行沈線による区画内に爪形文が巡る。地文はRLの斜縄文を施す。12は深鉢の底部破片で断面は張り出しを有している。体部は撚り糸文（L）を施し、底面は編組の圧痕が認められる。編組圧痕は、タテ材が幅広で、ヨコ材が短冊状を呈しており、ござ編みと推測される。1と同一個体と考えられる。

B　上層出土土器（図版 16・30）

Ⅱ群土器　　縄文時代中期前葉の土器群である。（40 ～ 55）

40 は唯一の復元個体である。SI67 覆土中から出土した。深鉢の上半部で胴部は直立するが口縁部が多少外反し、山形小突起を有する。口縁部上位に横走の沈線と下位に平行する２条の半隆起線で区画され、その間に刻目文が巡る。体部は、器面全体にミガキ調整を施し無文である。41 ～ 46 は頸部から口縁部の破片である。41 ～ 43 は内湾する口縁で特に 41・43 はキャリパー状を呈している。口縁部文様帯は、沈線文、半隆起線文、刻目文、交互鋸歯状文等による文様構成である。42 は口縁部上位から刻目文、交互鋸歯状文、半隆起線文が施されている。44 は SK69 出土、横走沈線と半隆起線の区画内に LR 斜縄文、46 は半隆起線直下に RL の斜縄文を施している。47 ～ 52 は胴部破片で、47 は SK69 出土、縦位に半隆起帯による区画文が垂下し、地文は器面全体にややくずれぎみの木目状撚糸文（L）を施している。48 ～ 51・53 は斜縄文と結節回転文を施すもので、48・49 は LR の斜縄文と横位に結節回転文を施すもの、50･51･53･54 は RL の斜縄文と縦位に結節回転文を施すものである。52 は LR 斜縄文と沈線が見られる。55 は底部破片で端部に張り出し部を有す。器面には縦位に半隆起帯による区画文が垂下している。

C　下層出土石器（図版９～ 11・29）

遺構内出土の石器は、28 打製石斧・33 磨石・39 石皿（SI1006）、34 磨石（P1027）、37 石皿（P1025）、38 磨石（SS1015）で、ほかは包含層出土である。

１）石　　匙（13・14）

いずれも縦長身部形態は 13 が直線的、14 は弧を描くように曲線を呈す完形品である。二次調整は、両者のつまみ部の抉りと 13 の下端部、14 の右側辺部に両面調整を施している。

２）石　　錐（15）

1 点のみの出土である。素材は薄い横長剥片で打点部をつまみとし長めの刃部加工である。使用痕と思われる摩滅は見られない。

３）不 定 形 石 器（16 ～ 25）

やや厚手の剥片を素材としているもので、部分的に二次調整を施す剥片ないし使用痕が認められる剥片を一括した。16 ～ 19 は二次調整が認められるものである。16・17・19 は連続剥離調整を施すもので、16・17 は両面調整が見られる。20 ～ 23 は片側縁に軽い二次調整が認められるものである。24 は部分的に使用痕が認められるものである。25 は厚手の礫剥片素材で片手で把持できる大きさである。両側縁に粗い打撃調整を加えたものである。

４）箆　状　石　器（26・27）

２点のみの出土である。粗い両面調整による完形品で、基部から刃部への開きがやや小さい。刃部の調整を集中的に施すことで片刃様の形状を呈している。この石器は、素材や二次調整等から上野東遺跡［高橋 2006］で「箆状石器」としたものに極似している。

5）石　　錘（28）

扁平礫の両端に打撃調整を加え抉りをつけたもので、1点出土している。素材は、板状の円礫である。

6）敲　　石（29～31）

29は、端部に集中した打撃痕が見られる。30は扁平礫の片面全体に敲打痕が見られ、部分的に浅い窪みを残している。31は、厚手な円礫の周線部に打撃痕が見られる。

7）磨　　石（32～35・37）

扁平礫の一辺に磨面を有すもので、使用面が平坦になる。いずれも片手ないし両手で把持できる大きさで、表裏面には使用痕は認められない。32はSI1006、33はP1027、37はSS1015の出土である。

8）石　　皿（36・38）

36はP1025、38はSI1006から出土した。大型の扁平礫でいすれも側縁の一部に打撃痕を残している。36は片面全体に滑らかな磨面でほぼ均質である。38は両面に使用面と推測される磨面が認められるが、主に中央部に集中している。

9）石　　核（39）

全体的に荒い剥離作業が行われたと考えられる本核で、頭部の平坦な打面には数回の剥片剥離作業が行われたと思われる打撃痕が認められる。

D　上層出土石器（図版16～19・28）

遺構内出土の石器は、65～67・71不定形石器・敲石（SI67・SK69）、70磨製石斧（SI67）、76石皿（SI67）で他は包含層出土である。

1）不 定 形 石 器（56～68）

やや厚手の剥片を素材としているもので、側縁部、端部に二次調整を施す剥片ないし使用痕が認められる剥片を一括した。石材・素材は下層出土に類似している。56～58・60は連続剥離調整を施しているもので、56は左側縁は正面に剥離痕を、右側縁は裏面に剥離痕を残す。60はその逆の調整である。56の素材は横長剥片である。58は片側縁の調整で両面剥離調整が施されている。59・61～65は不連続な細かい二次調整が認められるものである。66・67は、部分的に使用痕が認められるものである。68は極めて厚手の剥片で片側縁に粗い剥離痕が認められ、鋸歯状を呈している。

2）磨　製　石　斧（69・70）

2点のみの出土である。70はSI67の覆土中から出土した。いずれも入念な研磨仕上げであるが、70は片面に擦り切り痕が残っている。69は基部平面形が尖頭状を呈し、身部も薄く小型のものである。

70は基部平面形が台形を呈し身部に厚みがある。刃部の形状は69は片刃、70は両刃成形である。両者の刃部には使用痕と思われる歯こぼれが認められる。

3）敲　　石（71 ～ 73）

扁平礫の素材で、71 は、下端部の一部に打撃痕が見られ、両面中央部に縦位の溝状磨面が見られる。72 は両端に敲打痕が見られる。73 は荒割礫素材と思われる。粗い打撃剥離痕が一辺に集中して残るのみで、部分的に礫皮が残っている。

4）磨　　石（74・75）

74・75 は、やや厚手の扁平礫素材で下端に磨面を有すもので、使用痕はやや幅広の磨面を有するものである。74 は周縁部の一部に荒い打撃剥離痕が見られる。片面には細い溝状の磨面が見られる。

5）石　　皿（76）

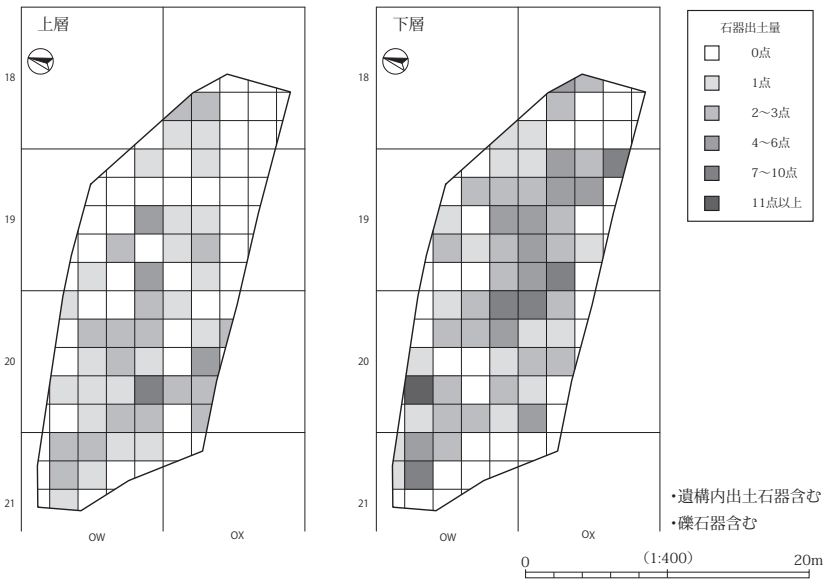
SI67 の覆土中から出土した。扁平礫の素材で、両面全体に滑らかな磨面が見られる。

6）石　　核（77・78）

77 は、母岩から大まかな剥片剥離作業により、肉厚な剥片を本石核としたもので、正面の左側縁に集中して剥片剥離痕が見られる。78 は正面の上端に平坦な打面が残るものである。打面からの剥片剥離作業は正裏面と右側面に荒割の剥離作業が行われている。

7）石　製　品（79 ～ 86）

石製品は、三角形岩版として認識できるものとその小破片・未製品等を一括した。79 は OX18 区、82･84 は SK51 の周辺、ほかは OW･OX19 区に集中していた。79･82 は頂点部に亀頭状を呈するもので、79 は 2 か所、82 は 1 か所欠損している。80・81 は板状の素材破片で細かな成形痕は認められない。83 は、欠損品と思われ、 1 面に刻線を有している。85・86 は、板状の三角形岩板で、85 は表・裏面とも丁寧な磨り調整が見られる。86 は表・裏面の成形は粗いが縁辺部は丁寧に磨かれている。尖頭部には打撃痕が残る。



第８図　石器出土分布図（上・下層）

第Ⅵ章　ま　と　め

これまで、阿賀野川及びその支流による河岸段丘上に分布する多くの遺跡は、磐越自動車道・一般国道49号揚川改良事業等の建設に伴い発掘調査が行われて来た。その報告の中でも縄文時代前期～中期の調査例は少なくない。特に大坂上道遺跡周辺では、上下層二枚の包含層が存在する複合遺跡の発掘調査が行われ、上層に縄文時代中期以降、下層に同前期以前が重複する事例もいくつか報告されている（上野東遺跡・現明嶽遺跡・猿額遺跡・北野遺跡・向大浦遺跡）。そこで、各遺跡における遺構の下層検出状況に注目して見ると、上野東遺跡では前期後葉～末葉の竪穴住居１軒、土坑５基、猿額遺跡では土坑２基、焼土４基、ピット98基のうち住居の可能性があるピット群Ⅰ・Ⅱ、現明嶽遺跡では焼土１基、遺物集中地点４か所、集石遺構１基、大規模集落を形成していた阿賀野川支流の常浪川左岸に所在する北野遺跡で、竪穴住居18軒、掘立柱建物２棟、土坑53基、焼土53基、集石７基、ピット29基、土器捨場や広場などの諸施設がまとまって検出された。その中で後葉～末葉の集落跡では、竪穴住居９軒（大型住居５軒、小型住居４軒）、掘立柱建物２棟、土坑数基が検出された。この北野遺跡の事例は別として、阿賀野川の河岸段丘上に所在する他の遺跡は、集落の様相を確認し得るものではないと思われる。上野東遺跡、猿額遺跡の住居事例では、掘り込みが皿状で浅く、炉を有するが主柱穴が確認されていないもの、掘り込みが確認できないが柱穴の配置が環状に並ぶものなどである。今回の大坂上道遺跡の下層調査では竪穴住居６軒、竪穴様遺構２基、土坑１基、掘立柱建物１棟、ピット53基、集石遺構６基を検出したが、それぞれの所属時期を推定する出土遺物は、遺構に共伴するものやその周辺に分布するものも含めても極めて少ない。北野遺跡、上野東遺跡における後葉～中葉の住居内は、鹿瀬軽石質砂層に覆われているが、本調査区では、その堆積状況は確認されていない。また、石器組成では、当該期の集落からまったく出土していない磨石類（早期～前期中葉）に極似するものが含まれている。このため、遺構の所属時期については更に検討を要するところであるが、前期後葉～末葉の土器（大木５式対比の鋸歯状文の区画・大木６式対比の地縄文＋結節回転文）と当該期以前の石器が混在することから、後葉以前～末葉の所産と推考する。

1　下層（縄文時代前期後葉）の遺構・遺物について

A　遺　　構

本調査区（320㎡）における下層の遺構は竪穴住居が集中していた。標高値86.7～87.3ｍの台地に構築された竪穴住居は、平面形が楕円形を基調とし長径が2.5ｍ～5.0ｍを測り、壁面の立ち上がりはやや斜傾し深さ15～20cmを測る。覆土は１～３層に細分される。付帯施設は周溝と地床炉、壁沿いに並ぶピット列などが見られる。SI1006・1011・SX1001のように覆土中や壁の周辺に大型の円礫（台石・石皿）が１点ないし２点出土するものも見られる。竪穴中央部の床面が硬化しているもの（SI1006～1009・1011）がある。主柱穴となるものは認められないが、内部に見られるピットは、深いもので18～23cm、浅いものは10cm未満を測るもので、その配列には規則性はない。上野東遺跡では当該期の竪穴住居（SI８）が１軒検出されており、環状に巡るピット列と地床炉を持つSI1011に極似しているが、径5.7×5.6ｍの規模を有するのに比べSI1011は2.36×2.32ｍと小規模である。なお、前記のSI８については「テ

ント式住居」とし、遺跡の性格として「季節的な利用地」と推定している[1)]。

本調査区の竪穴住居群は径５m未満を測るものが多く、前述した北野遺跡の小型竪穴住居規模である。

しかし、それらの配置状況を比較すると、大型住居５基と小型住居４基がセット関係にあり、竪穴住居間が広く広範囲に散在する北野遺跡に対し、本調査区は比較的近接した配置となっている。2008 年度調査区では検出されていないことや、同一時期の構築と断定できないことから、竪穴住居が本調査区南側に広がる可能性を考慮しても、やや小規模単位の集落の可能性を指摘しておく。

B　遺　　物

下層出土の遺物の多くは石器類（剥片・礫）で、土器の出土は極めて少ない。石器類は調査区全域に点在していたが、土器は東側の OW19、OX 18・19 区（SI1007・1009 周辺）に偏って出土した。掲載土器は、１以外は小破片である。１～３、５・６は口縁部破片で、頸部から口唇部が短く外反もしくは外折する。文様構成（口縁部文様帯）が顕著に認められるものは、１、５、６、８である。文様帯は半截竹管様工具を中心とした列点状刺突文、横位沈線、刻目文、半隆起線等による区画文が見られる。1 は縦位にやや幅広の貼付帯を口唇部から頸部にかけて施し、その上部にも列点状刺突文が施される。このような形態・文様による諸特徴をあげると、東北地方の大木５式ないし６（古）式、北陸地方の真脇遺跡第６群土器［小島 1986］、新崎式に対比できるものであろう。

石器組成は、本調査区の西側に隣接した位置にある中棚遺跡に類似している［滝沢 1995］。厚手の剥片を含めた剥片石器と礫石器の比率は前者が多い。しかし、定形石器（主に剥片石器）が極めて少なく、所属時期を明確なものにする器種は少ない。ここでは、特徴的な器種について記したい。

完形品で出土した箆状石器（26）は遺構内（SI1006）から１点､OW21 － 1 区から１点（27）出土した。この石器は、本遺跡のほか、猿額遺跡、中棚遺跡、上野東遺跡等で出土しており、縄文時代前期末葉～中期前葉に出現するとされている（この中には、箆状石器・石箆という器種名も含まれている）。一方で、出土量の多い厚手の剥片を素材とした不定形石器も当該期の特徴とされる｡このような石器組成の類似点をから、前述の土器と同一包含層出土という関連性からも同時期の範疇と捉えられる。なお、猿額遺跡や本遺跡の前々回調査（1992・1993 年度調査）では旧石器が出土しているが、今回は出土していない。

2　上層（縄文時代中期前葉）の遺構・遺物について

A　遺　　構

上層の遺構は散発的な分布であった。大坂上道遺跡が位置する台地は南北に延び、前回の面積も含んだ調査区東端に南西から北東に伸びる埋没した旧河川があり 18 区ラインから急傾斜になる。全体の遺構配置を見ると台地の頂部から東側斜面に向けて広がっている。掘立柱建物（SB66）は本調査区の中央部に位置し、竪穴住居（SI67）は東端に位置する。さらに竪穴住居の東側に隣接して SB １（前回調査区：2006 年）がある。土坑は総体的な配置をみると台地頂部に２ブロック、東側斜面に１ブロックの分布状態がみられる。この傾向は前々回調査（前掲）にも見られる。前回調査区で検出した SK15（甕被葬の墓坑）・17（配

1）上野東遺跡［高橋 2006］では、竪穴住居や建物が検出されていない猿額遺跡、中棚遺跡、現明遺跡等も同様の性格付けを示唆している。

石墓坑)・26（立石痕を有す墓坑）が点在していたところから見て、本調査区の SK69 も墓坑の可能性が強い。ピットは掘立柱建物を構成するもの以外は極めて少なく、前調査区も含めて 11 基にすぎない。焼土は本調査区の台地頂部（OW・OX20 区）で２基、前回調査区で４基（うち３基は東側斜面）検出された。上層の遺構は、総体的に見て検出率は低い。また、竪穴住居や掘立柱建物も１～２軒に留まっており、野外炉と考えられる焼土が点在している。こうした傾向は前々回調査区（前掲）でも同様で、報告の中では「集落の中心が調査区北側に位置する」[滝沢前掲] とあり、本調査区を加味してもその状況が窺われる。つまり、安定した居住域ではなく一時的な利用が推測される。

B　遺　　物

上層出土の遺物は、下層同様に少ないが、土器と石器の比率はほぼ同じである（石器の出土量がやや少ない)。前調査区は中期初頭～前葉の土器を主体とし調査区のほぼ全域で出土しており、その分布がさらに南側へ広がっていると思われる。本調査区では、SI66 から復元可能土器が１個体（40）と SK69 から大型の胴部破片土器（47）が出土し、その周辺から石製品（三角形岩版）が遺構検出面から出土した。

本調査区における出土土器の所属時期は、中期前葉として一括したが、その中から近似するものをあげると、図版 16 － 40 は大坂上道Ⅱ分類の第Ⅰ群第１類Ｂ１種（図版 16 － 40：北陸系）に形態、口縁部文様帯の特徴が見出され、48 ～ 51 の胴部破片にみられる結節回転文は、Ⅰ群第２類Ａ１種（図版 13 － 1･2:東関東系）の胴部文様に類似点が見られ、41･42 の口縁部破片はⅠ群第２類Ａ３種（図版 13 － 3:東関東系）に近似している。しかし、本調査区の出土土器はさらに一歩進んだ対比資料はまだ少ないため断定しがたい。

石器組成は、不定形石器が主体である。下層と近似する点は、厚手の剥片素材の不定形石器がみられる点である。特徴的なのは石製品で、偶像的な三角形岩版である。また、80・81・83 のような欠損品や未製品（素材片）などの出土も注目される。

特に頂点部に亀頭状の突起を有すものは県内では希薄で、同器種は前調査区で１点出土した他、キンカ杉遺跡［遠藤 2006］でも１点出土している。この岩版の出現は大木７(a･b) 式期［阿部 2010］と示され、同形態の土版とともにほぼ同時期に置いている。また、土版は人体文様が強調されているとし、岩版に見られる線刻文はそれに近似することも示している。こうした形態、文様等の特徴が岩版にも合わせ持つとすれば、岩偶の一形態として捉えられることも加味して考えていいだろう。85・86 の様な無文の岩版は、東北・北海道南部（渡島半島）では、有文（あるいは線刻礫）のものが中期中葉～後期にかけて、多量化してくる三角形岩版に含まれる無文の岩版に共通する要素がみられる。特に 85 のように側縁部を研磨して仕上げた無文の岩版は、道南部の渡島半島に位置する大船Ｃ遺跡［阿部 1998］で中期後葉の住居跡から多く出土した例が報告されており、東北北半部の小牧野遺跡［児玉 2001］からは数百点の無文岩版が出土している。これらの石製品は、精神文化的な要素が強い遺物と推測され、本遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。

要　　約

1　大坂上道遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西 1827 番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に位置し、標高は 83 ～ 88 mである。今回の調査区は、上層面で 87 ～ 87.5 m、下層面で 86.5 ～ 87.3 mである。

2　調査は一般国道 49 号揚川改良事業に伴い、2011 年（平成 23 年）5 月 9 日～ 6 月 24 日に実施した。調査面積は上層 320㎡、下層 320㎡である。

3　調査の結果、縄文時代前期後葉（下層）、縄文時代中期前葉（上層）の遺構・遺物が層を異にして検出された。

4　検出した遺構は、前期後葉以前（下層）の掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 6 軒、竪穴様遺構 2 基、土坑 1 基、集石遺構 6 基。中期前葉（上層）の掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 1 軒、土坑 2 基、性格不明遺構 2 基、ピット 17 基、焼土 2 基である。

5　本調査区は台地の西側で沢に面した部分という立地条件の中で、下層と上層の遺構分布状況（集落形態）に多少の差異が見られるが、小集落を形成していたと推測される。

6　出土した遺物は、上・下層から縄文土器・石器・石製品で浅箱にして約 18.5 箱である。

7　土器は、下層で前期後葉の南東北系大木 5 ・ 6（古）式、上層で中期前葉の北陸系新崎式、真脇第 6 群土器に対比されるものである。

8　石器は、下層で前期全般に見られる箆状石器、上層で中期以降に多出する磨製石斧が出土した。そのほか上層で三角形岩版 3 点出土しているが、そのうち 2 点は土坑（SK69）検出面周辺から出土した。

引用・参考文献

阿部健太郎　2010「南東北の三角形岩版について」『福島考古』第 51 号 福島県考古学会

阿部千春　1998『大船 C 遺跡』北海道南茅部町教育委員会

荒川隆史ほか　1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

遠藤　佐　2006「キンカ杉遺跡」『東蒲原郡史』資料編 1 原始 東蒲原郡史編さん委員会

小川真一ほか　2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 204 集 萩原遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 111 集 黒田古墳群』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

長田友也　2004「新潟県アチヤ平遺跡出土の線刻礫（岩版）についての考察」『三面川流域の考古学』第 3 号 奥三面を考える会

金内　元ほか　2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 222 集 向大浦遺跡・上空野中丸遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

桐原雅史ほか　2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 186 集 大坂上道遺跡Ⅱ・猿額遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

児玉大成　2001「縄文時代後期前半の岩版類と大型配石遺構」『南北海道考古学情報交換会 20 周年記念編集 渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会

高橋保・高橋保雄　1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 57 集 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋保雄ほか　2003『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 119 集 北野遺跡Ⅰ（下層）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋保雄ほか　2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 141 集 北野遺跡Ⅱ（上層）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋保雄ほか　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 160 集 上野東遺跡・現明嶽遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗ほか　1995『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 68 集 大坂上道・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

寺崎裕助ほか　2003『新潟県の縄文集落』新潟県考古学会

寺村光晴ほか　1979『大角地遺跡』青海町教育委員会

田海義正ほか　1990『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 55 集 清水上遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

中島栄一　2006「屋敷島遺跡」『東蒲原郡史』資料編 1 原始 東蒲原郡史編さん委員会

長岡市　1992『長岡市史』資料編 1 考古

新潟県　1983『新潟県史』資料編 1 原始・考古 1 考古編

新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班　1974『吉野屋遺跡』調査報告 第 5 冊 新潟県立三条高等学校

巻　町　1994『巻町史』資料編 1 考古 新潟県巻町

八幡一郎　1958「刈羽貝塚」北方文化博物館研究報告第一（財）北方文化博物館

山田芳和　1986「真脇遺跡」〔復刻〕能都町教育委員会 真脇遺跡発掘調査団

渡辺　弘　2002「津川町六角原遺跡 一次調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 13 年度（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

遺構観察表（上・下層）（1）

遺構 No.		調査区	位置	形状	断面	覆土	法量 長径(cm)	法量 短径(cm)	法量 深さ(cm)	面積(㎡)	方位	備考
ＳＢ66		上層	OW19‐20・25　OX19‐21・21				310	160	(—)	5.12㎡	N-80°‐E	
			OW20‐5　OX20‐1									
	Ｐ７４		OX19-21	円形	半円	柱痕	78	72	23			
	Ｐ７５		OX20-1	円形	台形	ブロック	65	54	19			
	Ｐ７６		OW20-5	楕円	箱状	水平	52	41	16			
	Ｐ７７		OW19-25	円形	台形	水平	76	70	24			
	Ｐ78		OW19-20・25	円形	階段状	レンズ状	107	83	28			
ＳＩ67		上層	OX18-12・16・17・21							5.46㎡	N-31°‐W	
				(長方形)	皿状	レンズ状	(360)	(190)	12			
	Ｐ１			楕円形	台形状	単層	30	24	25			
	Ｐ２			円形	台形状	単層	18	16	24			
	Ｐ３			円形	台形状	単層	32	30	20			
	ＦＰ			円形	皿状	レンズ状	(34)	42	6			
ＳＢ1005		下層	OX19-16・17・21・22							3.33㎡	N-12°‐W	
							284	145	—			
	Ｐ１０３９		OX19-16・17	円形	半円状	単層	22	20	20			
	Ｐ１０４０		OX19-22	円形	U字状	単層	26	22	19			
	Ｐ１０４１		OX19-22	円形	U字状	単層	24	24	19			
	Ｐ１０６５		OX19-21	円形	U字状	単層	25	20	16			
	Ｐ１０６６		OX19-21	楕円形	U字状	レンズ状	35	23	11			打製石斧　摺石
	Ｐ１０６９		OX19-21	円形	U字状	単層	25	22	20			
ＳＩ1006		下層	OW21-1・2・6・7							5.93㎡	不明	
				(楕円形)	皿状	レンズ状	(486)	(173)	(8)			
ＳＩ1007		下層	OX18-12・13・17・18・19・22・23							8.04㎡	N-10°‐W	
				楕円形	皿状	レンズ状	368	(290)	10			
	Ｐ１			円形	[半円状]	単層	(20)	26	6			
	Ｐ２			円形	[半円状]	単層	28	24	13			
	Ｐ３			円形	半円状	レンズ状	36	30	19			
	Ｐ４			楕円形	半円状	柱痕	34	28	18			
	Ｐ５			円形	階段状	柱痕	28	24	23			
	ＦＰ			楕円形	台形状	単層	(53)	45	8			
ＳＩ1008		下層	OW20-7・12・13・17・18							4.85㎡	N-80°‐W	
				楕円形	皿状	レンズ状	293	230	22			
	ＦＰ			円形	浅い窪み状	単層	40	38	[6]			
ＳＩ1009		下層	OW19-13・14・18・19・23・24							9.56㎡	N-70°‐W	
				楕円形	皿状	レンズ状	408	292	16			
	Ｐ１０３０		OW19-14	円形	半円状	単層	26	26	10			＞SB1009
	Ｐ１０３１		OW19-14	楕円形	階段状	単層	28	26	21			
	Ｐ１０３２		OW19-18	円形	半円状	単層	36	34	10			
	Ｐ１０３３		OW19-23	楕円形	半円状	単層	24	20	10			
	Ｐ１０６８		OW19-19	楕円形	半球状	単層	20	15	10			
ＳＩ1010		下層	OX20-1・2・6・7・12							3.70㎡	不明	
				[楕円形]	皿状	水平状	320	(155)	12			
	Ｐ１０４４		OX20-6・7	円形	半円状	レンズ状	35	32	14			
	Ｐ１０５１		OX20-7	楕円形	台形状	単層	28	25	14			
	Ｐ１０５２		OX20-7	楕円形	U字状	単層	44	34	24			
	Ｐ１０７１		OX20-7	楕円形	U字状	レンズ状	[25]	27	22			
ＳＩ1011		下層	OX19-11・12・16・17OW19-15							4.99㎡	N-74°‐E	
				楕円形	皿状	単層	236	232	8			
	ＦＰ		OW20-7・8	楕円形	皿状	単層	36	34	6			
ＳＸ1001		下層	OW19-8・9・13・14							4.27㎡	N-6°‐E	
				楕円形	皿状	単層	253	200	11			
ＳＸ1002		下層	OW19-16・OX19-16・17	円形	皿状	単層	263	247	—	4.16㎡	不明	

遺構観察表（上・下層）（2）

報告番号	調査区	種別	グリッド	形状	断面	覆土	法量			備　考
							長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
ＳＫ68	上層	土坑	ＯＸ20-12	円形	台形状	レンズ状	63	55	37	
ＳＫ69	上層	土坑	ＯＷ20-20	楕円形	半円状	レンズ状	168	109	33	
ＳＦ70	上層	焼土集中	ＯＷ20-10	楕円形	半円状	単層	150	109	16	
ＳＦ71	上層	焼土集中	ＯＸ20-2・7	［楕円形］	—	—	［70］	［66］	—	
ＳＸ72	上層	性格不明	ＯＸ20-21・22	［楕円形］	半円状	水平状	［165］	［60］	［44］	
ＳＸ73	上層	性格不明	ＯＸ20-1・6	［楕円形］	階段状	レンズ状	［183］	［108］	［38］	摺石
Ｐ74	上層	ピット	ＯＸ19-21	円形	半円状	柱痕	78	72	23	ＳＢ66
Ｐ75	上層	ピット	ＯＸ20-1	円形	台形状	ブロック	65	54	19	ＳＢ66
Ｐ76	上層	ピット	ＯＷ20-5	楕円形	箱状	水平状	52	41	16	ＳＢ66
Ｐ77	上層	ピット	ＯＷ19-25	円形	台形状	水平状	76	70	24	ＳＢ66
Ｐ78	上層	ピット	ＯＷ19-20・25	円形	階段状	レンズ状	107	83	28	
Ｐ79	上層	ピット	ＯＷ20-20	楕円形	台形状	レンズ状	112	70	49	
Ｐ80	上層	ピット	ＯＷ20-17・18・22・23	楕円形	台形状	水平状	65	52	26	
Ｐ81	上層	ピット	ＯＷ20-17	円形	半球状	水平レンズ	65	50	31	
Ｐ82	上層	ピット	ＯＷ19-15	楕円形	半円状	柱痕？	88	72	30	
Ｐ83	上層	ピット	ＯＷ19-15	楕円形	半円状	レンズ状	［65］	63	25	
Ｐ84	上層	ピット	ＯＷ-9	楕円形	半球状	レンズ状	60	45	19	
Ｐ85	上層	ピット	ＯＷ20-22	円形	台形状	単層	65	63	24	
Ｐ86	上層	ピット	ＯＷ21-2	円形	台形状	水平状	72	70	26	
Ｐ87	上層	ピット	ＯＷ19-25	円形	半円	柱痕	55	46	22	
Ｐ88	上層	ピット	ＯＷ20-5	円形	台形	単層	43	42	22	
Ｐ89	上層	ピット	ＯＷ20-14	楕円形	半円状	レンズ状	64	47	22	
Ｐ90	上層	ピット	ＯＷ18-25	［円形］	台形状	単層	［62］	［20］	［34］	
ＳＫ1014	下層	土坑	ＯＷ20-7・12	円形	Ｖ字状	水平状	109	83	37	
ＳＳ1015	下層	集石遺構	ＯＷ19-9・14	［楕円形］	浅い窪み状	単層	105	50	10	
ＳＳ1016	下層	集石遺構	ＯＸ19-6・7・11・12	—	浅い弧状	単層	153	100	8	
ＳＳ1017	下層	集石遺構	ＯＸ18-23・24	［楕円形］	浅い弧状	単層	265	172	10	
ＳＳ1018	下層	集石遺構	ＯＸ18-12・13・17・18	［楕円形］	浅い弧状	単層	240	［118］	10	
ＳＳ1019	下層	集石遺構	ＯＸ19-16	［楕円形］	浅い窪み状	単層	90	60	8	
ＳＳ1020	下層	集石遺構	ＯＷ20-5	［楕円形］	浅い弧状	レンズ状	136	83	18	
Ｐ1021	下層	ピット	ＯＷ19-15	楕円形	半円状	レンズ状	50	35	12	
Ｐ1022	下層	ピット	ＯＷ19-15	円形	半円状	レンズ状	45	42	12	
Ｐ1023	下層	ピット	ＯＸ19-3	円形	台形状	レンズ状	42	40	20	
Ｐ1024	下層	ピット	ＯＸ19-3	円形	台形状	レンズ状	42	32	10	
Ｐ1025	下層	ピット	ＯＸ19-6	円形	Ｕ字状	単層	65	54	38	
Ｐ1026	下層	ピット	ＯＷ19-15	円形	Ｖ字状	単層	27	26	21	
Ｐ1027	下層	ピット	ＯＷ19-10	楕円形	Ｖ字状	斜位	43	35	23	
Ｐ1028	下層	ピット	ＯＷ19-8							
Ｐ1029	下層	ピット	ＯＷ19-8・13	楕円形	半円状	単層	47	38	11	
Ｐ1030	下層	ピット	ＯＷ19-14	円形	半円状	単層	28	25	13	ＳＩ1009
Ｐ1031	下層	ピット	ＯＷ19-14	楕円形	Ｕ字状	単層	30	27	21	ＳＩ1009
Ｐ1032	下層	ピット	ＯＷ19-18	円形	半円状	単層	36	35	13	ＳＩ1009
Ｐ1033	下層	ピット	ＯＷ19-23	楕円形	半円状	単層	32	23	13	＞ＳＩ1009
Ｐ1034	下層	ピット	ＯＷ19-22	楕円形	Ｖ字状	単層	37	24	15	
Ｐ1035	下層	ピット	ＯＷ20-4・5	円形	半円状	柱痕	44	40	25	
Ｐ1036	下層	ピット	ＯＷ19-22	円形	台形所状	レンズ状	25	22	12	
Ｐ1037	下層	ピット	ＯＸ19-17	円形	段状	単層	28	25	17	
Ｐ1038	下層	ピット	ＯＸ19-17	楕円形	Ｕ字状	単層	20	15	26	
Ｐ1039	下層	ピット	ＯＸ19-16・17	円形	半円状	単層	22	21	10	ＳＢ1005
Ｐ1040	下層	ピット	ＯＸ19-22	円形	Ｕ字状	単層	26	22	19	ＳＢ1005
Ｐ1041	下層	ピット	ＯＸ19-22	円形	Ｕ字状	単層	27	25	19	ＳＢ1005
Ｐ1042	下層	ピット	ＯＸ19-21・22	円形	半円状	単層	27	22	8	
Ｐ1043	下層	ピット	ＯＸ20-1・6	円形	台形状	レンズ状	35	31	11	
Ｐ1044	下層	ピット	ＯＸ20-6・7	円形	半円状	レンズ状	35	32	14	ＳＩ1011
Ｐ1045	下層	ピット	ＯＸ18-19	楕円形	半円状	単層	50	38	9	
Ｐ1046	下層	ピット	ＯＸ18-14・19	円形	台形状	単層	37	34	13	
Ｐ1047	下層	ピット	ＯＷ19-5	円形	半円状	単層	30	25	10	
Ｐ1048	下層	ピット	ＯＷ19-4	円形	台形状	単層	24	24	14	
Ｐ1049	下層	ピット	ＯＷ20-22	円形	半円状	単層	37	35	17	
Ｐ1050	下層	ピット	ＯＷ20-23	楕円形	半円状	単層	23	14	10	
Ｐ1051	下層	ピット	ＯＸ20-7	楕円形	台形状	単層	28	25	14	ＳＩ1011

遺構観察表（上・下層）（3）

報告番号	調査区	種別	グリッド	形状	断面	覆土	法量			備　考
							長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	
P 1052	下層	ピット	O X 20-7	楕円形	U字状	単層	42	34	28	S I 1011
P 1053	下層	ピット	O W 19-24	楕円形	U字状	単層	22	15	13	
P 1054	下層	ピット	O X 19-13・18	円形	U字状	レンズ状	17	17	14	
P 1055	下層	ピット	O W 19-9	円形	台形状	単層	30	26	10	
P 1056	下層	ピット	O W 21-4	円形	U字状	単層	42	38	30	
P 1057	下層	ピット	O X 20-6	円形	弧状	単層	28	28	9	
P 1058	下層	ピット	O X 20-6	円形	半円状	単層	23	22	12	
P 1059	下層	ピット	O X 19-12	円形	U字状	単層	20	16	32	
P 1060	下層	ピット	O W 18-25	円形	半円状	単層	28	28	10	
P 1061	下層	ピット	O W 19-4・9	円形	半円状	レンズ状	44	43	18	
P 1062	下層	ピット	O W 19-8・9・13・14							
P 1063	下層	ピット	O W 20-10	円形	台形状	単層	28	24	10	
P 1064	下層	ピット	O W 20-10	円形	台形状	斜位	30	26	10	
P 1065	下層	ピット	O X 19-21	円形	U字状	単層	25	23	16	S B 1005
P 1066	下層	ピット	O X 19-21	楕円形	U字状	レンズ状	35	23	11	S B 1005
P 1067	下層	ピット	O X 19-16	円形	半円状	単層	28	28	10	
P 1068	下層	ピット	O W 19-19	楕円形	半球状	単層	20	17	12	S I 1009
P 1069	下層	ピット	O X 19-21	円形	U字状	単層	25	25	22	S B 1005
P 1070	下層	ピット	O X 20-2	楕円形	弧状	単層	33	23	11	
P 1071	下層	ピット	O X 20-7	楕円形	U字状	レンズ状	［25］	27	22	S I 1011
P 1072	下層	ピット	O W 20-8	円形	台形状	単層	22	17	7	
P 1073	下層	ピット	O W 20-7・8	円形	半円状	単層	23	20	11	S I 1013
P 1074	下層	ピット	O W 20-18	円形	U字状	単層	15	15	21	
P 1075	下層	ピット	O W 20-18	円形	U字状	単層	15	13	16	
P 1076	下層	ピット	O W 20-17	楕円形	半円状	単層	23	19	9	
P 1077	下層	ピット	O X 20-11	円形	半円形	単層	22	20	14	
P 1078	下層	ピット	O W 20-14・15	円形	階段状	単層	35	30	16	

土器観察表（下層・上層）

図版No.	遺構・層位・グリッド	器種	残存部位	器高	口径	底径	胎土	外面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1	ＯＸ18-17	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	平口縁、口縁部無文帯、横位列点　文、縦位の貼付帯、体部撚糸文（L）	にぶい灰褐色	明黄褐色	口縁部にスス付着		下層
2	ＳＩ1007	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	平口縁　斜行縄文（RL）	暗褐色	明灰褐色	口縁部スス付着		下層
3	ＯＸ18-18	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	平口縁　斜行縄文（RL）	にぶい灰褐色	明黄褐色			下層
4	ＳＩ202	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	斜行縄文（RL）	にぶい灰褐色	にぶい灰黄褐色			下層
5	ＯＷ20-10	深鉢	口縁部	—	—	—	やや粗悪	山形口縁　半隆起線、縦刻目文	明黄橙色	明黄橙色			No６と接合　下層
6	ＯＷ20-10	深鉢	口縁部	—	—	—	やや粗悪	山形口縁　半隆起線、縦刻目文	明黄橙色	明黄橙色			No５と接合　下層
7	ＯＷ20-2	深鉢	胴部	—	—	—	やや粗悪	斜行縄文（LR）	にぶい暗灰褐色	明黄橙色		スス付着	下層
8	ＯＷ20-20	深鉢	頚部～胴部	—	—	—	やや粗悪	半隆起線、連続爪形文	にぶい暗黄橙色	にぶい暗黄橙色			下層
9	ＯＷ20-20	深鉢	胴部	—	—	—	やや粗悪	斜行縄文（RL）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰黄橙色			下層
10	ＯＸ18-18	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	斜行縄文（RL・LRの羽状）	にぶい灰黄橙色	にぶい暗灰黄橙色			下層
11	ＯＸ18-18	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	撚糸文（L）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰白黄橙色	スス付着		下層
12	ＯＸ18-12・18	深鉢	底部	—	—	—	やや良好	低部張出し、体部撚糸文（L）、低部絡状態圧痕	にぶい灰黄橙色	にぶい黄橙色		スス付着	下層
40	ＳＩ67	深鉢	口縁部～胴部上半	13.5～	20.0	—	やや良好	平口縁、山形小突起、半隆起線、縦刻目文、胴部無文帯	にぶい暗灰褐色	にぶい暗黄橙色		体部内側にスス付着	上層
41	ＯＷ21-7	深鉢	口縁部	—	—	—	良好	半隆起線、縦刻目文	明黄橙色	にぶい灰黄褐色			上層
42	ＯＷ19-23	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	半隆起線、縦刻目文、鋸歯状文	黒褐色	にぶい黒褐色	スス付着		上層
43	ＯＷ20-7	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	半隆起線、縦刻目文	明黄橙色	にぶい明黄橙色			上層
44	ＳＫ69	深鉢	口縁部	—	—	—	やや良好	半隆起線、斜縄文（LR）	明黄橙色	にぶい明黄橙色			上層
45	ＯＷ20-18	深鉢	口縁部	—	—	—	やや粗悪	半隆起線	にぶい灰黄橙色	にぶい明黄橙色			上層
46	ＯＷ20-21	深鉢	頚部～胴部	—	—	—	やや良好	半隆起線、連続爪形文、斜行縄文（RL）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰黄橙色			上層
47	ＳＫ69	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	縦半隆起線、撚糸文（L）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰褐色			上層
48	ＯＷ21-7	深鉢	頚部	—	—	—	やや不良	結節回転文、撚糸文（L）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰黄橙色			上層
49	ＯＷ20-5	深鉢	胴部	—	—	—	やや不良	斜縄文（LR）、結節回転文	明黄橙色	明黄橙色	スス付着		上層
50	ＯＷ19-23	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	斜行縄文（RL）、結節回転文	にぶい暗灰褐色	黒褐色	スス付着	スス付着	上層
51	ＯＸ21-13	深鉢	胴部	—	—	—	やや不良	斜行縄文（RL）、結節回転文	にぶい黒褐色	にぶい灰褐色	スス付着		上層
52	ＯＷ20-5	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	斜縄文（LR）、結節回転文	にぶい灰黄橙色	にぶい灰黄橙色	スス付着		上層
53	ＯＷ19-23	深鉢	胴部	—	—	—	やや良好	斜行縄文（RL）、結節回転文	にぶい灰黄橙色	にぶい灰褐色		スス付着	上層
54	ＯＷ20-21	深鉢	胴部	—	—	—	やや不良	斜行縄文（RL）	にぶい灰黄橙色	にぶい灰黄橙色			上層
55	ＯＷ21-7	深鉢	底部	—	—	—	やや不良	低部張出し、縦半隆起線	明黄橙色	にぶい灰黄橙色			上層

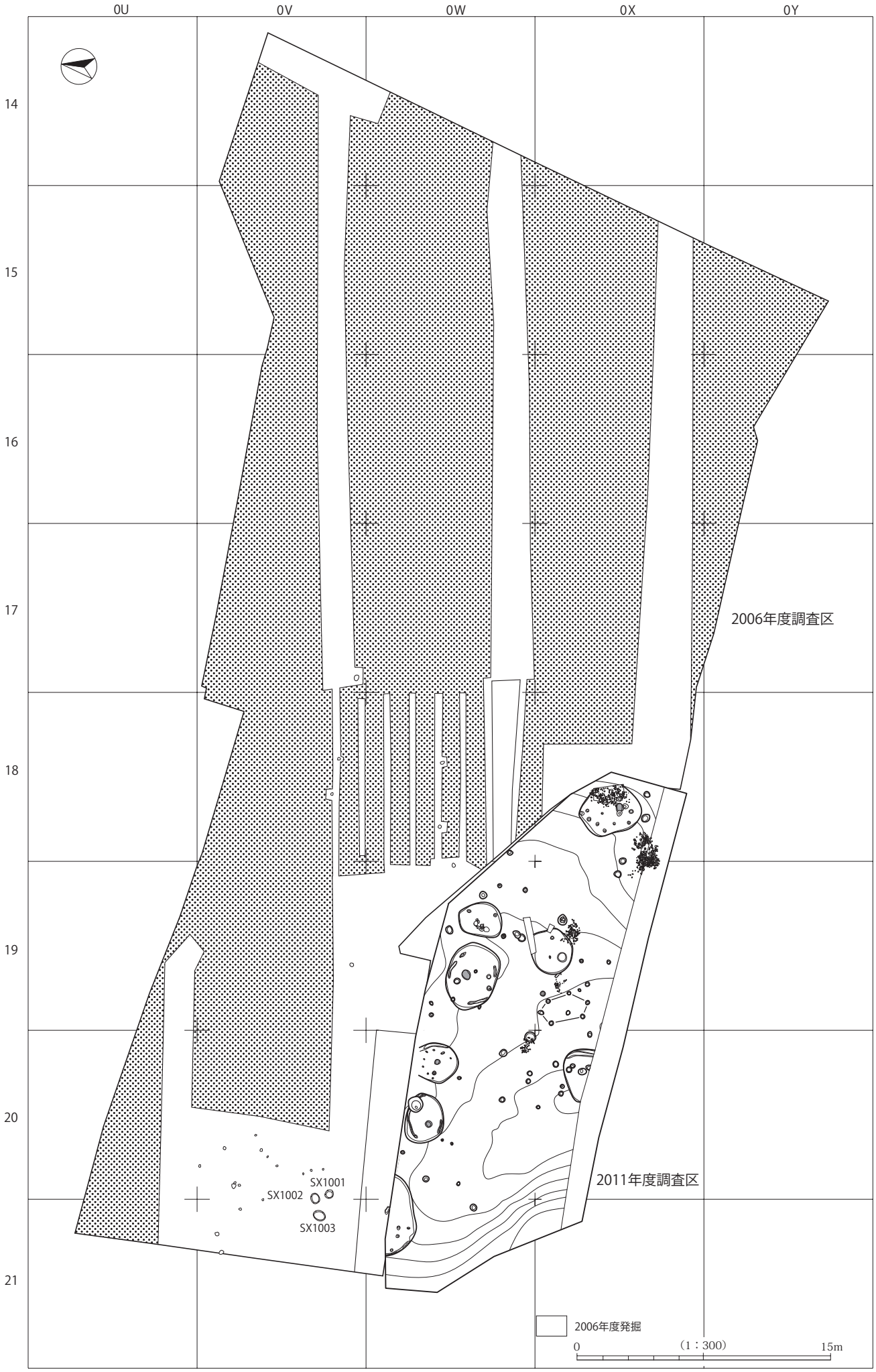
石器観察表（下層）

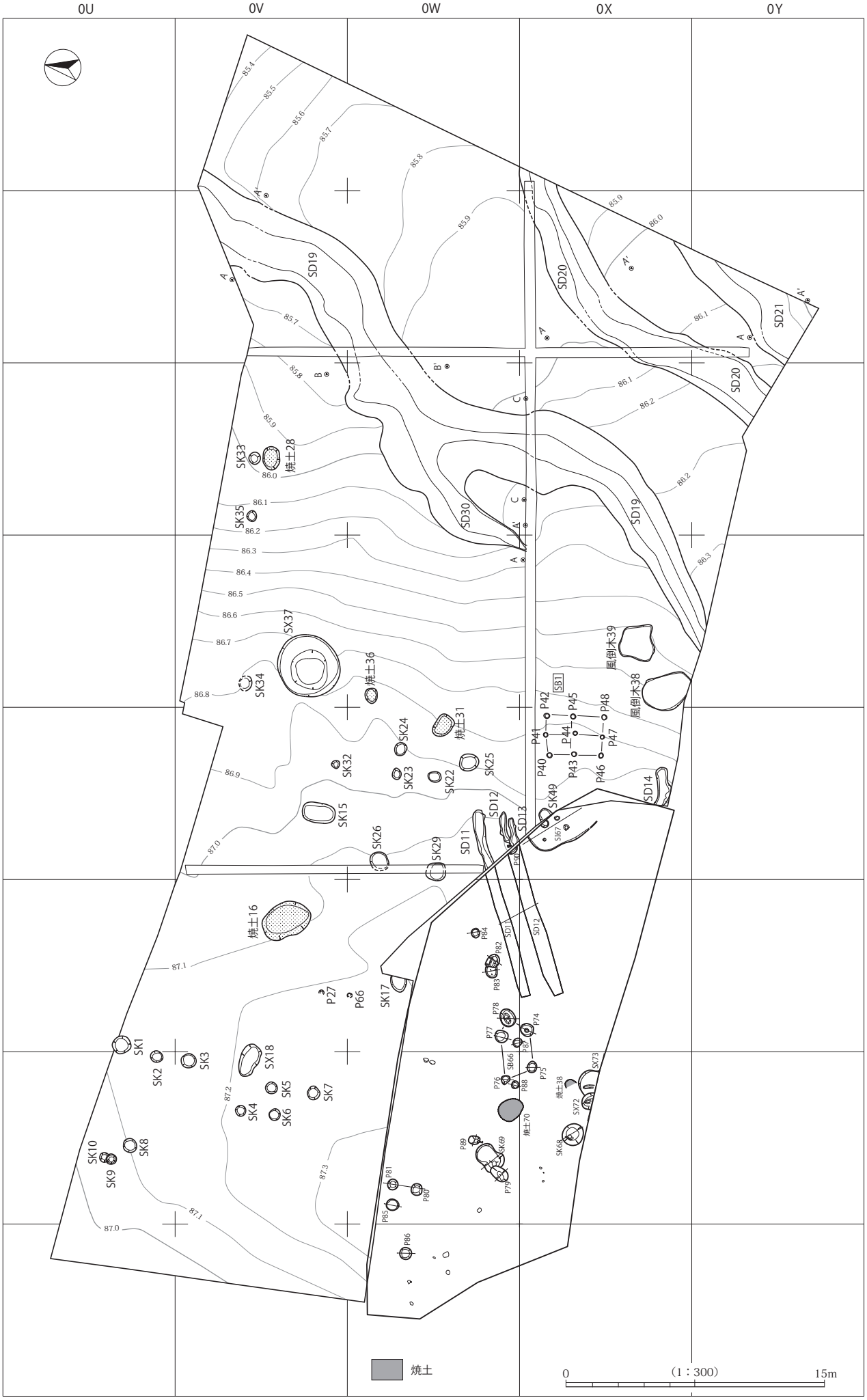
報告番号	種　別	石　材	出土位置					長さ	幅	厚さ	重さ（g）	遺存状態	備　考
			遺構	層位	グリッド			mm	mm	mm			
13	石匙	頁岩		V	OX	19	16	64	21	6	9.6	完形品	つまみ付
14	石匙	頁岩		V	OX	18	21	63	22	8	10.1	完形品	つまみ付
15	石錐	流紋岩		V	OX	19	11	51	28	3	4	完形品	つまみ部付
16	不定形石器	流紋岩		V	OX	19	22	55	39	14	26.2	欠損品	連続剥離調整
17	不定形石器	頁岩		V	OX	20	4	48	52	16	24.0	欠損品	連続剥離調整
18	不定形石器	頁岩		V	OW	21	3	51	65	23	51.4	欠損品	不連続剥離調整
19	不定形石器	頁岩		V	OW	20	15	58	64	16	51.3	欠損品	連続剥離調整
20	不定形石器	安山岩		V	OX	19	11	92	47	12	54	縦長剥片	不連続剥離調整
21	不定形石器	頁岩		V	OW	20	15	70	30	15	20.2		不連続剥離調整
22	不定形石器	流紋岩		V	OW	20	22	34	33	10	9.3		不連続剥離調整
23	不定形石器	頁岩		V	OX	19	7	79.0	39.0	15.0	46.6		不連続剥離調整
24	不定形石器	頁岩		V	OW	20	3	73.0	44.0	17.0	44.2		使用痕あり
25	不定形石器	凝灰岩		V	OW	20	5	149	100	41	590.0		連続剥離調整
26	箆状石器	流紋岩	SI1006	覆土	OW	21	1・2・6・7	103	46	23	83	完形品	
27	箆状石器	流紋岩		Ⅵ	OW	21	3	73	45	20	52	完形品	
28	石錘	凝灰岩		V	OX	18	22	70	73	18	108		両端打欠き
29	敲石	閃緑岩		V	OX	20	11	85	77	40	320.0		
30	敲石	輝緑岩		V	OX	20	11	110	57	27	240.0		上下端、片面中央に浅い敲打痕
31	敲石	頁岩		V	OW	19	25	83	88	38	390.0		周縁に敲打痕
32	磨石	凝灰岩	SI1006	覆土	OW	21	1・2・6・7	120	62	33	274.0		縄文時代早期の所産か
33	磨石	安山岩	P1027	覆土	OW	19	9	91	60	24	206.0		
34	磨石	安山岩		V	OX	20	11	116	97	41	675.0		下端に磨痕
35	磨石	花崗岩		V	OW	19	10	101	83	40	570.0		下端に磨痕
36	石皿？	安山岩	SI1006	覆土	OX	19	6	292	183	42	3200.0		
37	磨石？	安山岩	SS1015	V	OW	19	9・14	173	226	75	3600.0		
38	石皿	花崗岩	SS1015	V	OW	19	9・14	233	288	72	6300.0		敲打痕あり
39	石核	凝灰岩		V	OX	20	2	49	77	35	121.5		

石器観察表（上層）

報告番号	種　別	石　材	出土位置					長さ	幅	厚さ	重さ（g）	遺存状態	備　考
			遺構	層位	グリッド			mm	mm	mm			
56	不定形石器	頁岩		Ⅲ	OW	20	23	97	66	20	88.5		連続剥離調整
57	不定形石器	頁岩		Ⅲ	OW	19	5	86	55	18	78.1		連続剥離調整
58	不定形石器	流紋岩		Ⅲ	OW	20	9	60	39	10	28	片側縁に剥離調整	連続剥離調整
59	不定形石器	頁岩		Ⅱ	OW	19	19	76	44	12	41.0		不連続剥離調整
60	不定形石器	流紋岩		Ⅲ	OW	19	23	98	69	30	160.3		連続剥離調整
61	不定形石器	流紋岩		Ⅱ	OW	20		81	50	27	98.0		不連続剥離調整
62	不定形石器	流紋岩		Ⅱ	OW	20		79	36	23	47.0		不連続剥離調整
63	不定形石器	鉄石英（黄）		Ⅱ	OX	20		80	53	12	64		不連続剥離調整
64	不定形石器	頁岩		Ⅱ	OW	19	25	73	70	15	85.0		不連続剥離調整
65	不定形石器	頁岩	SK69	覆土	OW	20	20	69	52	21	52.8		不連続剥離調整
66	不定形石器	緑色泥岩	SI67	覆土	OX	18	12・16・17	47.0	46.0	8.0	12.7		使用痕あり
67	不定形石器	流紋岩	SI67	覆土	OX	18	12・16・17	52.0	45.0	8.0	16.6		使用痕あり
68	不定形石器	頁岩		Ⅱ	OW	20	8	108	75	25	143.0		連続剥離調整
69	磨製石斧	凝灰岩（珪質）		Ⅲ	OW	20	25	67	35	10	32		
70	磨製石斧	蛇紋岩	SI67	覆土	OX	18	12・16・17	100	44	24	171		
71	磨石	輝緑岩		Ⅲ	OW	20	5	97	110	44	754.0		一面に磨痕
72	敲石	頁岩		Ⅱ	OW	20	10	114	143	55	767.0		
73	敲石	半花崗岩		Ⅲ	OW	20	20	117	70	27	330.0		上下端片側に敲打痕
74	磨石	緑色凝灰岩		Ⅲ	OX	20	16	146	99	50	660.0		
75	磨石	安山岩		Ⅲ	OX	19	18	120	73	58	720.0		
76	石皿	花崗岩	SI67	覆土	OX	18	12・16・17	182	223	58	3750.0		
77	石核	頁岩		Ⅲ	OW	20	24	64	71	28	125.0		
78	石核	凝灰岩		Ⅲ	OX	20	8	80	83	55	480.0		
79	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅱ	OX	19	11	58	45	20	33.0	頂部欠損	
80	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅲ	OW	20	20	45	78	18	50.0	未製品	
81	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅲ	OW	20	20	73	65	18	45.0	未製品	
82	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅲ	OX	19	5	43	78	22	50.0	頂部欠損	
83	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅲ	OX	20	21	50	47	12	25.0	欠損品	
84	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅱ	OW	20		91	93	30	215.0	裏面剥離欠損	
85	三角形岩版	頁岩		Ⅱ	OW	21	4	123	122	13	227.0	板状	
86	三角形岩版	緑色凝灰岩		Ⅱ	OW	20		46	32.2	7.6	10.0	板状	

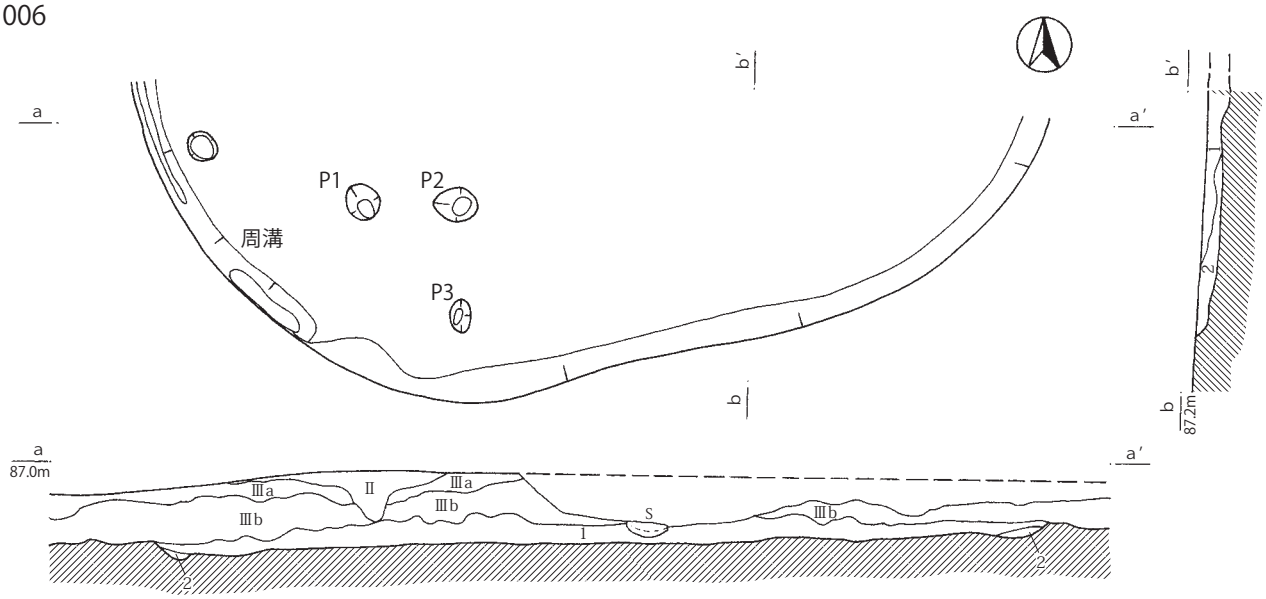
図　　版


0U
0V
0W
0X
0Y
14
15
16
17
18
19
20
21
2006年度調査区
2011年度調査区
SX1001
SX1002
SX1003
2006年度発掘
0
(1：300)
15m


0U
0V
0W
0X
0Y
14
15
16
17
18
19
20
21
SD19
SD20
SD21
SD30
SD11
SD12
SD13
SD14
SK33
焼土28
SK35
SX37
SK34
焼土36
焼土31
SK24
SK32
SK23
SK22
SK25
SK15
SK26
SK29
焼土16
SK17
P27
P66
SK1
SK2
SK3
SX18
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
風倒木39
風倒木38
SB1
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
SK49
焼土38
SX72
SX73
SK68
SK69
焼土70
焼土
0
（1：300）
15m

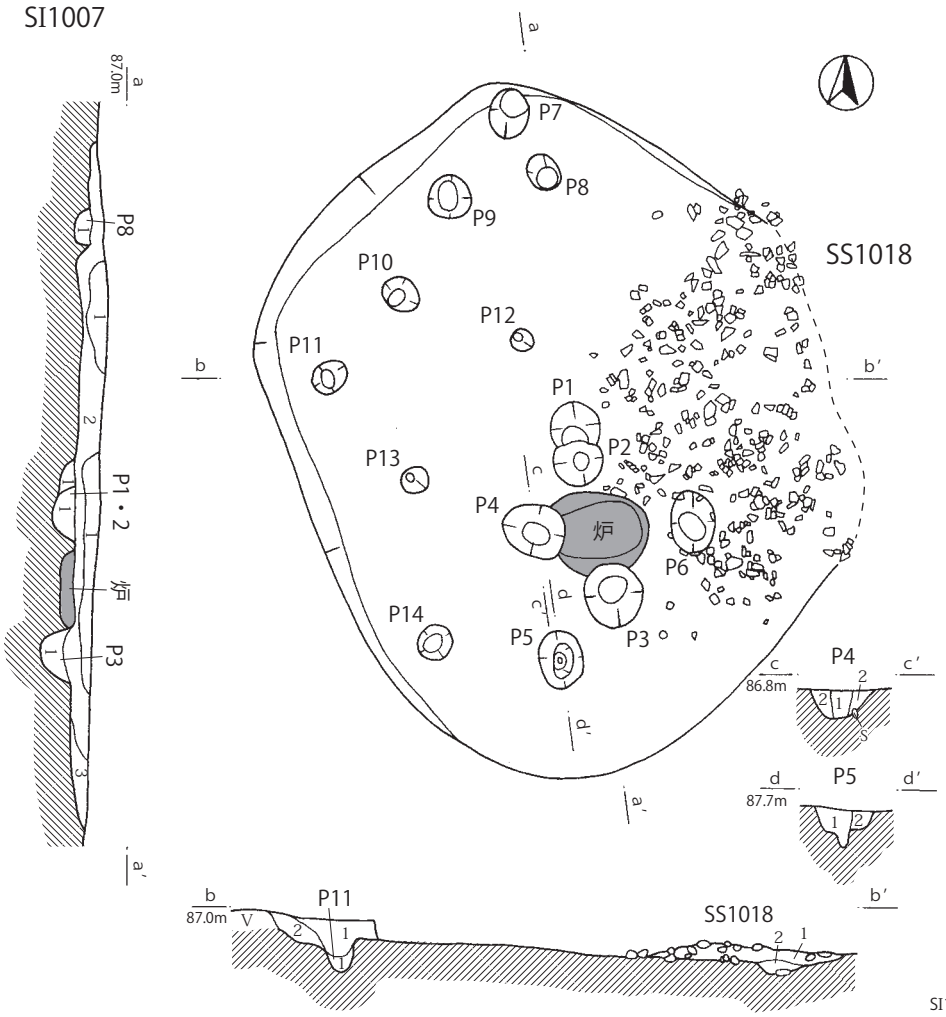
18
19
20
21
OW
OX
SS1018
SI1007
SS1017
SS1015
SX1001
SS1016
SX1002
SI1009
SS1019
SS1020
SB1005
SI1011
SK1014
SI1008
SI1010
SI1006
P1046
P1045
P1023
P1024
P1060
P1047
P1048
P1061
P1055
P1027
P1026
P1021
P1025
P1022
P1029
P1068
P1030
P1031
P1032
P1053
P1033
P1034
P1036
P1059
P1054
P1067
P1039
P1038
P1037
P1040
P1066
P1069
P1042
P1041
P1079
P1065
P1070
P1051
P1035
P1043
P1063
P1071
P1052
P1058
P1064
P1078
P1077
P1057
P1044
P1073
P1072
P1076
P1075
P1074
P1050
P1056
86.60m
86.70m
86.80m
86.90m
87.00m
87.10m
87.20m
87.30m
0
(1:150)
10m

SI1006



SI1006
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒多く粘性強い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土：黄色粘土粒白色砂粒多い

SI1007



SI1007
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
2　10YR3/4　暗褐色粘質土

SI1007　P11
1　10YR4/3　にぶい黄褐色土

SI1007　P4
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
　：砂粒を含みややソフト
2　10YR7/6　明黄褐色粘質土
　：黄色粘土粒多くしまっている

SI1007　P5
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
　：砂粒多くややソフト
2　10YR7/6　明黄褐色粘質土
　：黄色粘土粒多くややしまっている

SI1007　P1
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：砂粒多くややソフト

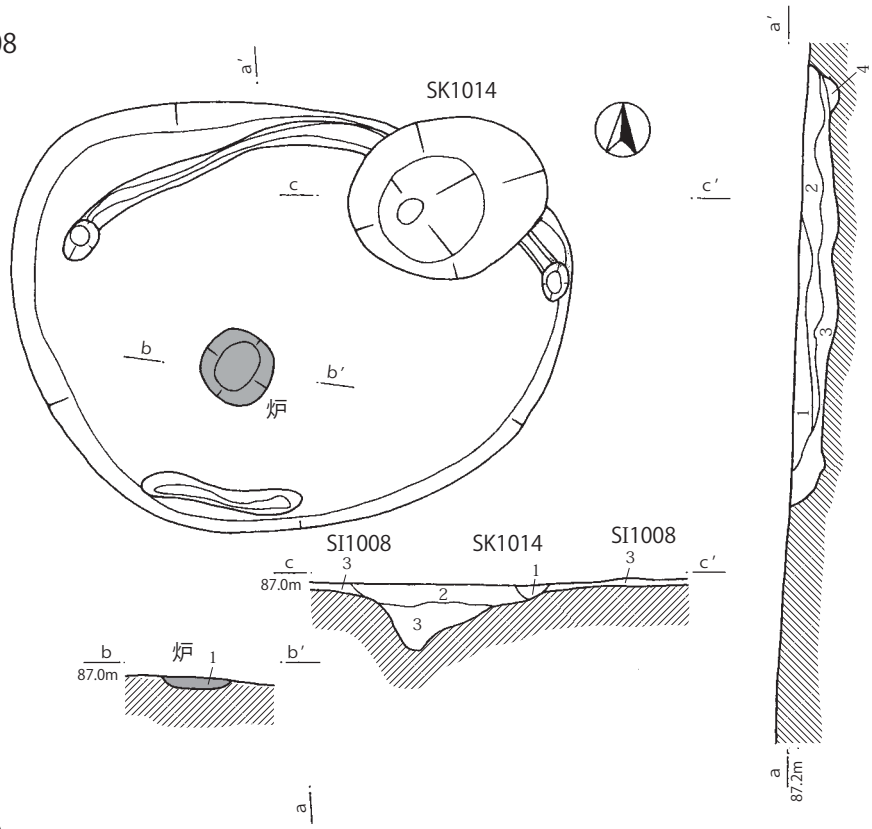
SI1007　P2
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：砂粒多くややソフト

SI1007　P3
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：砂粒多くややソフト

SS1018
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：砂粒多くややソフト
2　10YR5/2　にぶい黄褐色粘質土：砂粒多く粘性あり

0　　2m
（1:40）

SI1008

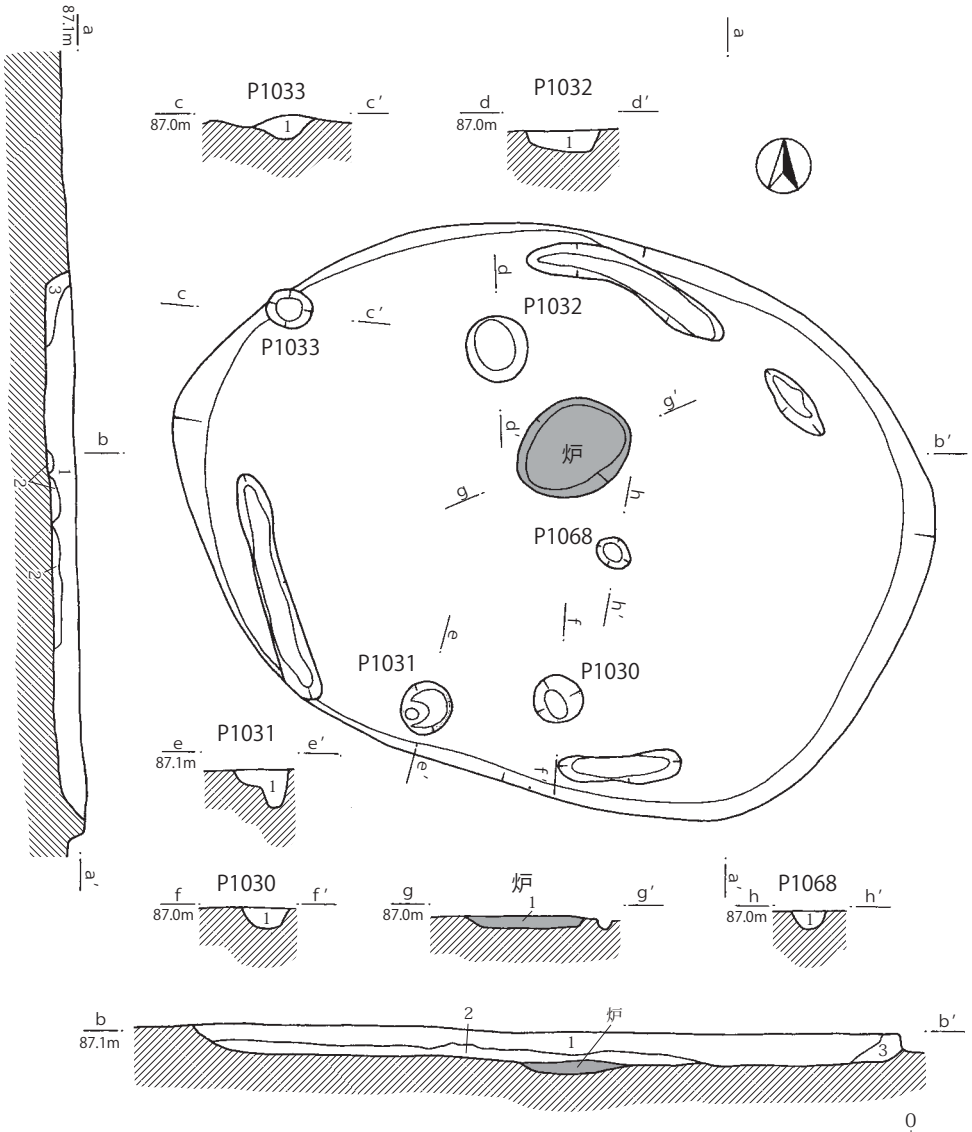


SI1008
1　10YR3/2　黒褐色粘質土：Ⅴ層に対比
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土
　：小礫を含み粘性しまりあり
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
　：砂粒多く粘性しまりあり

SI1008　炉
1　10YR4/6　褐色土
　：焼土粒が少量ややソフト

SK1014
1　10YR3/2　黒褐色土：Ⅴ層に対比
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
　：細石粒が多量。粘性しまりあり
3　10YR4/2　灰褐色砂質土
　：砂粒多くややソフト

SI1009



SI1009
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
　：黄色砂粒多量、ややしまりあり
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
　：細石粒を含み粘性・しまりあり
3　10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土
　：白色砂粒多量、ザラつく

SI1009　炉
1　10YR4/4　褐色粘質土
　：焼土粒少量、粘性・しまりなし

P1030
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり

P1031
1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
　：細石粒多量、粘性・しまり

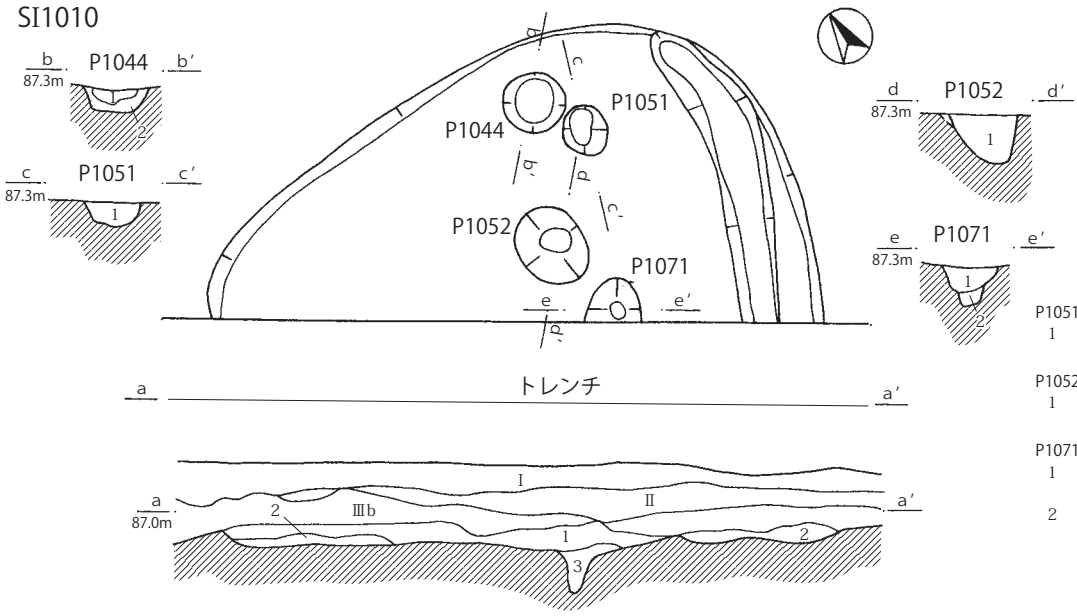
P1032
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり

P1033
1　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
　：白色粒少量、粘性・しまり

P1068
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり

0　2m
（1:40）

SI1010



SI1010
1　10YR3/2　黒褐色粘質土
：V層に対比
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土
：細石粒多量、粘性・しまりあり
3　10YR6/2　灰黄褐色粘質土
：砂粒多くややソフト

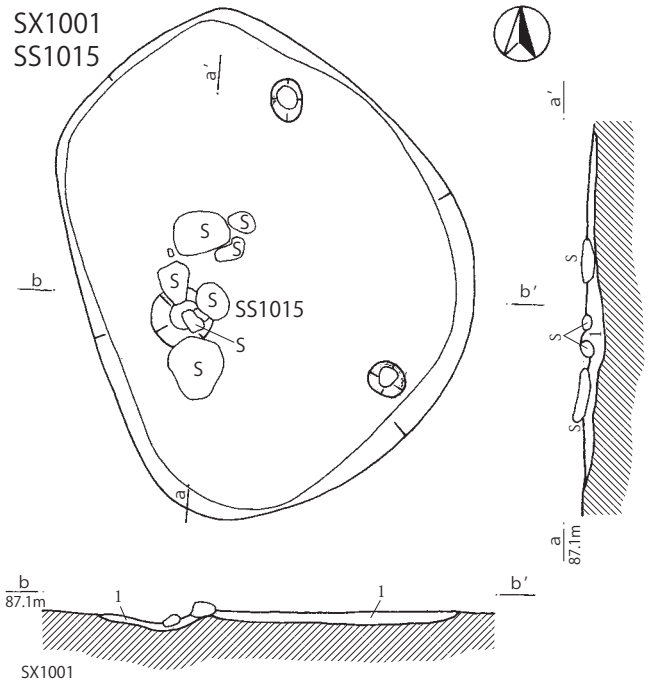
P1044
1　10YR3/3　暗褐色粘性土
：黄色砂粒少量
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土
：細石粒少量、粘性・しまりあり

P1051
1　10YR3/4　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまりあり

P1052
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまりあり

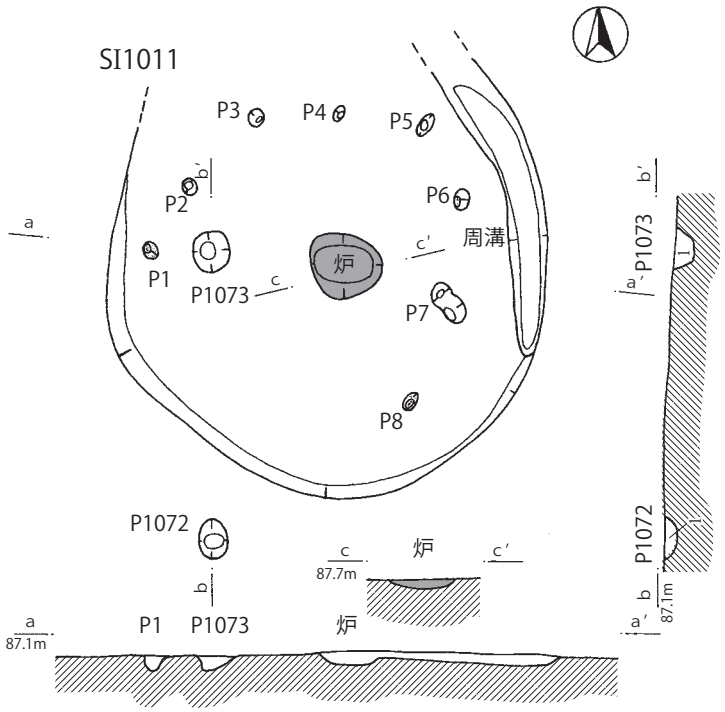
P1071
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまりあり
2　10YR5/2　灰黄褐色粘質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまりあり

SX1001
SS1015



SX1001
1　10YR4/2　灰褐色粘質土：灰黄色粘土粒が多く、粘性・しまりあり

SI1011



SI1011
1　10YR 3/2　黒褐色土：V層に対比

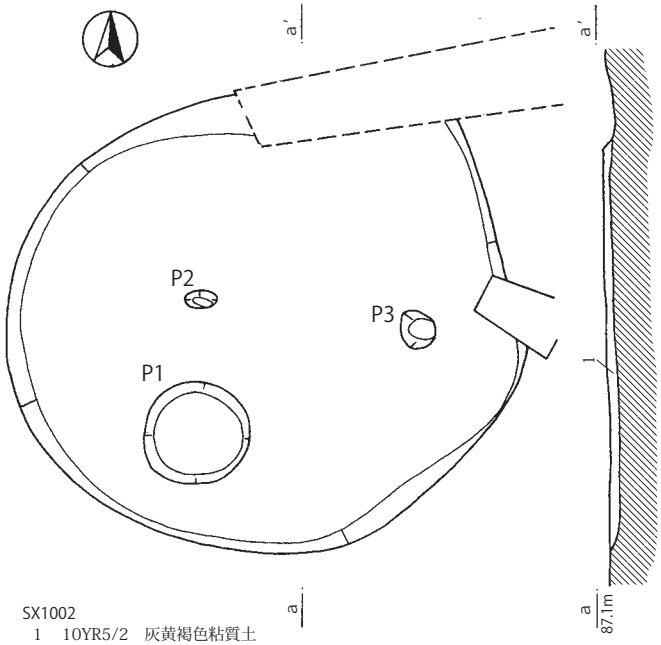
SI1011　炉
1　10YR4/4　褐色土
：焼土粒少量、粘性・しまりなし

SS1015
1　10YR4/2　灰褐色粘質土：V層より黄色粘土粒多量、粘性・しまりあり

P1072
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまりあり

P1073
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまりあり

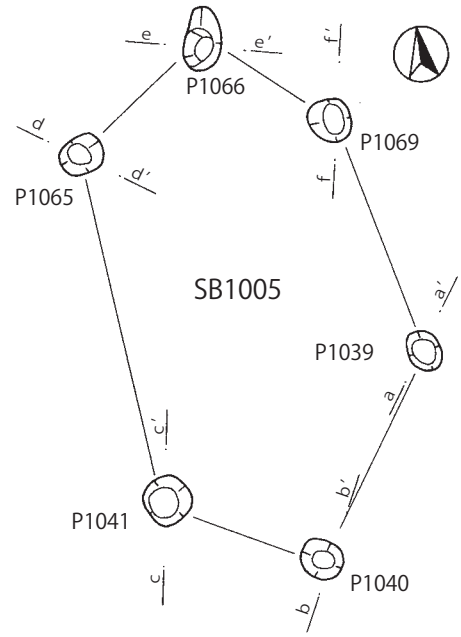
SX1002

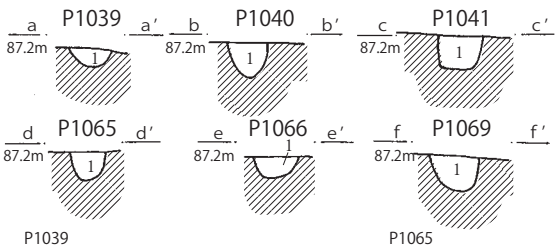


SX1002
1　10YR5/2　灰黄褐色粘質土

0　2m
（1:40）

P1039～1041・1065・1066・1069





P1039
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

P1040
1　10YR2/3　黒褐色粘質土
：V層より細石粒が少量、粘性・しまり弱

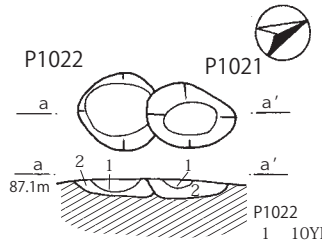
P1041
1　10YR2/3　黒褐色粘質土
：V層より細石粒が少量、粘性・しまり弱

P1065
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

P1066
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

P1069
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

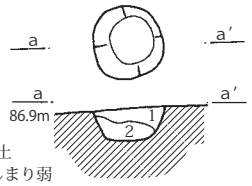
P1021・1022



P1021
1　10YR5/2　灰黄褐色粘質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱
2　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強

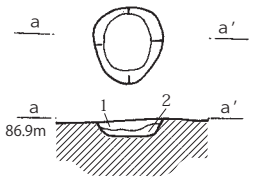
P1022
1　10YR5/2　灰黄褐色粘質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱
2　10YR3/2　黒褐色粘質土
：V層より細石粒が少量、
粘性・しまり弱

P1023



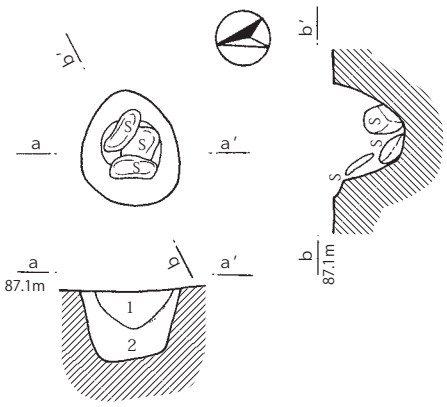
P1023
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強
2　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1024



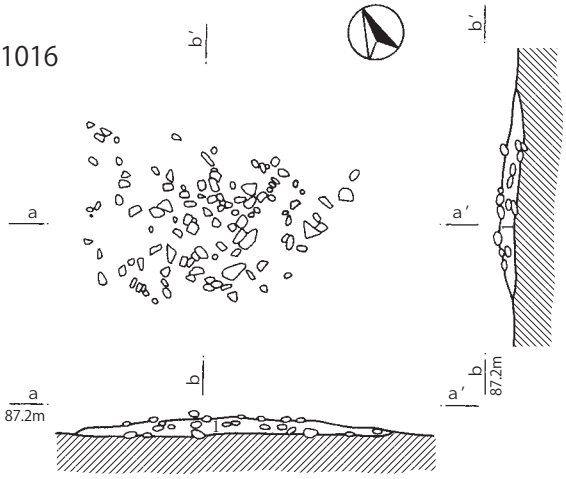
P1024
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強
2　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1025



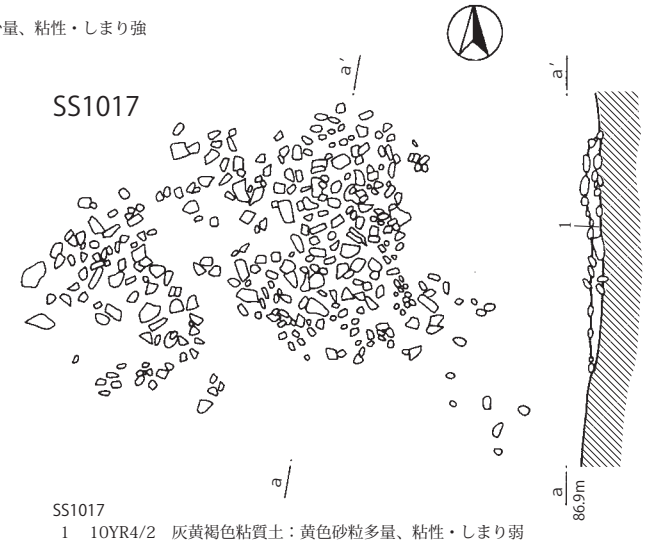
P1025
1　10YR2/3　黒褐色粘質土
：V層より細石粒が少量、粘性・しまり弱
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

SS1016



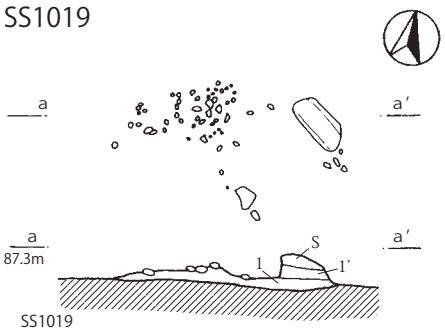
SS1016
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

SS1017



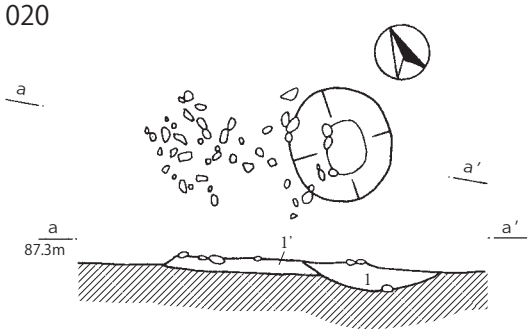
SS1017
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

SS1019



SS1019
1　10YR4/2　灰褐色粘質土：V層より黄色粘土粒多量、粘性・しまりあり
1’10YR5/2　灰黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

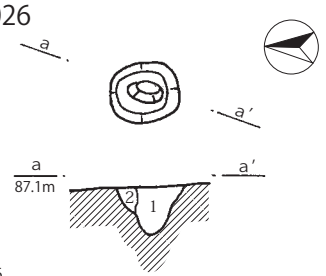
SS1020



SS1020
1　10YR4/2　灰褐色粘質土：V層より黄色粘土粒多量、粘性・しまりあり
1’10YR5/2　灰黄褐色粘質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱

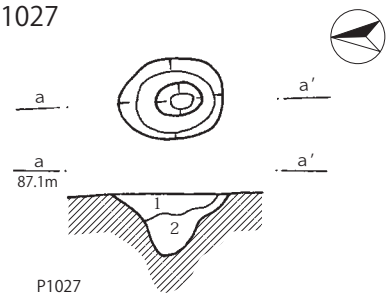
0　2m
（1:40）

P1026



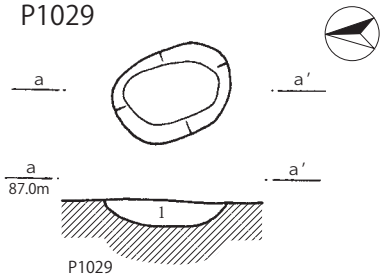
P1026
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1027



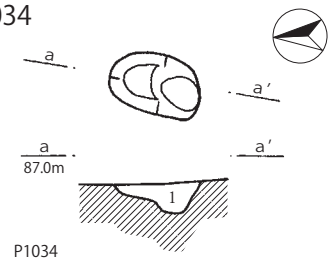
P1027
1　10YR3/3　暗褐色粘質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1029



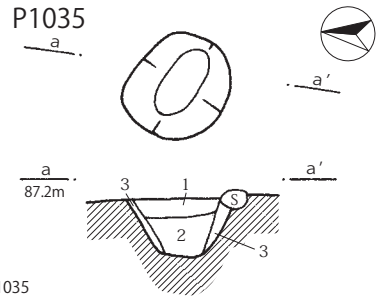
P1029
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い

P1034



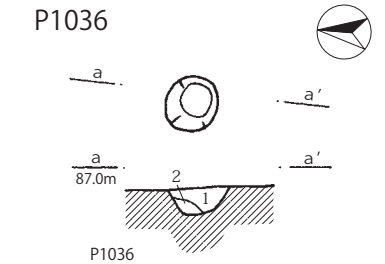
P1034
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い

P1035



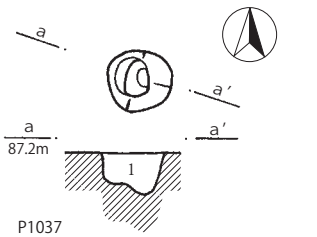
P1035
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：V層より細石粒多量、粘性・しまりあり
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：1より粘性・しまり弱い
3　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1036



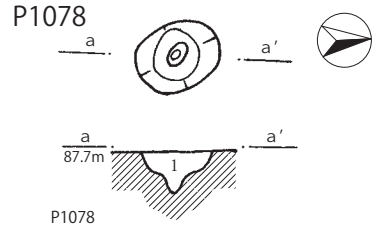
P1036
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

P1037



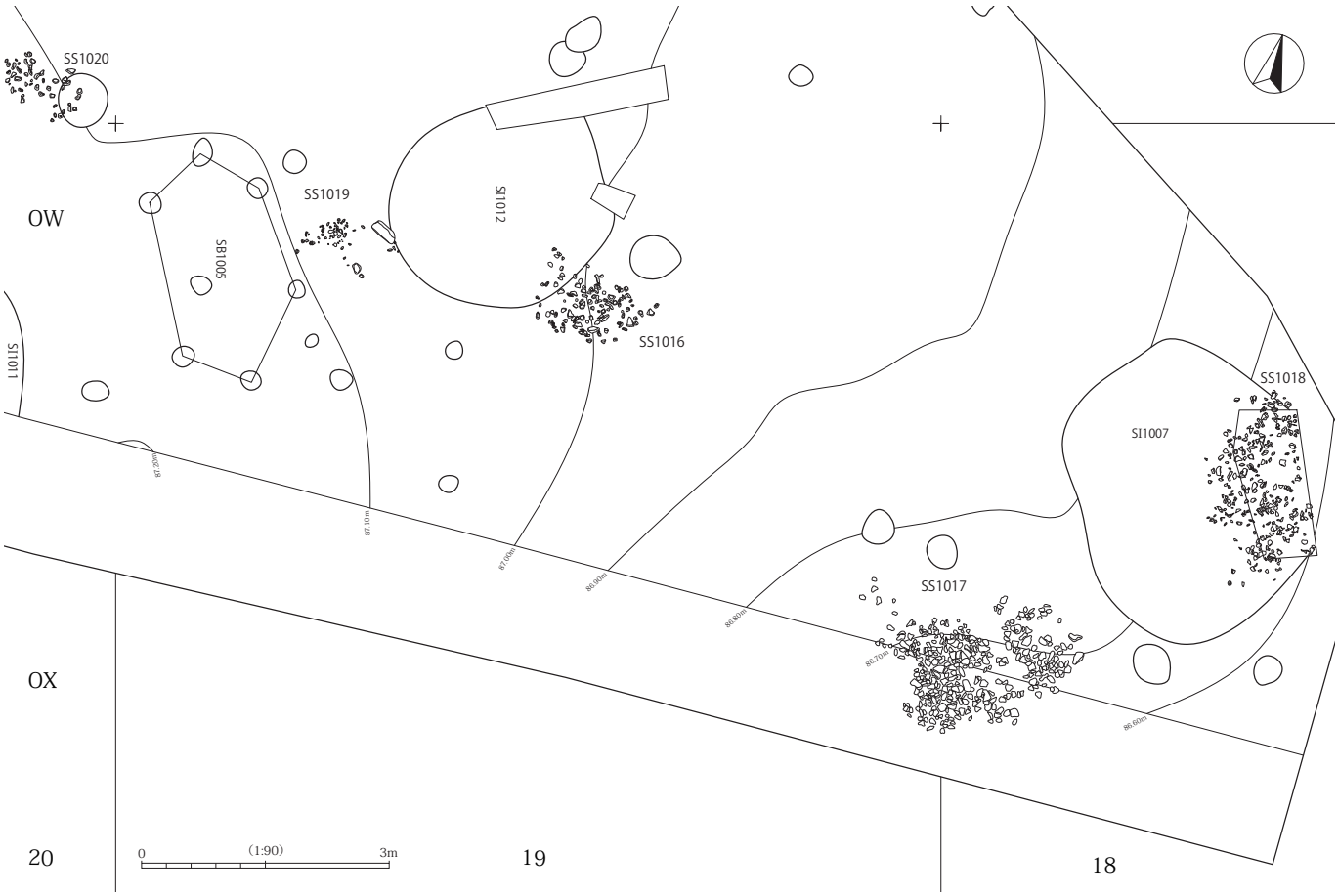
P1037
1　10YR3/3　暗褐色粘質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまり強い

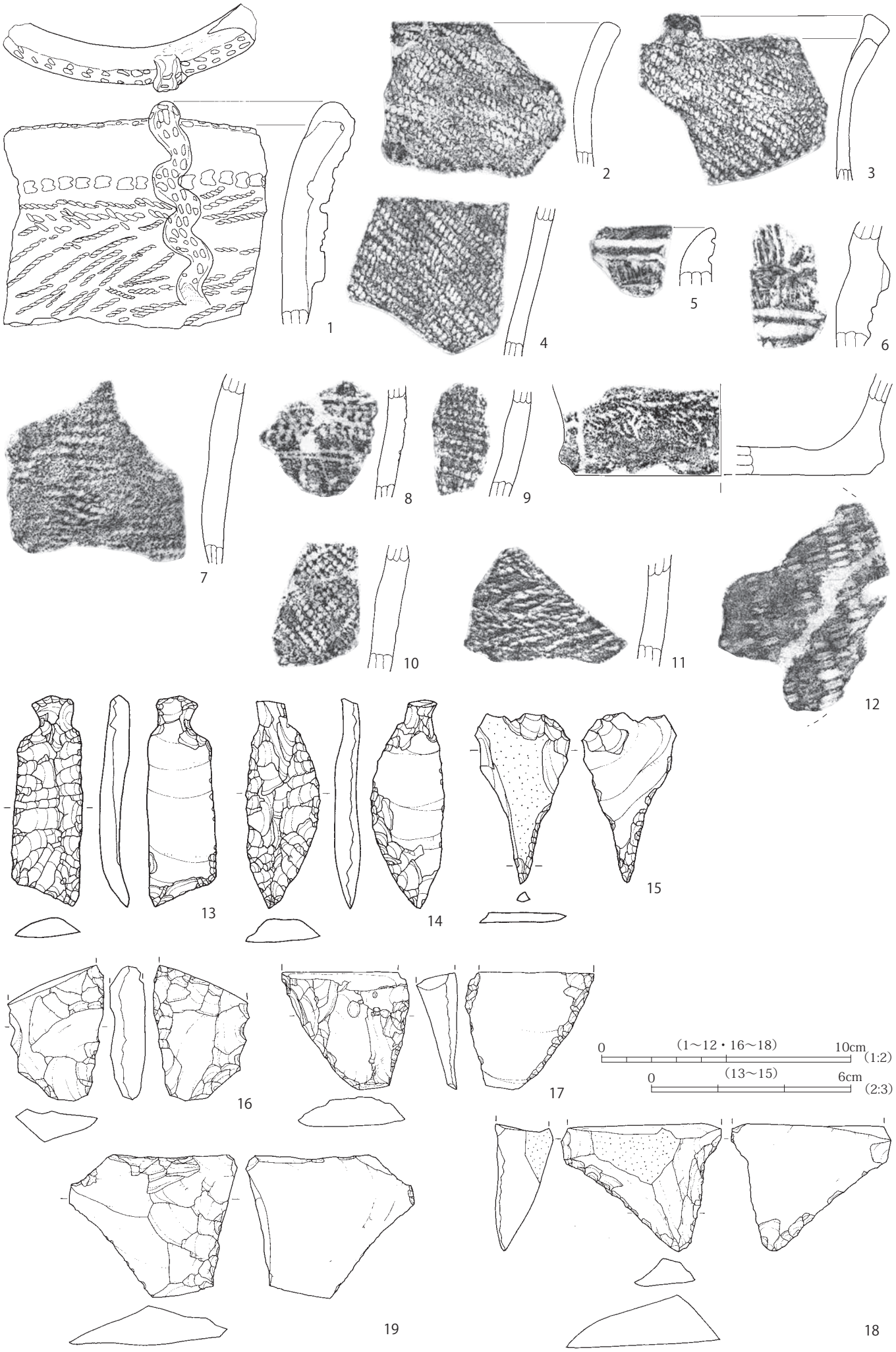
P1078

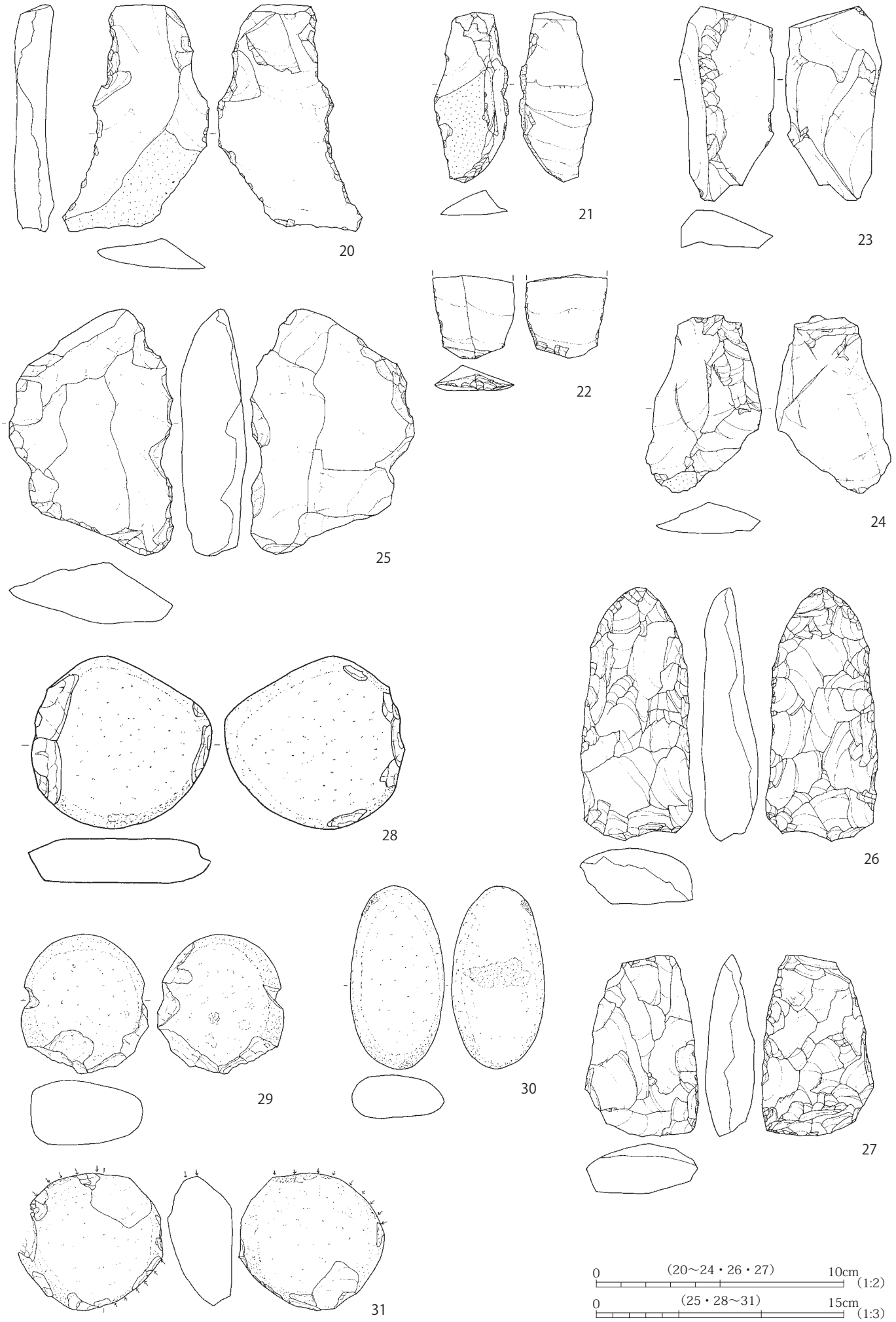


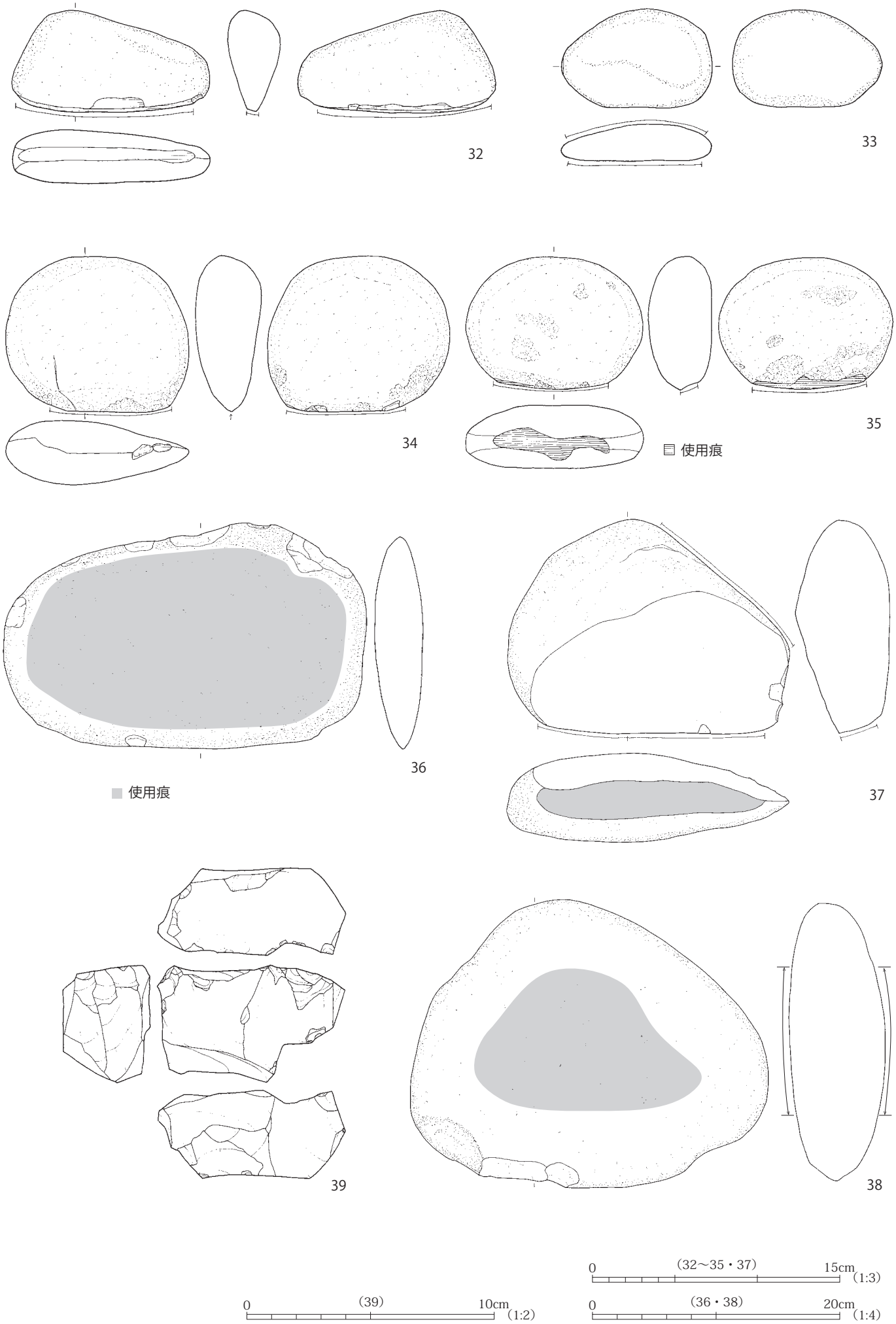
P1078
1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
：細石粒多量、粘性・しまりあり

0　1m
（1:20）




1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0 (1～12・16～18) 10cm (1:2)
0 (13～15) 6cm (2:3)

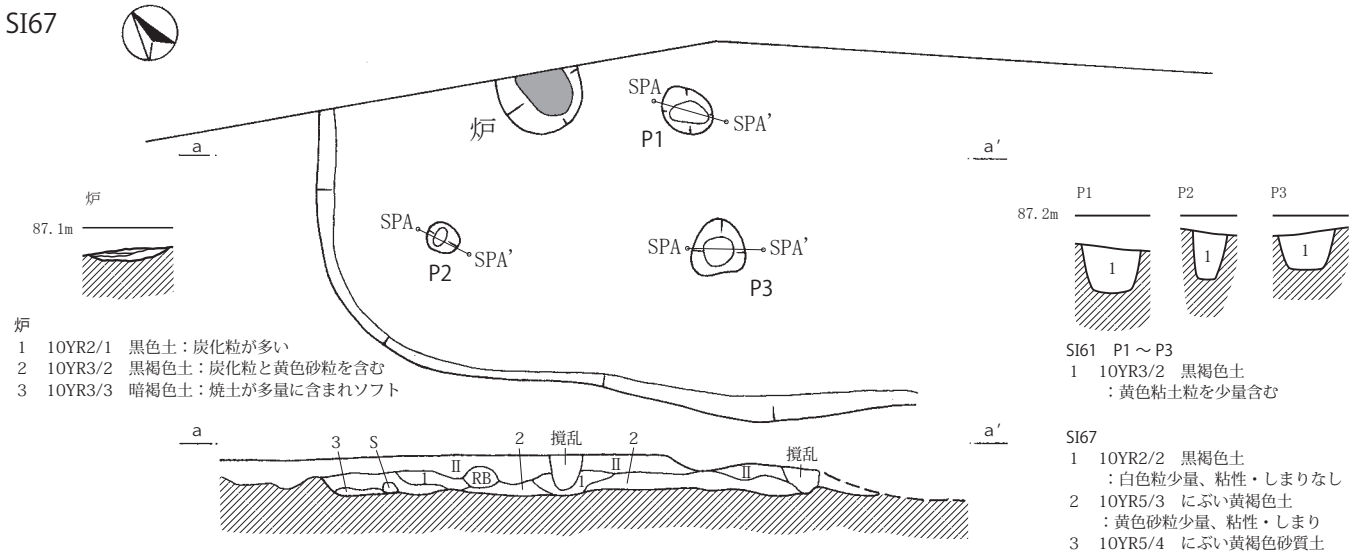

20
21
23
22
24
25
26
28
29
30
27
31
0
(20～24・26・27)
10cm
(1:2)
0
(25・28～31)
15cm
(1:3)


32
33
34
35
使用痕
36
使用痕
37
39
38
0 (32～35・37) 15cm (1:3)
0 (39) 10cm (1:2)
0 (36・38) 20cm (1:4)

遺構配置図２　（上層）

18
19
20
21
OW
OX
SI67
P90
SD11
SD12
P84
P82
P83
P78
P74
P77
P87
SB66
P75
P76
P88
焼土38
SX73
SX72
焼土70
P89
SK69
SK68
P79
P81
P80
P85
P86
0
(1:150)
10m

SI67

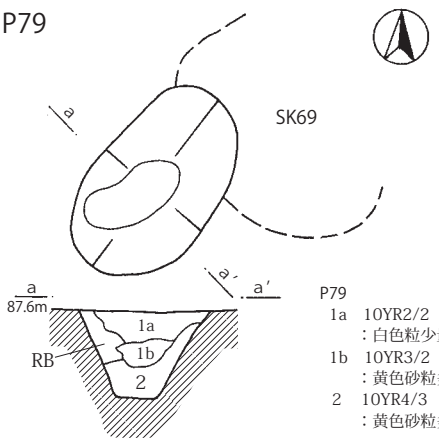


炉
1　10YR2/1　黒色土：炭化粒が多い
2　10YR3/2　黒褐色土：炭化粒と黄色砂粒を含む
3　10YR3/3　暗褐色土：焼土が多量に含まれソフト

SI61　P1～P3
1　10YR3/2　黒褐色土
　：黄色粘土粒を少量含む

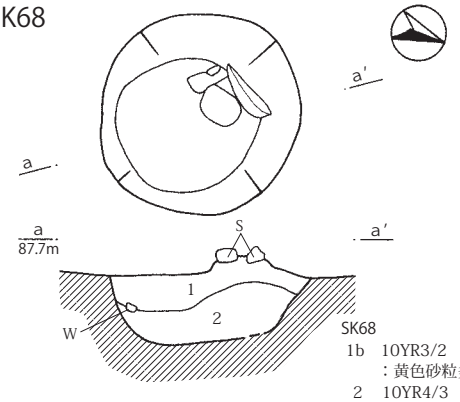
SI67
1　10YR2/2　黒褐色土
　：白色粒少量、粘性・しまりなし
2　10YR5/3　にぶい黄褐色土
　：黄色砂粒少量、粘性・しまり
3　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり強
※RB は黄褐色粘質土

P79



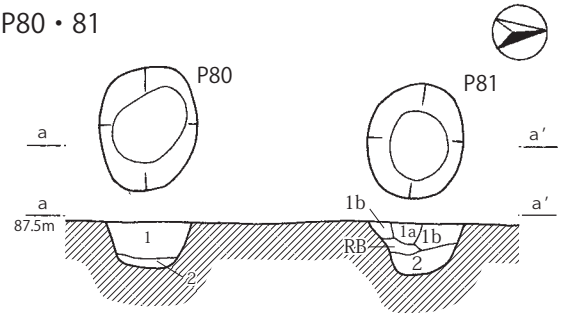
P79
1a　10YR2/2　黒褐色土
　：白色粒少量、粘性・しまりなし
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

SK68



SK68
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

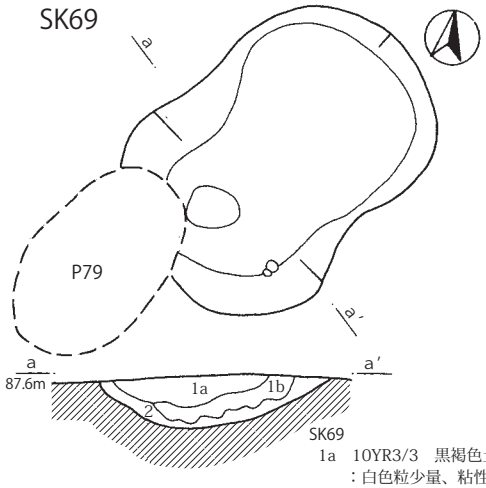
P80・81



P80
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

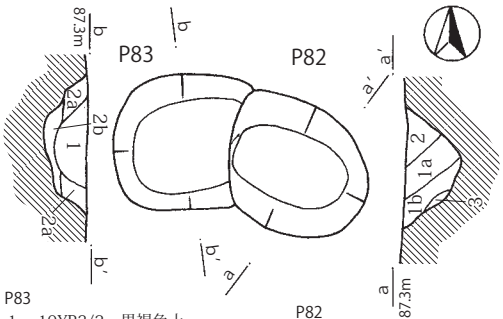
P81
1a　10YR3/3　暗褐色土：Ⅱ層に対比
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

SK69



SK69
1a　10YR3/3　黒褐色土
　：白色粒少量、粘性・しまりなし
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

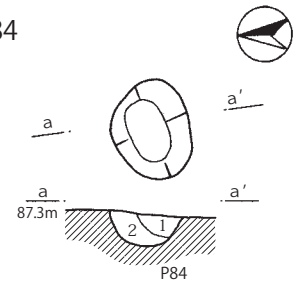
P82・83



P83
1　10YR3/2　黒褐色土
　：白色粒少量、粘性・しまりなし
2a　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2b　10YR4/2　灰黄褐色砂質土
　：2a より粘性しまり弱い

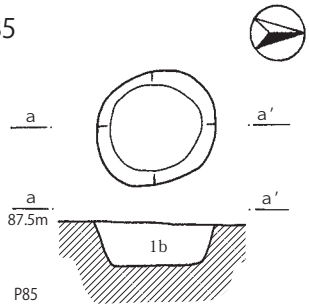
P82
1a　10YR2/3　黒褐色土：白色粒少量、粘性・しまりなし
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土：２より粘性しまり強い

P84



P84
1a　10YR2/3　黒褐色土
　：白色粒少量、粘性・しまりなし
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

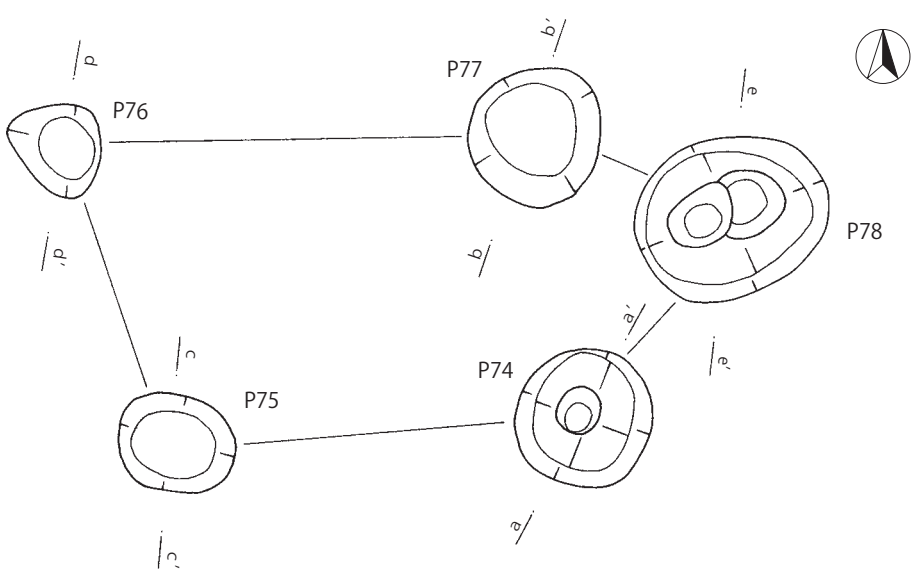
P85



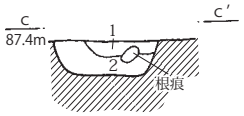
P85
1b　10YR3/2　暗褐色砂質土
　：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

0　(1:40)　2m

SB66

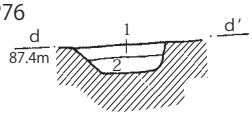


P75



P75
1　10YR3/4　暗褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

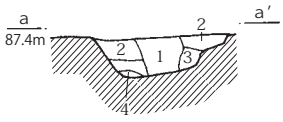
P76



P76
1　10YR3/4　暗褐色土：Ⅱ層に対比
2　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

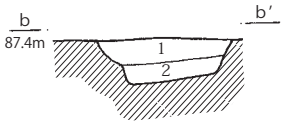
P74
1　10YR3/2　黒褐色土
：白色粒少量、粘性・しまりなし
2　10YR3/3　暗褐色土：Ⅱ層に対比
3　10YR3/4　暗褐色土
：２より粘質・しまりあり
4　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P74

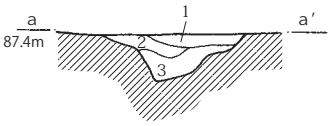


P77
1　10YR3/4　暗褐色土：Ⅱ層に対比
2　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P77

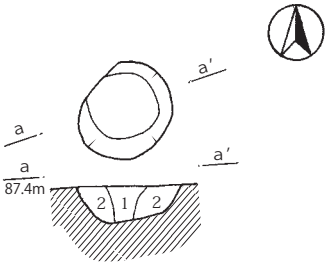


P78



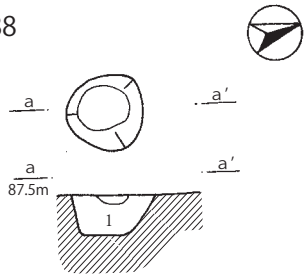
P78
1　10YR2/3　黒褐色土
：白色粒少量、粘性・しまりなし
2　10YR3/4　暗褐色土：Ⅱ層に対比
3　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P87



P87
1　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR3/3　暗褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P88

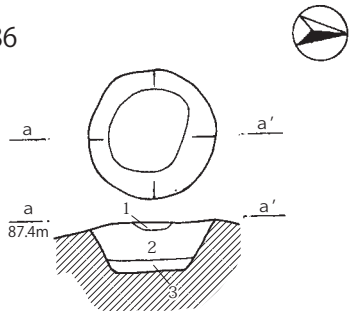


P88
1　10YR3/4　暗褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

P90

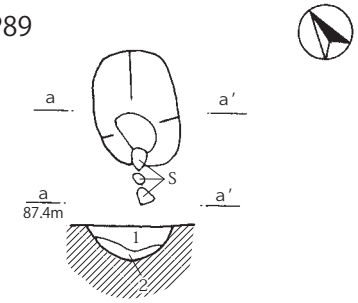
P90
1　10YR3/3　暗褐色土

P86



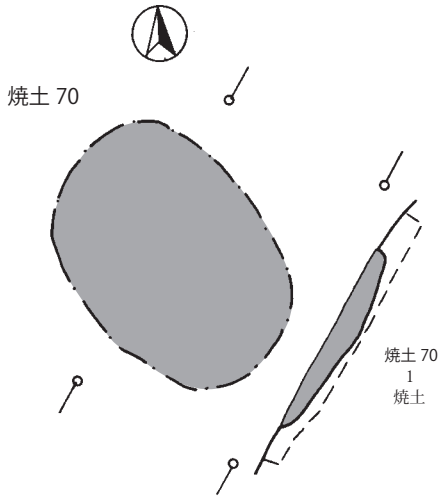
P86
1　10YR3/2　暗褐色土：Ⅱ層に対比
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
3　10YR4/2　灰黄褐色砂質土
：２より粘性しまり強い

P89

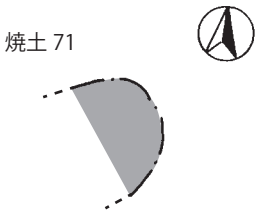


P89
1　10YR3/4　暗褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり弱い

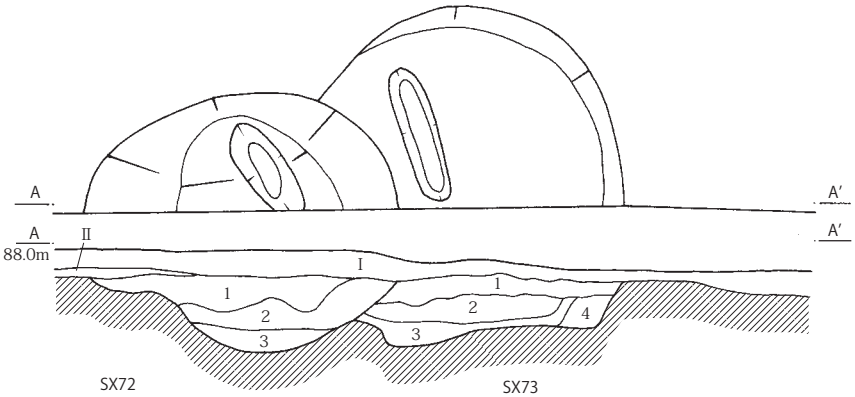
0　（1:40）　2m



焼土 70
1　7.5YR4/3　褐色砂質土
焼土　5YR4/6　赤褐色砂質土

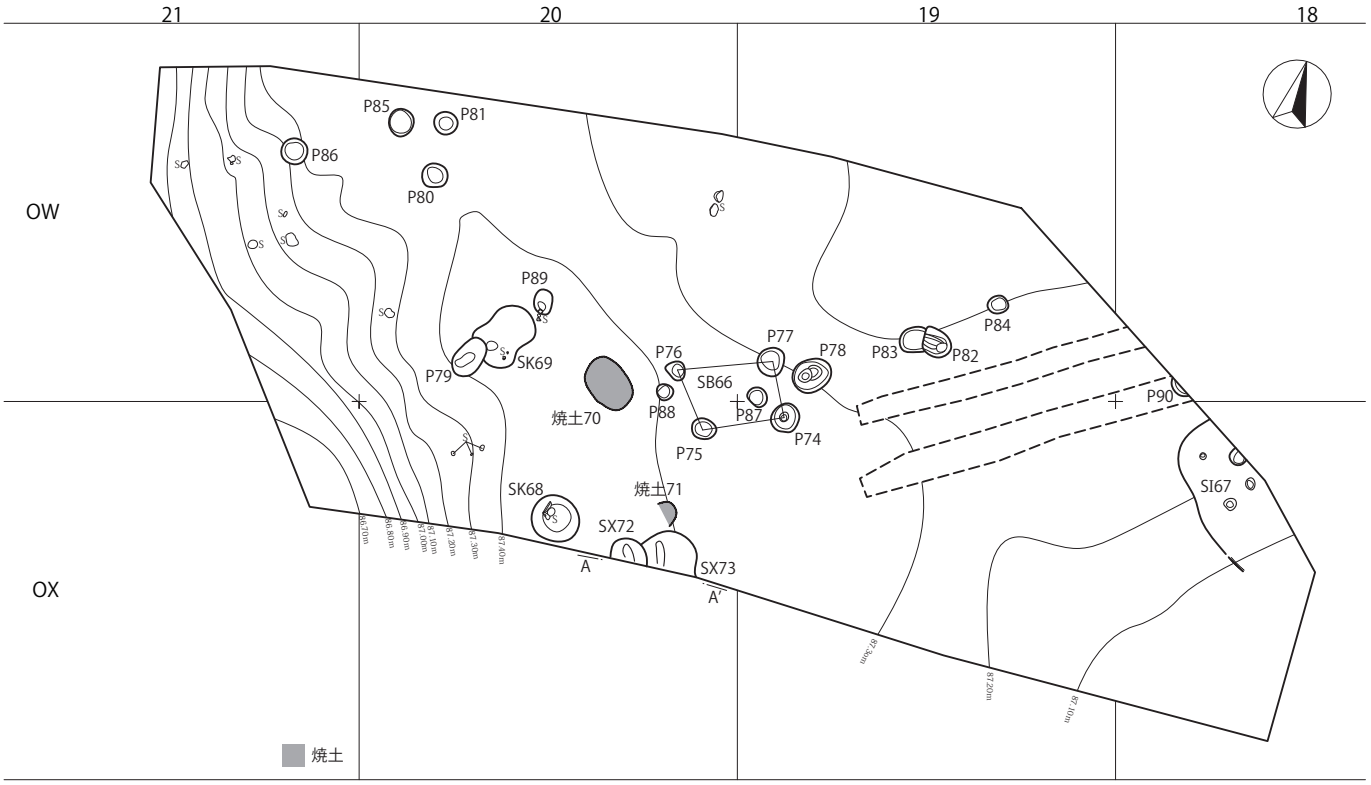


焼土 71
－　7.5YR4/3　褐色砂質土

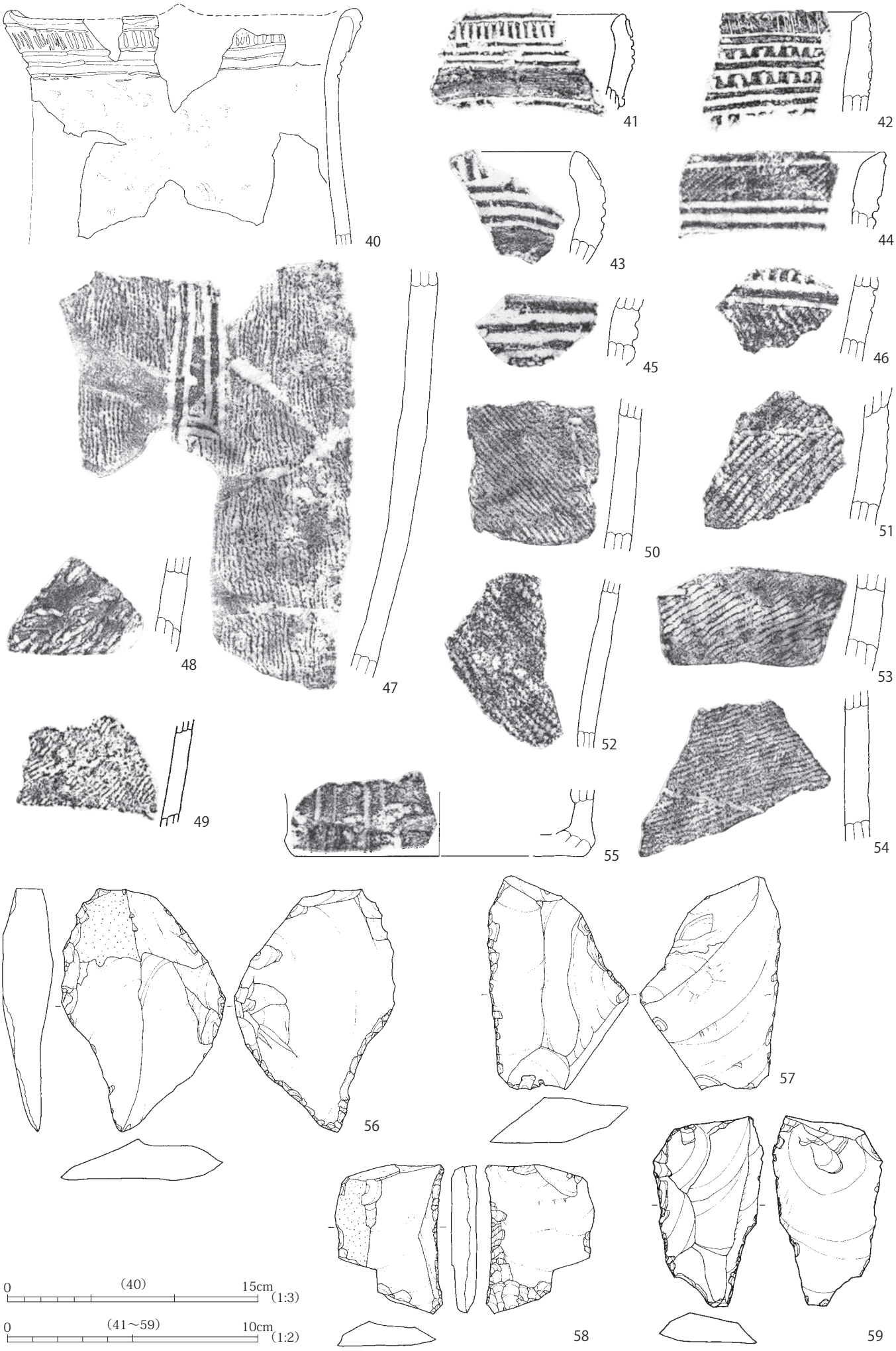


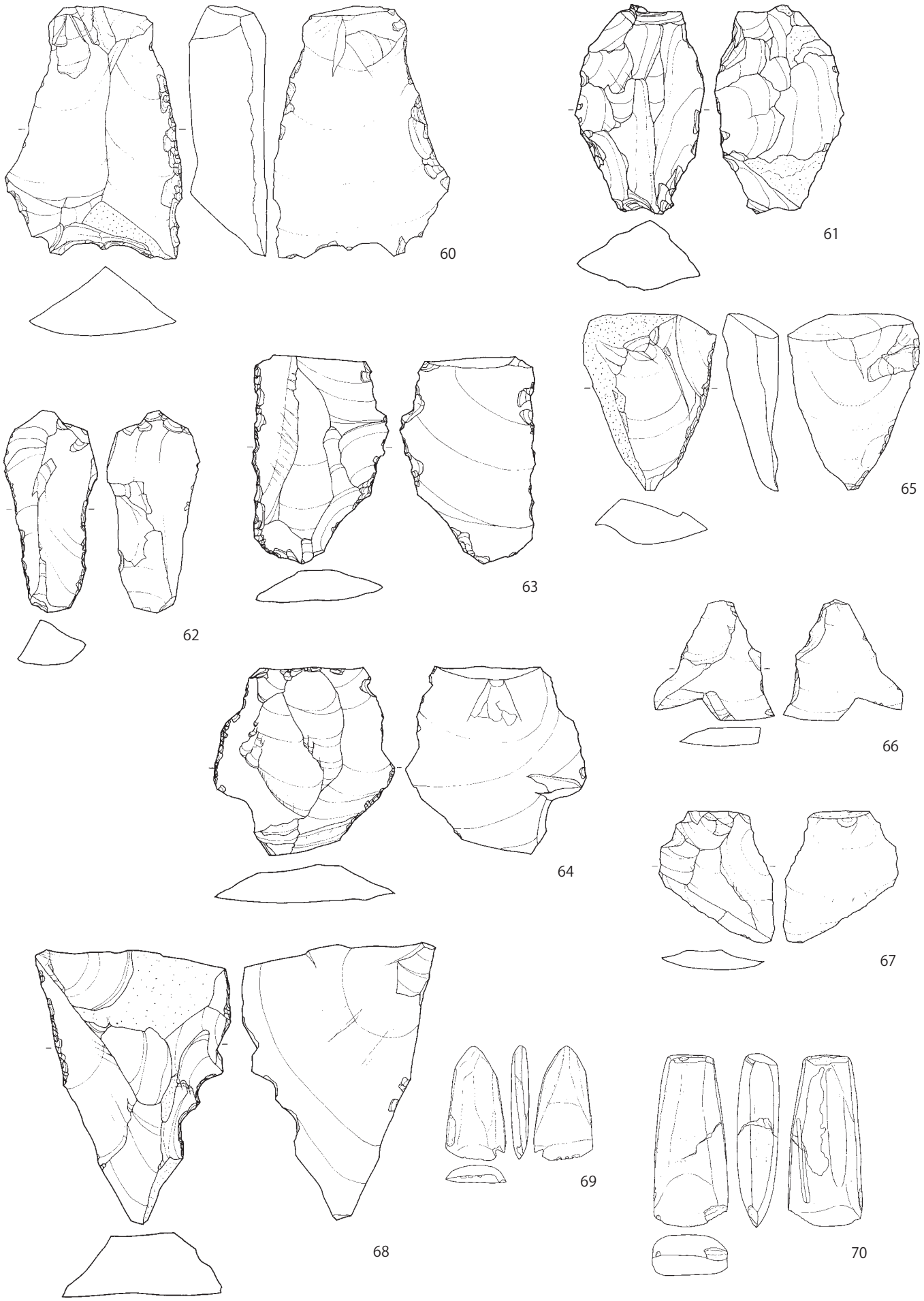
SX72
1　10YR3/4　暗褐色土：Ⅱ層は対比
2　10YR3/2　暗褐色砂質土
：黄色砂粒少量、粘性・しまりなし
3　10YR5/2　灰黄褐色砂質土
：黄色砂粒多量、粘性・しまり強

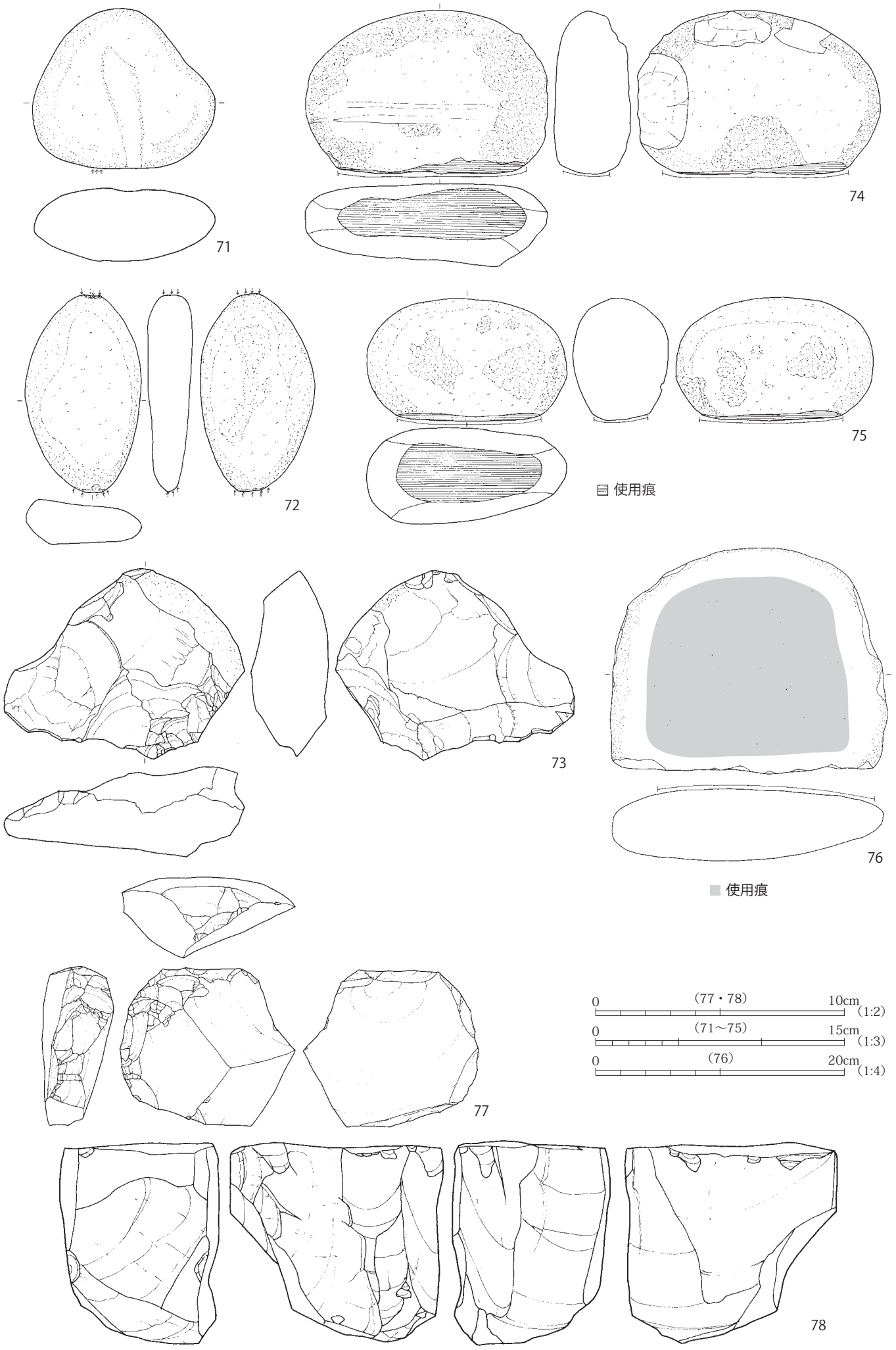
SX73
1　10YR3/4　暗褐色土：Ⅱ層に対比
2　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土：黄色砂粒少量、粘性・しまり弱
3　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土：黄色砂粒多量、粘性・しまり強
4　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土：３より粘性、しまり強

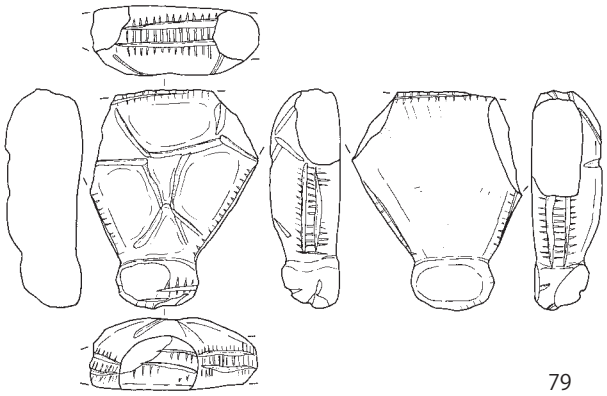


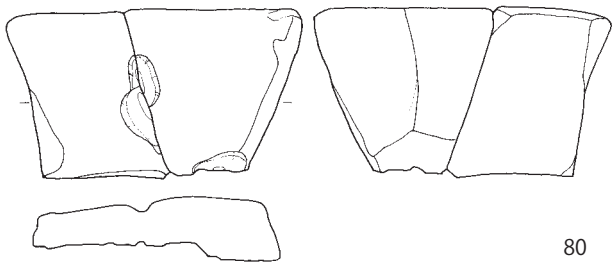
0　(1:400)　10m

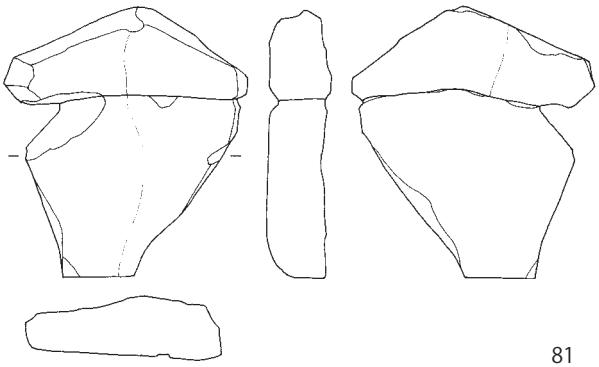

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0 (40) 15cm (1:3)
0 (41～59) 10cm (1:2)

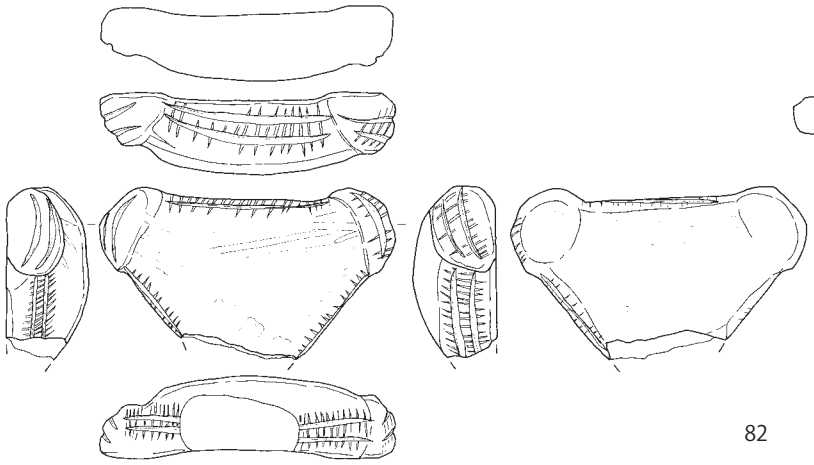

60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
(60～68)
10cm
(1:2)
0
(69・70)
15cm
(1:3)

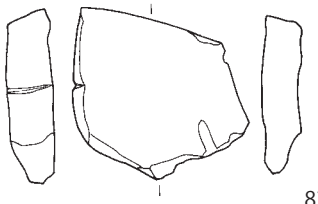

71
74
72
75
使用痕
73
76
使用痕
77
0
（77・78）
10cm
（1:2）
0
（71～75）
15cm
（1:3）
0
（76）
20cm
（1:4）
78

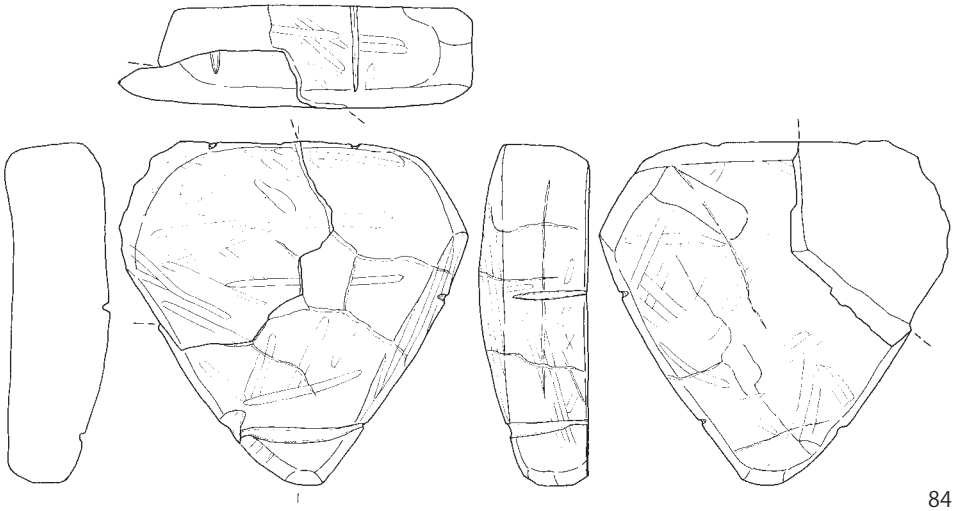

79

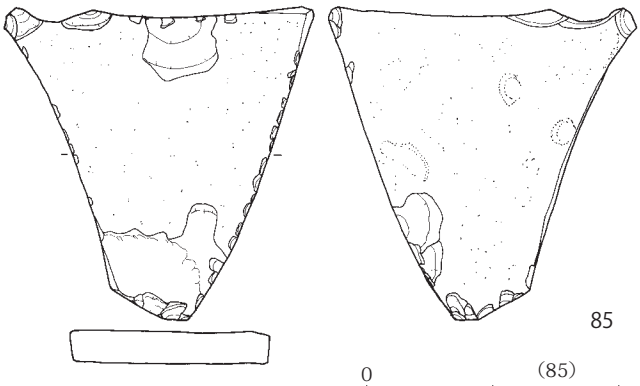

80

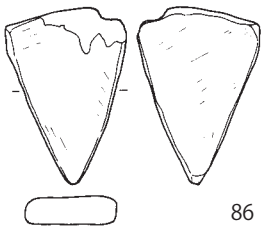

81


82

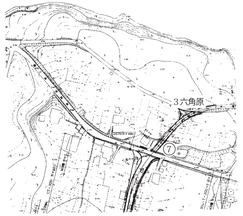

83


84


85

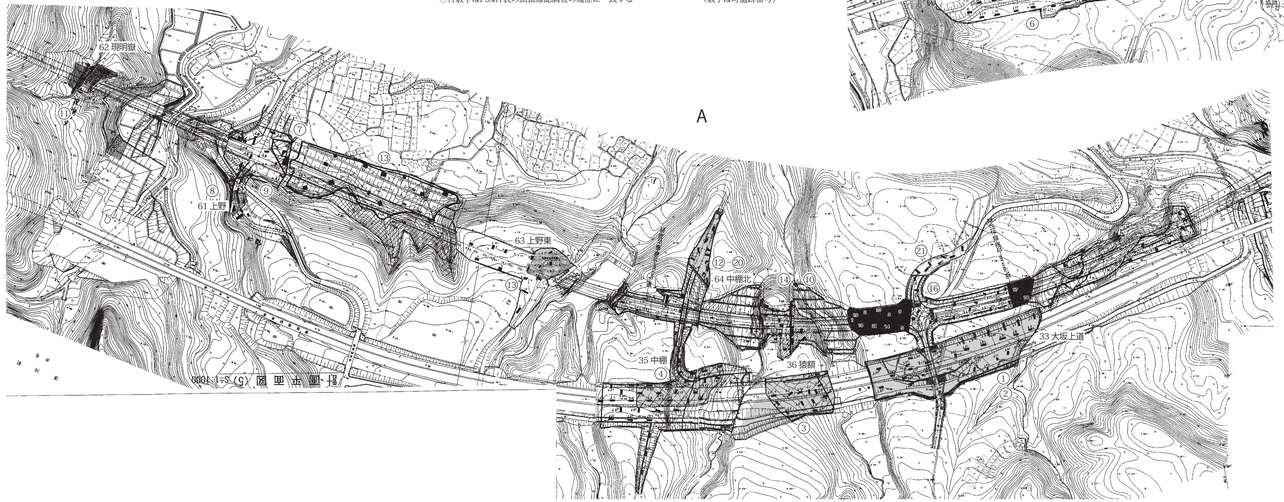

86

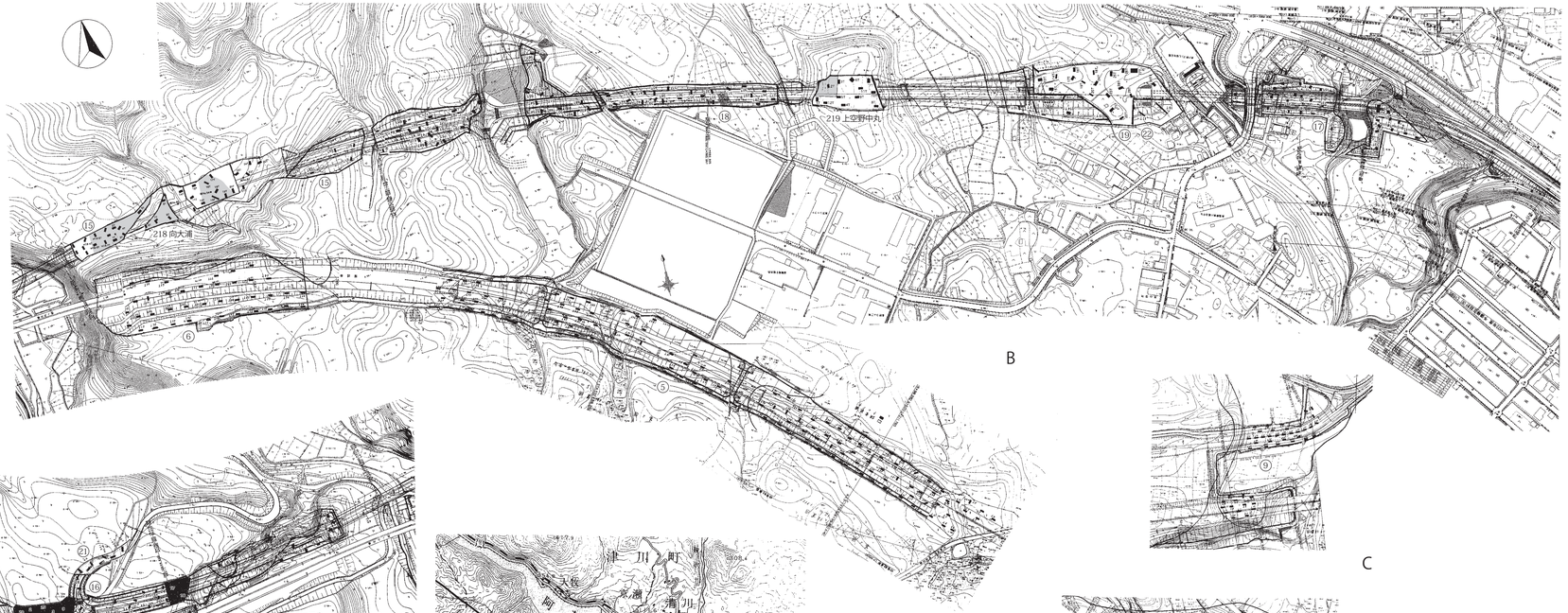
0 (85) 15cm (1:3)　　0 (79～84・86) 10cm (1:2)

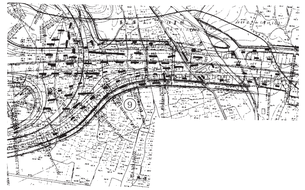


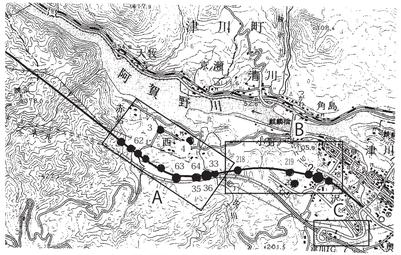
3 六角原	縄文中期～後期・平安	36 猿願	縄文前期～中期
4 宮野	縄文中期～後期	61 上野	縄文前期～後期
5 赤岩	縄文中期～晩期	62 現明崎	縄文前期～後期
32 今井野	縄文	63 上野東	縄文前期～後期・平安
33 大坂上道	縄文前期～晩期・平安	64 中棚北	縄文
35 中棚	縄文前期～中期	218 向大浦	

○付数字は P32第1表の試掘確認調査の履歴に一致する　　（数字は町遺跡番号）









位置図（1：50,000）

遺跡遠景（南上空から）（→の交点が調査区）上：阿賀野川（左が下流）、阿賀町西集落

遠景（東上空から）揚川改良工事と右：磐越自動車道（福島方面を望む）

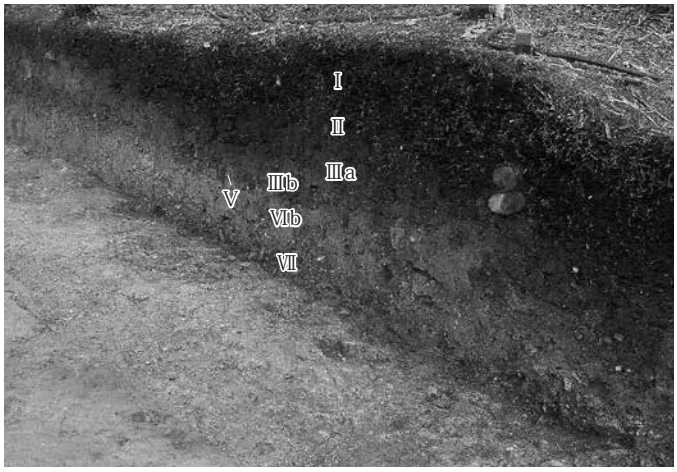
下層完掘（真上から）

三角形岩版（上層出土）

遠景（西上空から）

調査前　調査区近景（西方から：破線は調査範囲）

基本層序１（南壁セクション）



基本層序２（南壁セクション）

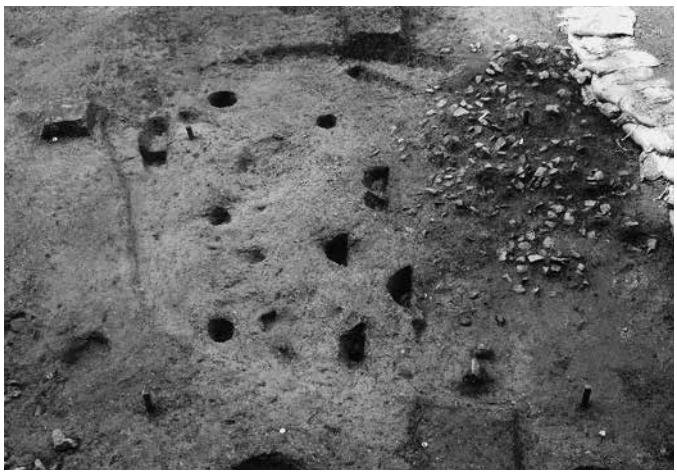
SB1005 完掘（北方から）

SI1006 完掘（南方から）

SI1006 完掘（西方から）

SI1006 東端部東西セクション（南方から）

SI1006 南端部南北セクション（東方から）



SI1007 完掘１（南方から）

SI1007 完掘２（北方から）

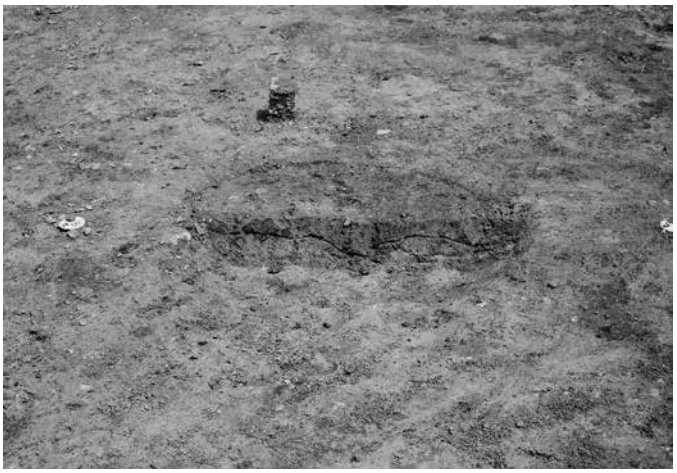
SI1007 南端部南北セクション（西方から）

SI1008・SK1014 完掘（南方から）

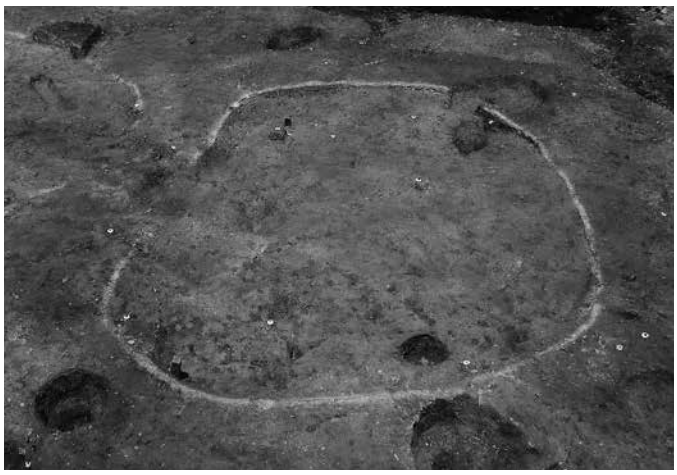
SI1009 完掘（東方から）

SI1010 完掘（北方から）

SI1011 完掘（南方から）

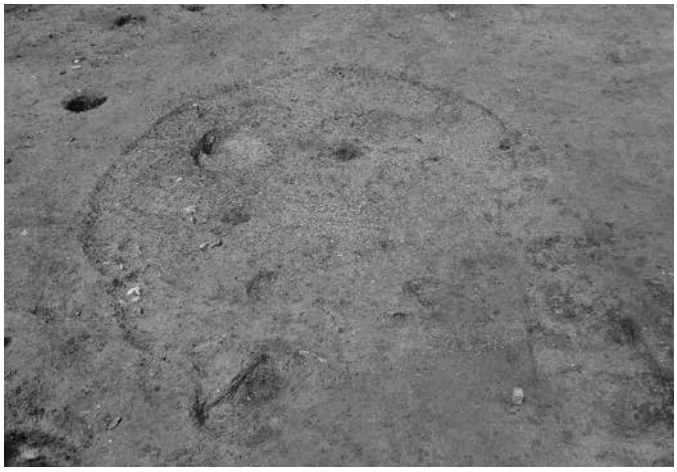


SI1011 炉跡セクション（南方から）



SX1001 完掘（南方から）

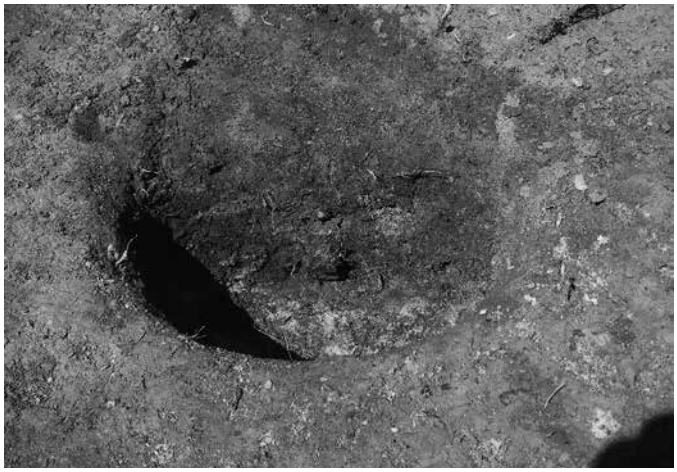
SX1001 セクション及びプラン



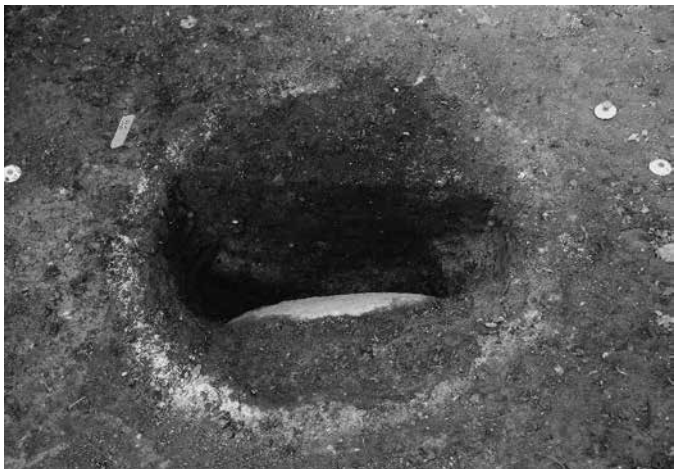
SX1002 完掘（東方から）

SI1009・1011・1008（手前から）と現地打ち合わせ

SK1014 南北セクション（東方から）



P1041 セクション（東方から）



P1025 セクション（西方から）

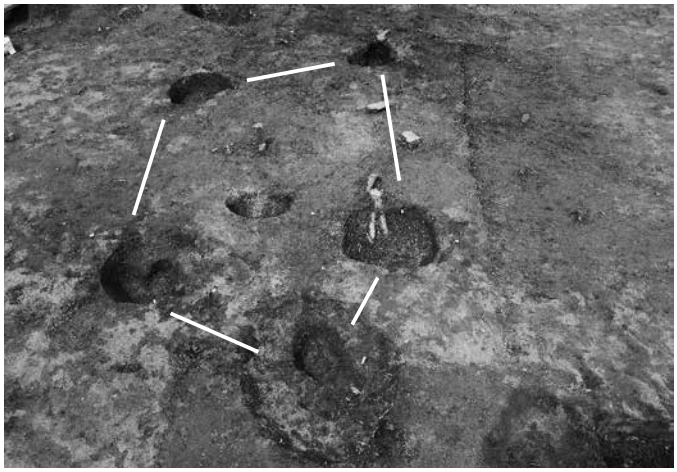
P1025 根固めの状況（西方から）

フレイク集中出土状況

SS1015 セクション（西方から）

SS1016 セクション（西方から）

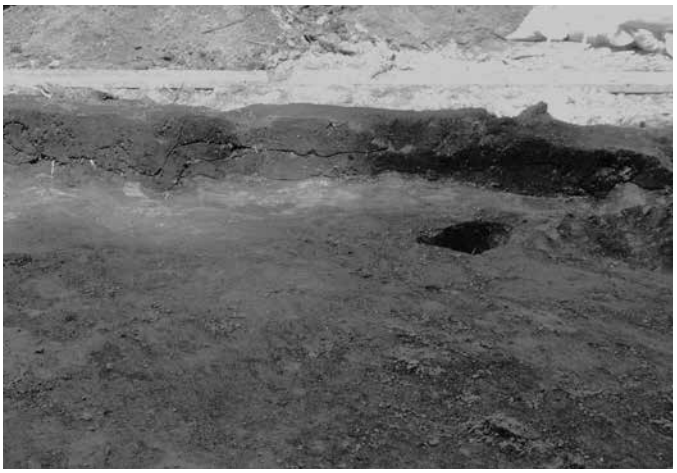
SS1017 出土状況（北方から）



SB66 完掘（東方から）

SI67 完掘（東方から）

SI67 遺物出土状況（南方から）



SI67 南北セクション（西方から）

SI67 土器出土状況（西方から）

SI67 石器出土状況（西方から）

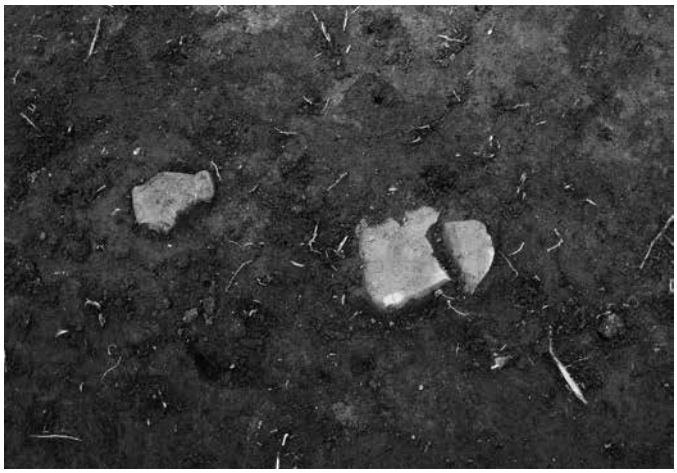
SI67 炉セクション（東方から）

SK68 完掘（北方から）

SK68 セクション（北方から）

SK69 完掘（西方から）

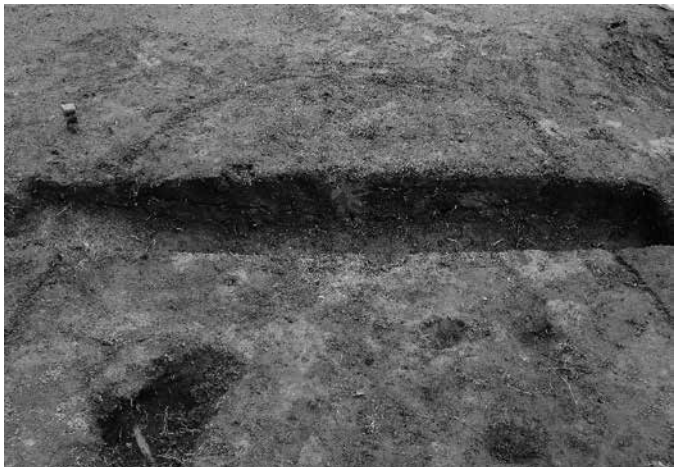
SK69 セクション（北東から）



OW20 区（SK69 周辺）石製品出土状況（西方から）

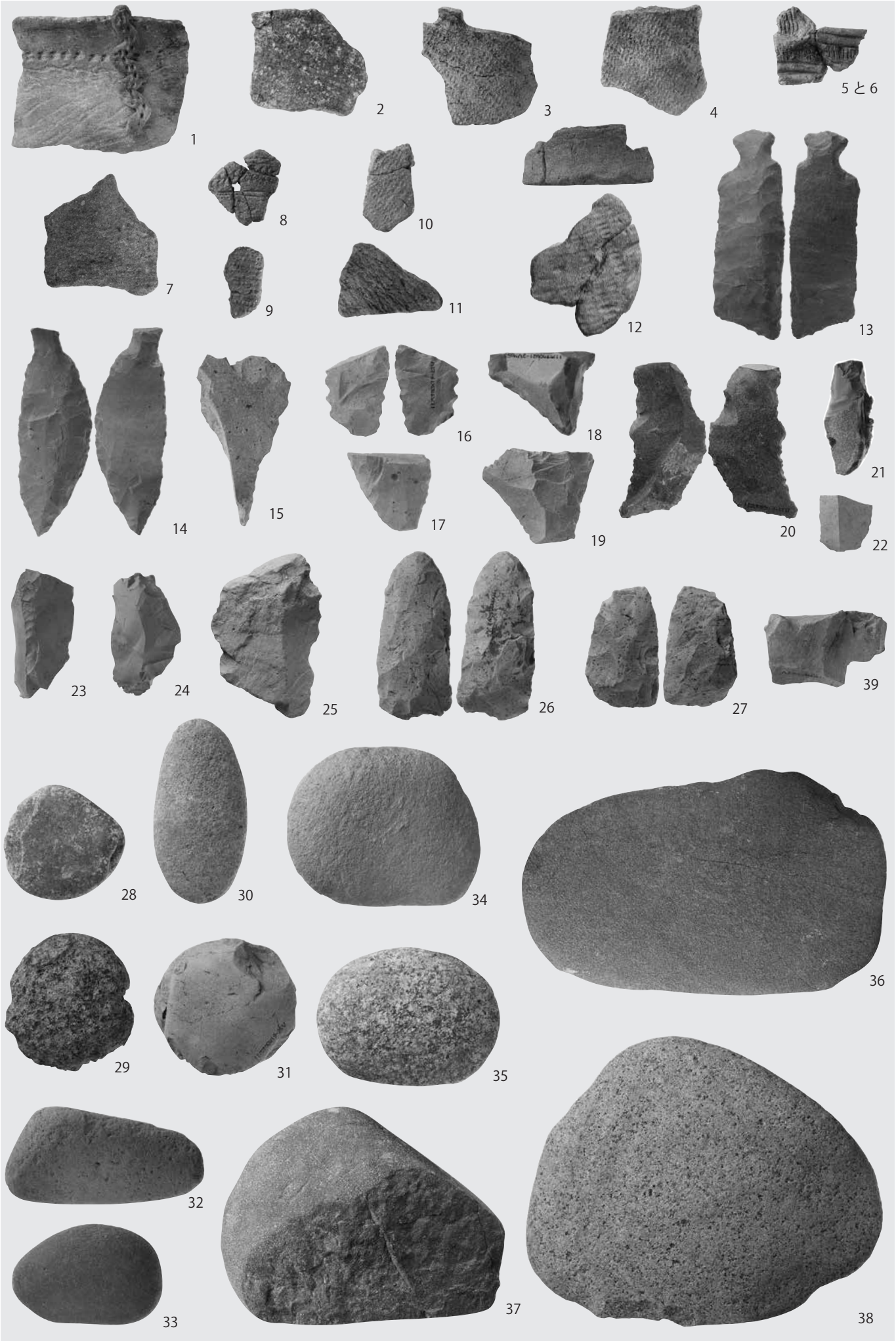
P89 セクション（南方から）

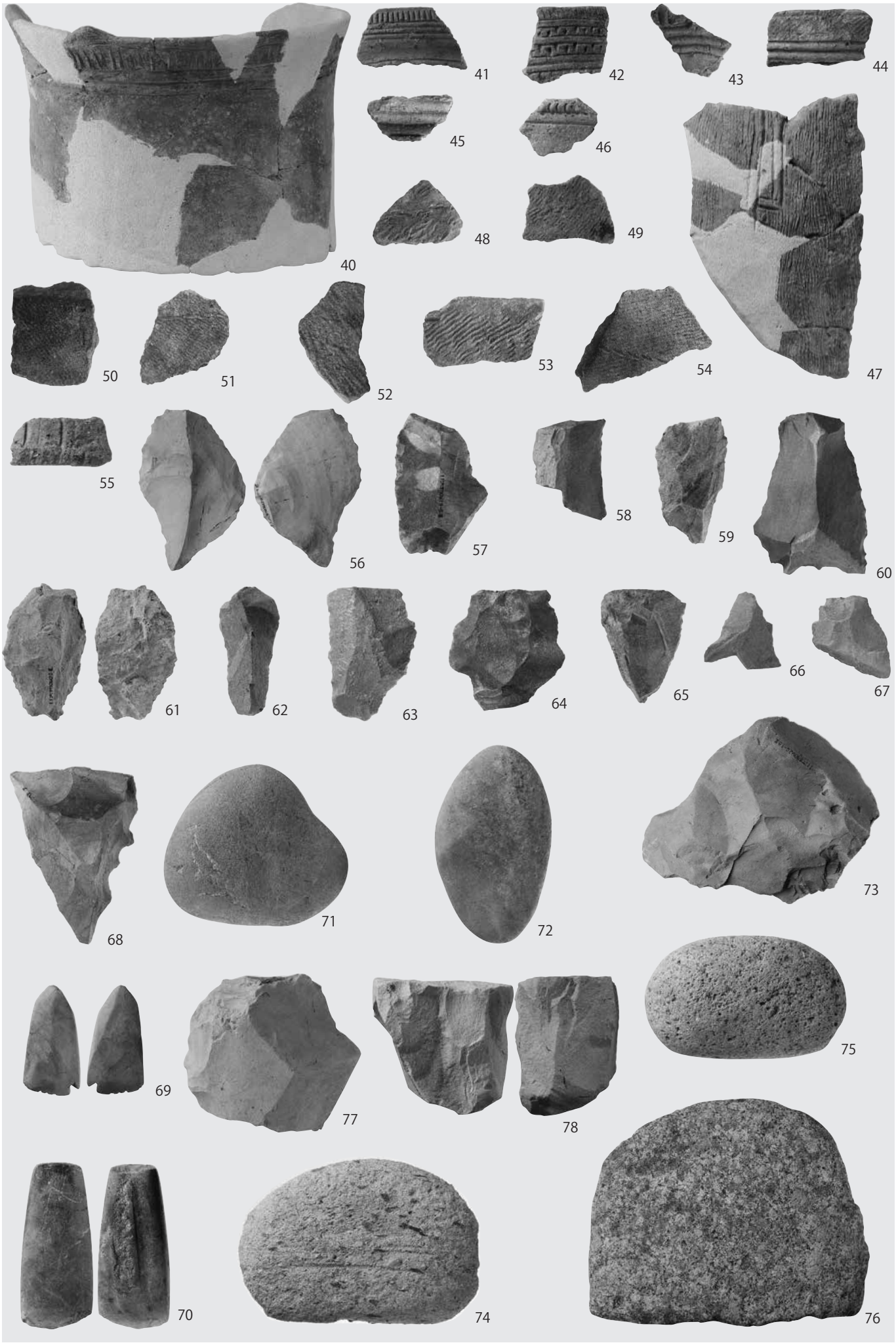
P89 礫出土状況（西方から）



焼土１セクション（西方から）

上層完掘（西方から）


1
2
3
4
5と6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
39
28
30
34
36
29
31
35
32
33
37
38


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78

79

80

84

81

82

83

86

85

0　（79～84・86）　10cm（1:2）

0　（85）　15cm（1:3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおさかうえみちいせき
書名	大坂上道遺跡Ⅲ
副書名	一般国道 49 号揚川改良関係発掘調査報告書
巻次	Ⅴ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 235 集
編著者名	田海義正（埋文事業団）　藤田登（株式会社　古田組）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2012（平成 24）年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおさかうえみちいせき 大坂上道遺跡	にいがたけんひがしかんばらぐんあがまちおおあざにしあざおおさかうえみちにし 新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西 1827 番地	15385	33	37 度 40 分 46 秒	139 度 25 分 47 秒	2011.05.09 ～ 2011.06.22	320 ㎡	一般国道 49 号 揚川改良工事

所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坂上道遺跡	集落跡	縄文時代 前期～中期	竪穴住居 7 竪穴様遺構 2 土坑 3 掘立柱建物 2 集石遺構 6 焼土 2	縄文土器、石器（石匙・石錐・不定形石器・石核・石皿・磨石類）、石製品（三角形岩版）	小規模集落

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 235 集

一般国道 49 号揚川下改良関係発掘調査報告書Ⅴ

大坂上道遺跡Ⅲ

2012 年 3 月 29 日印刷
2012 年 3 月 30 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986
URL　http://www.maibun.net

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950-2022　新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第235集『大坂上道遺跡Ⅲ』　正誤表追加　2021年11月追加

	位置	誤	正
図版31	上から１段目	８０	８２
図版31	上から３段目	８１	８０
図版31	上から３段目	８２	８１

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第235集　『大坂上道遺跡Ⅲ』　　正誤表

頁・行	誤	正
p12・3	部名	部分
p13・29	SI1010	SX1001
p14・20	87.3～87.3m	87.3～87.4m
奥付・2	揚川下改良	揚川改良